

て居られた有様や。おぼくとのみ……一向はきくと
 なさらず。宣ひ置くことも侍らず。御遺言も御
 座いませぬ。かく心強き様に……自殺などこんな
 心強い決意をなさらうとは。さるべきにて……何か然るべき病氣
 などの爲に死なうよりも。いかばかり物を……どんなに決心し
 て。
 これを見つけて……入水する所を見
 つけて押留める事が出来たらよか
 つたらうにと。
 御文を……御文を浮舟様がお焼捨
 てなされた事などに、どうして私
 達は不審を起さなかつたものか、随
 分迂闊で御座いました。
 かの卷數に……浮舟が卷數にお書付
 けなされた母君への返歌巻の侍
 従がお話申上げる。(浮舟の巻の終
 二〇二頁本文及び頭註参照)
 何ばかりの……匂宮は今まで格別何
 とも思召さなかつた侍従をも。
 彼方も……中の君も無關係ではなし、
 お前の御主人の姉妹だからね。
 御はてなど過して……忌中でも済して
 参上致しませう。
 かの御料にとて……浮舟の使用品に
 と思召してお造らせなされた。

れば聞え給はず。寢殿におはしまして、渡殿におろさせ給へり。あり
 けむ様など委しう問はせ給ふに、「日頃思し歎きし様、その夜泣き給ひ
 しさま、怪しきまで言少なにおぼくとのみ物し給ひて、いみじと思
 すことをも、人にうち出で給ふことは難く、物づつみをのみし給ひし
 にや、宣ひ置くことも侍らず。夢にもかく心強き様に思しかくらむと
 は、思ひ給へすなむ侍りしなど、くはしう聞ゆれば、宮はましていと
 いみじく、さるべきにて、ともかくもあらましよりも、いかばかり物を
 思ひ立ちて、さる水におぼほれけむと思しやるに、これを見つけて堰
 きとめたらましかばと、湧き返る心地し給へどかひなし。御文を焼き
 失ひ給ひしなどに、などで目を立て侍らざりけむ」など、夜一夜語ら
 ひ給ふに、聞え明す。かの卷數に書きつけ給へりし母君の返事などを
 聞ゆ。何ばかりの者とも御覽せざりし人の、睦ましくあはれに思さる
 れば、わが許にあれかし、彼方ももて離るべくやは」と宣へば、さて侍
 はむにつけても、物のみ悲しからむを思ふ給ふれば、今この御はてな

様々に……浮舟の爲に色々お造らせ
 になつた品は多かつたが餘り仰山
 らしいので皆は持出さず、只侍従
 に似合つただけを下された次第で
 あつた。記者の註。
 かゝる事ども……こんな頂戴物な
 どのあるのを側の人々は何と思ふ
 だらう、何だか面倒な事だなあ、
 と侍従は困つたけれどどうして辭
 退も出来よう。
 右近と二人……この句の上、侍従の
 宇治に歸つたことを略してある。
 こまかに今めかしう……拜領の品々
 の精巧で華やかに拵へ集めた事な
 どを見るにつけても。
 装束一拜領の衣裳。
 かゝる御服に……こんな喪中に。
 大將殿も……薫も矢張浮舟の死因が
 非常に氣になるので思案に餘つて
 宇治へお出になつた。
 かゝる思ひかけぬ……あんな八宮の
 隠し子見たやうな意外な浮舟まで
 世話をし。
 このゆかりにつけては……八宮御一家
 の事に關しては。
 いと尊く……誠に尊げに思ひ澄して
 居られた八宮のお側に。
 後の世をのみ……後生善處の事ばか
 り心がけてゐたのに。
 心きたなき……後になつて豫期に違

ど過して」と聞ゆ。「またも参れ」など、この人をさへ飽かず思す。曉に
 歸るに、かの御料にとて設けさせ給ひける櫛の箱一具、衣箱一具、贈
 物にせさせ給ふ、様々にせさせ給へりけることは多かりけれど、おど
 ろおどろしかりぬべければ、只この人におほせたる程なりけり。何心
 もなく参りて、かゝる事どものあるを、人々いかゞ見む、すゞろにむ
 つかしき業かなと思ひ侘ふれど、いかゞは聞え返さむ。右近と二人忍
 びて見つ、徒然なるまゝに、こまかに今めかしう仕集めたることど
 もを見ても、いみじく泣く。装束もいとうるはしく仕集めたる物ど
 もなれば、「かゝる御服に、これをいかでか隠さむ」ともてぞわづら
 ひける。
 大將殿も、なほいと覺束なきに、思し餘りておはしたり。道の程より、昔
 の事どもかき集めつ、いかなる契にて、この父親王の御許に來初め
 けむ、かゝる思ひかけぬ果まで思ひ扱ひ、このゆかりにつけては物を
 のみ思ふよ、いと尊くおはせしあたりに、佛をしるべにて後の世をの

ひ大君に懸想するやうになつた心のきたなきを佛様がお慰しなされた。ありけむ様一浮舟の死ぬ前の様子。忌の残も……七七日までの日数も僅になつたからそれが過ぎてからと思つたけれど、辛抱出来ずに出かけて来たのです。いかなる心地にてかは一浮舟はどんな病氣の容態で。尼君なども……辨なども浮舟横死の事情を知つてゐるから、私が黙つてゐても結局薫君はお聞き遊ばさうもの、又生中隠しても誰か間違つた話でも申上げたら却て真相が分らなくならう。以下右近の心。怪しき事の筋にこそ一浮舟様と匂宮様との秘密關係についてこそ。かくまめやかなる……こんな眞面目な薫の御様子に相對しては。ありし様の事……浮舟横死の事情をお話し申上げた。更にあらじと……薫の心。全く有りさうもない事のやうな氣がする。こよなく言少なに……非常に言葉少く應答して大様だつた浮舟様。おどろろしき事……恐しい自殺。如何なる様に……どんな風であらう。近等が取繕つて話すのであらう。宮も……匂宮も悲歎の御様子が大變

み契り聞えしに、心きたなき末の違ひ目に、思ひ知らするなめりとぞ覺ゆる。右近を召し出でて、^薫ありけむ様もはかくしく聞かず、猶盡きせず淺ましうはかなければ、忌の残も少なくなりぬ、過してと思ひつれど、静めあへず物しつるなり。いかなる心地にてかは、俄にはかなくなり給ひにし」と問はせ給ふに、尼君なども氣色見てければ、遂に聞き合はせ給はむを、なか／＼隠しても、言違ひて聞えむにそこなはれぬべし、怪しき事の筋にこそ、空言も思ひ廻らしつ、慣らひしか、かくまめやかなる御氣色に、さし向ひ聞えては、かねて、といはむかくいはむと思ひ設けし言葉をも忘れつ、煩はしう覺えければ、ありし様の事どもを聞えつ。^薫淺ましう思しかけぬ筋なるに、物もとばかり宣はず。更にあらじと覺ゆるかな、なべての人の思ひいふ事をも、こよなく言少なに、おほどかなりし人は、いかでできるおどろろしき事は思ひ立つべきぞ、如何なる様に、この人々もてなしていふにかあらむと、御心も亂れまさり給へど、宮も思し歎きたる氣色いと著し、こゝの有

目立つてゐたし、この邸内の様子も態と拵へた空氣なら自然分る筈だのに、薫の心。こゝの有様一宇治邸の様子。つれなし作り……何喰はぬ顔をした様子は却て自然にその實狀がわかちうが。かくおはしましたる……かう薫が來られたにつけても。御供に具して……浮舟のお供をして共に姿を消した者がありませんか。我を疎なりと……私の仕向けを不足に思つて遁世なさるやうな事は、いかやうなる……どんないふにいへない事情が突發して、そんな自殺などなされたものか。信ずまじき……投身といふことは信じない。さればよと……案の定、委しくお問ひになると、右近は例の秘密に觸れるのを厄介に思つて。もとより……元來思ひも寄らぬ田舎にお育ちなされた浮舟様で、世間離れたこの宇治にお住ひの後、かく渡りおはしますを……こんな風に貴方様がお出下されますのを。もとよりの御身……これまでの身の不運を歎く心まで慰められ。心のどかなる……ゆつくりした氣持で貴方様を度々お見上げ出来るや

様も、しかつれなし作りたらむけはひは、自ら見えぬべきを、かくおはしましたるにつけても、悲しくいみじき事を、上下の人集ひて泣き騒ぐけはひを聞き給へば、御供に具して失せたる人やある。猶ありけむ様を確にいへ。我を疎なりと思ひて、背き給ふことはよもあらじとなむ思ふ。いかやうなる、忽にいひ知らぬ事ありてか、さる業はし給はむ。我なむえ信ずまじきと宣へば、いとほしく、さればよと煩はしくて、^{右近}おのづから聞き召しけむ、もとより思はず様ならで生ひ出で給へりし人の、世離れたる御住居の後、いつとなく物をのみ思すめりしかど、たまさかにもかく渡りおはしますを、待ち聞えさせ給ふに、もとよりの御身の歎をさへ慰め給ひつ、心のどかなる様にて、時々も見奉らせ給ふべきやうに、いつしかとのみ、言に出でては宣はねど、思し渡るめりしを、その御本意かなふべき様に、承はる事ども、侍りしに、かくて侍ふ人ども、嬉しきことに思ひ給へいそぎ、かの筑波山も、辛うじて心ゆきたる氣色にて、渡らせ給はむ事をいとなみ思ひ給へしに、

うに。いつしかとのみ「思し渡る」に係る。その御本意……お望が叶つて貴方様からお迎があるやうに承る事も御座いましたので。

かの筑波山一浮舟の母をいふ。渡らせ給はむ事を……お引移の支度をおいそぐ致して居りましたに。心得ぬ様の御消息一合點ゆかぬ貴方様のお手紙。波こゆるの歌をいふ。前巻二〇四頁本文参照。

女房達亂がはし……侍女達が亂雑不取締だなどと貴方様がお小言仰しやつた事などを申しまして。怪しき様に取りなし……變な工合に邪推して申上げる事などありましたが、その後久しく貴方様のお手紙も絶えましてにつけ。

人数に……人並にどうか立身させて眺めたいとそれのみ考へ。

なか／＼なる事の……生中薫君に思はれた幸運が、末は捨てられて人の物笑にでもなつたらどんなに悲しい事だらうと、浮舟様がさうした方に考へて。

その筋より外に……その事情以外にどんな事を御心配なされたらうと考へて見ますのに分りません。いさ／＼か残る所……何か知ら残る證據もあるものを。

心得ぬ様の御消息侍りけるに、この宿直など仕うまつる者ども、女房達亂がはしかなりなど、戒め仰せらるゝことなど申して、物の心得ず荒々しき田舎人どもの、怪しき様に取りなし聞ゆる事ども侍りしを、その後久しう御消息なども侍らざりしに、心憂き身なりとのみ、いはけなかりし程より思ひ知るを、人数にいかで見なさむとのみ、よろづに思ひ扱ひ給ふ母君の、なか／＼なる事の、人笑はれになり果てば、いかに思ひ歎かむなど赴けてなむ、常に歎き給ひし。その筋より外に何事をかはと、思ひ給へ寄るに堪へ侍らすなむ。鬼などの隠し聞ゆとも、いさ／＼か残る所も侍るなるものをとて、泣く様もいみじければ、いかなる事にかと、紛れつる御心も失せて、堰きあへ給はず。我は心に身をまかせず、顯證なる様にもてなされたる有様なれば、覺束なしと思ふ折も、今近くて、人の心おくまじく、目安き様にもてなして、行末長くをと、思ひのどめつゝ、過しつるを、疎に見なし給ひけむこそ、なかなか分くる方ありけると覺ゆれ。今はかくだにいはじと思へど、又人の

いかなる事にかと……どうした事なのかと薫は疑つてみたお心もなくなつて涙をとめきれない。

我は心に身を……私は思の儘に身を振舞ふ事も出来ず、隠し事など出来ぬやうに仕向けられてゐる有様だから、浮舟を宇治に置いて気がかりに思つてゐた折も、今に近く引取つて浮舟が打解けるやう、人目にも見苦しからぬやうに取扱つて末長く愛してゆかうと。

疎に見なし……私の態度を浮舟が好い加減なものとして居られたのが、却て私へ隔をする氣持があつたやうに思はれます。

又人の……他に人が聞いてゐたらともかく、誰も聞き手がなから話しませう、匂宮との關係さ、あれは何時頃から始つたのですか。

さやうなるに……實にひどく女の心を牽付ける匂宮の事ゆゑ、そんなやうな關係から浮舟が始終匂宮に逢へぬのを苦にして遂に身をも亡したものと、私は思ひます。

確にこそ……さては秘密を確にもう薫がお聞きなされたのだと。

右近も……私も浮舟様のお側にゐない折は御座いませんでしたのに、おのづから聞し召しけむ！自然お聞及びでも御座いませうが。

聞かばこそあらめ。宮の御事よ、いつよりあり初めけむ。さやうなるにつけてや、いと片はに、人の心を惑はし給ふ宮なれば、常にあひ見奉らぬ歎に、身をも失ひ給へるとなむ思ふ。なほいへ、我には更にな隠しそ」と宣へば、確にこそは聞き給ひてけれと、いといとほしくて、いと心憂き事聞し召しけるにこそは侍るなれ。右近も侍はぬ折は侍らぬものを」と詠めやすらひて、「おのづから聞し召しけむ。かの宮の上の御方に忍びて渡らせ給へりしを、淺ましく思ひかけぬ程に、入りおはしましたりしかど、いみじき事を聞えさせ侍りて、出でさせ給ひにき。それにおち給ひて、かの怪しく侍りし所には渡らせ給へりしなり。その後音にも聞えじと思して止みにしを、いかでか聞かせ給ひけむ、只その二月ばかりより、音づれ聞えさせ給ひし。御文はいと度々侍るめりしかど、御覽じ入るゝ事も侍らざりき。いと辱なく、なか／＼うたてあるやうになど、右近など聞えさせしかば、ひと度ふた度や聞えさせ給ひけむ。それより外の事は見給へず」と聞えさせ。かうぞいはむかし、

かの宮の上の御方に一浮舟様が中の
君の御許に。乳母などがひどく
お誂め申上げて、それで匂宮様は
出ていらつしやいました。
怪しく侍りし所一三條の隠れ家。
音にも聞えじと。匂宮には居處も
知らせまいと浮舟様は思召して。
音づれ聞えさせ給ひし一匂宮様が宇
治にいらつしやいました。
いと辱なく。御返事上げぬのは誠
に恐多く却て不都合なやうで御座
いますと私共が申しましたので。
聞えさせ給ひけむ一御返事をお上げ
になりましたか知らん。
かうぞいはむかし一この上聞いても
かうより外いふまい。薫の心。
宮を珍しく。浮舟が匂宮に牽付け
られお慕ひ申しながらも。
わが方を一自分(薫)の方をも。
いと明らむる所なく一自ら判断が出
来なくなつて。
はかなげなりし心一思慮の浅かつた
心。
かく思ひ寄る。入水しようと思付
いた譯であつたらう。
我が此處に。私がこんな處に浮舟
を打捨て、置きさへしなかつたら、
假令ひどく苦しい境遇に落ちたら
とも、何で死を求めて深山の幽谷

強ひて問はむもいとほしくて、つくづくとうち詠めつゝ、宮を珍しく
あはれと思ひ聞えても、我が方を流石に疎には思はざりける程に、い
と明らむる所なく、はかなげなりし心にて、この水の近きを便にて、か
く思ひ寄るなりけむかし、我が此處にさし放ちすゑざらましかば、い
みじう憂き世に經とも、いかでか必ず深き谷をも求め出でまし、いみ
じく憂き水の契かなと、この川の疎ましよう思さるゝこといと深し。年
頃あはれと思ひそめたりし方にて、荒き山路を歩き返りしも、今はま
た心憂くて、この里の名をだにも、え聞くまじき心地し給ふ。宮の上の
宜ひはじめし人形とつけたりしさへゆゝしく、只我が過ちに失ひつ
る人なりと、思ひもてゆくには、母のなほ輕びたる程にて、後の後見も
いと怪しく、事そぎてしなしけるなめりと、心ゆかず思ひつるを、委
しく聞き給ふになむ、いかに思ふらむ、さばかりの人の子にては、いと
めでたかりし人を、忍びたる事は必ずしもえ知らで、我がゆかりに如
何なる事のありけるならむ、とぞ思ふらむかしなど、よろづにいとほ

を尋ねには出まい、と思へば誠に
嫌なこの水との縁だつたわいな。
年頃あはれと。年來可愛く思つた
大君や浮舟の爲に。
宮の上の。嘗て中の君が浮舟の事
を話出された時人形と名をつけた
のも縁起わるく。祇の人形は水に
流すものゆゑいふ。
只我が過ちに。全く私自身の過失
ゆゑに死なせた女だと。
母のなほ輕びたる。浮舟の母が矢
張輕い身分で、罪儀廻向も甚だ簡
略にしたのだらうと、薫は不満足
に思つて居られたが、事情を委細
に承知したので。
いかに思ふらむ。浮舟の母が何と
思ふだらう、あれ位の母の子とし
ては誠に勝れてゐた浮舟だつたが、
匂宮との秘密關係などは母はきつ
と知らずに、浮舟の死は私との交
渉の上になつた事であつた。
の事か、例へば女二宮の嫉妬でも
甚しかつたのでないかと思つてゐ
ようわい。以下薫の心。
穢らひと。浮舟はこの家で死んだ
榻一軍の轎を置く臺。
われもまた。ゆかしい人々は皆亡
くなつたし、自分も亦この心外な
宇治の里を訪はなくなつたら、こ



蜻蛉

の邸は荒れて誰が宿木の蔭に昔を
 偲ぶ者があらうか。
 阿闍梨一向の山寺の阿闍梨。
 律師僧都に次ぐ僧官。
 この法事のこと……浮舟の法事の事
 を薫がお命じになる。
 罪いと……自殺は誠に罪障深いもの
 と薫は思召すので、その罪の軽く
 なるやうな追善をしよう。
 在らましかば……浮舟が生きてゐた
 ら今夜は何でこの儘京へ歸らうか
 と薫は思召す。
 尼君一辨の尼。
 疾く迎へ取り給はず……早く浮舟を
 京に引取らなかつた事が悔しく。
 死骸をだに……浮舟の死骸すら捜し
 出さずに。
 うつせ……うつせ貝、即ち貝殻。
 かの母君……浮舟の母君。
 京に子生むべき……京の常陸介郎で
 は次女の出生について死者の穢を
 忌んでやがましういふので、その
 本邸にも歸られず。
 又これも如何ならむ……又この娘の
 産の様子もどうかと心配したが。
 ゆゝしければ……死者の穢で不吉だ
 から産婦の所へ行かれず、他の子
 供達の事も考へられず。
 大將殿……薫。
 浅ましき事は……驚くべき浮舟の死

しく思す。
 穢らひといふ事はあるまじけれど、御供の人目もあれば、のぼり給は
 で、御車の榻を召して、妻戸の前にぞ居給へりけるも見苦しければ、い
 と繁き木の下に、苔を御座にて、とばかり居給へり。今はこゝを來て見
 むことも心憂かるべしと、見めぐらし給ひて、
 一薫 われもまた憂きふる里を荒れはてば
 誰やどり木のかげを忍ばむ」
 阿闍梨は今律師なりけり。召して、この法事のこと掟てさせ給ふ。念
 佛の僧の數添へなどさせ給ふ。罪いと深かなる業と思せば、輕むべ
 き事をぞすべきと、七日七日に經佛供養すべきよしなど、こまかに宣
 ひて、いと暗うなりぬるに歸り給ふも、在らましかば、今宵歸らましや
 はとのみなむ。尼君に消息させ給へれど、いとものゆゝしき身を
 のみ思ひ給へ沈みて、いと物も覺え給へられず、ほれ侍りてなむ、う
 つぶし臥して侍る」と聞えて、出で來ねば、強ひても立ち寄り給はず。

についでには、第一に貴女にお見舞
 申上げようと存じましたに。
 まいて如何なる間に……まして親の
 貴女はどんなに子故の間に……
 歎いて居られる事かと察して。
 思ひの外にも……歎の爲に死にもせ
 らず意外にも私が生きてゐましたら、
 亡き浮舟の形見と思つて必ず何彼
 の折にはお尋ね下さい。
 大藏の大夫……仲信。
 心のどかに……何もかも暢氣に構へ
 て引取りもせず年も過ぎたので、
 私の愛情が必しも深いとは思召さ
 なかつたでせう。
 忘れ閑えじ……貴女を忘れますまい。
 又さやうに……貴女も亦さう内々
 思召して下さい。をは歎辭。
 をさなき人共も……貴女は子供達も
 おありだから……
 必ず後見……きつと私が後楯をして
 上げませうよ。
 言葉にも……使の口上ででも。
 いたくしも……本當の死體に觸れた
 のでないのひどく嫌ふにも及ば
 ぬ穢だから、母君は大して穢に觸
 れてゐませんからなどいひ辯つて、
 強ひて仲信を呼び入れた。
 いみじき事に……えらい目を見ても
 死にもせず居ります自分の命を
 心外に存じて歎いてゐますのに、

道すがら、疾く迎へ取り給はずなりにける事悔しう、水の音の聞ゆる
 かぎりには心のみ騒ぎ給ひて、死骸をだに尋ねず、浅ましくても止みぬ
 るかな、いかなる様にて、いづれの底のうつせにまじりけむなど、遣る
 方なく思す。
 かの母君は、京に子産むべき女の事により、つゝしみ騒げば、例の家
 にもえいかず、すぐろなる旅居のみして、思ひ慰む折もなきに、又こ
 れも如何ならむと思へど、平かに産みてけり。ゆゝしければえ寄らず、
 殘の人々のうへも覺えず、ほれ惑ひて過すに、大將殿より御使忍びて
 あり、物覺えぬ心地にも、いと嬉しくあはれなり。
 一薫ノ文 浅ましき事は、まづ
 聞えむと思ひ給へしを、心ものどまらず、目も暗き心地して、まいて如
 何なる間にか惑はれ給ふらむと、その程を過し侍りつるに、はかなく
 て日頃も經にける事をなむ、世の常なさも、いと思ひのどめむ方な
 くのみ侍るを、思ひの外にも永らへば、過ぎにし名殘とは、必ずさる
 べき事にも尋ね給へなど、こまかに書き給ひて、御使には、かの大藏

蜻蛉

こんな御深切なお詞を戴かうが爲にまだ命があつたものか知らんと存じます。
 それは数ならぬ……それは母なる私
 が賤しい罪であんな田舎に置かれ
 るのだと觀念致しまして。
 辱なき御一言を京へ迎へてやると
 の勿體ないお言葉を。
 いふかひなく見給へ……空しく浮舟
 を死なせてしまつた今は、宇治と
 いふいやな土地の名の因縁づくも
 誠につらく悲しう御座います。宇
 治に憂(ウ)を懸けるは古い慣例。
 今暫し……今暫く私が生きてゐたら
 子供等の宮仕について仰に甘え
 て、この上お縫り申さうにと存じ
 ますにつけても、今は差當つての
 悲みで涙にくれました。
 御使に……御使に並々の祿を與へた
 のでは不體裁だし、母君自身でも
 不足な氣持がしさうだから。
 かの君に……石の代りに斑紋ある犀角
 を鑲めた石帯。
 昔の人の御志……浮舟の形見。
 殿に……仲信が歸つて蕭にお目にか
 けると。
 すいろなる業かなとよせばよい事
 をと。
 言葉には……仲信が復命の言葉には。

の大夫をぞ遣はしける。心のどかによろづを思ひつゝ、年頃にさへな
 りにける程、必ずしも志あるやうには見給はざりけむ。されど今より
 後、何事につけても必ず忘れ聞えじ。又さやうに人を人知れず思ひおき
 給へ。をさなき人共もあなるを、朝廷に仕うまつらむにも、必ず後
 見思ふべくなむなど、言葉にも宣へり。いたくしも思むまじき穢ら
 ひなれば、深うも觸ればはずなどいひなして、せめて呼びすゑたり。
 御返り泣く……書く。いみじき事に死なれ侍らぬ命を、心憂く思ひ給
 へ歎き侍るに、かゝる仰言見給ふべかりけるにやとなむ。年頃は心細
 き有様を見給へながら、それは数ならぬ身の怠りに思ひ給へなしつ
 つ辱なき御一言を、行末ながく頼み聞えさせ侍りしに、いふかひなく
 見給へ果て、は、里の契もいと心憂く悲しくなむ。様々に嬉しき仰言
 に命延び侍りて、今暫し永らへ侍らば、なほ頼み聞えさせ侍るべきに
 こそと、思ひ給ふるにつけても、目の前の涙にくれ侍りて、え聞えさせ
 遣らすなむなど書きたり。御使になべての祿などは、見苦しき程なり。

自ら逢ひ侍り……母君自身で私にお
 逢ひ下されまして。
 幼き者どもの事……蕭君が子供等の
 事まで深切に仰しやつて下された
 のが誠に勿體ないのに、まだ子供
 等は低い地位でお頼み申すも却て
 恥かしい次第です、何の縁故でと
 いふやうな事は誰にも知らせず、
 見苦しい子供等を皆蕭君の御殿に
 御奉公に差上げませう。
 げに殊なる事なき……成程母の言葉
 の通りあの子達を世話するのは餘
 りぞつとせぬ縁者付合ひではある
 が、けれど。
 さばかりの人の……常陸介位の身分
 の者の娘をお妾に上げぬ事もない。
 さるべきにて……さうした宿縁でそ
 の娘を御寵愛遊ばすのを。
 たい人は……平人にして、賤し
 い女や一旦人の物になつた女を。
 かの守の……浮舟は實は八宮の姫君
 だが、人が常陸介の娘だと噂して
 も、元々本妻でないから私の行爲
 にその爲取がつく事はあるまい、
 若し暇になるなら成程身分低い女
 を愛するのはよくあるまいが。
 一人の子を……浮舟を空しく死なせ
 て歎いてゐる母の心に、矢張浮舟
 の縁ゆゑ今も蕭に關係があつて肩
 身が廣いと感ずる位の深切は、私

飽かぬ心地もすべければ、かの君に奉らむと心ざして持たりける、よ
 き斑犀の帯、太刀のをかしきなど袋に入れて、車に乗るほど、これは
 昔の人の御志なり」とて、贈らせてけり。殿に御覽せさせれば、「いとす
 ずろなる業かな」と宣ふ。言葉には「自ら逢ひ侍りたうびて、いみじく
 泣く……よろづの事宜ひて、幼き者どもの事まで仰せられたるがい
 とも畏きに、まだ數ならぬ程は、なか……いと恥かしくなむ。人に何
 故などは知らせ侍らで、あやしき様どもをも、皆參らせ侍りて侍はせ
 む」となむ物し侍りつる」と聞ゆ。げに殊なる事なきゆかり睦びにぞ
 あるべけれど、帝にもさばかりの人の女奉らずやはある、それにさる
 べきにて時めかし思さむをば、人の誘るべき事は、たゞ人はた、あや
 しき女、世に舊りにたるなどを用ゐるたぐひ多かり。かの守の女なり
 けりと、人のいひなきむにも、我がもてなしの、それに汚るべくあり
 そめたらばこそあらめ、一人の子を徒らになして思ふらむ親の心に、
 猶このゆかりこそ面正しかりけれど、思ひ知るばかりの用意は、必ず

蜻

蛉

として是非見せてやるべきだと
 蕭は思召す。
 彼處には今母君のゐる三條の家。
 折しもかくて……娘の出産といふ時
 はかなき様にて……常陸介は浮舟が
 つまらぬ境遇であるだらうと。
 京に……蕭が京にお引取下され
 た曉には、浮舟も立派になりまし
 てねえなどと、母君は夫に知らせ
 ようと思つてゐた中に、こんな悲
 しい事になつたので。
 よき人畏く……常陸介は貴人を尊崇
 して田舎者らしく有難がる人で。
 殿人にて蕭君の御家來で。
 若き者どもの事……子供達の事を。
 おはせまし世には……浮舟存命の頃
 は却てこんな常陸介の子供達など
 を蕭はお尋ねなさる理窟もなかつ
 た處が御自分の失錯で浮舟を死な
 せたのも可愛さうだ、親を慰めて
 やらうと思召す爲に、人の謗も構
 はず親切に子供までを世話しよう
 と思召した。
 いかになりけむ事……どうなつた
 事やら或は生きてゐはせぬかと思
 召すか。思せどは原文「思せば」と
 ある。宣長説による。
 とてもかくても……何れにしても法
 事は悪くない事だから。

見すべきこと、思す。
 彼處には、常陸守立ちながら来て、
 折しもかくて居給へることなど
 腹立つ年頃いづくになむおはすると、
 ありのまゝにも知らせざりけ
 れば、はかなき様にておはすらむと思
 ひひけるを、京になど迎へ給
 ひてむ後、面目ありてなど知らせむ
 と思ひける程に、かゝれば、今は
 隠さむもあいなくて、ありし様泣く
 語る。大將殿の御文ども取り
 出でて見す、よき人畏くして、鄙
 び物めでする人なれば、驚き臆して、
 うち返しうち返し、いとめでたき御
 幸を捨て、失せ給ひにける人か
 な。おのれも殿人にて參り仕うまつ
 れども、近く召し使ひ給ふ事もな
 く、いと氣高くおはする殿なり。若
 き者どもの事仰せられたるは、頼も
 しきことになむなど喜ぶを見るにも、
 ましておはせましかばと思ふ
 に、伏しまろびて泣かる。守も、今
 なむうち泣きける。さるは、おはせ
 まし世には、なか／＼かゝる類の人
 しも尋ね給ふべきにしもあらずか
 し。わが過ちにて失ひつるもいとほ
 しく、慰めむと思すによりなむ、人

六十僧法事に與る六十人の僧。
 事ども添へたり……追善の事を更に附
 加へてなされた。
 宮よりは……句宮からは。
 右近が志……句宮のを右近の志のや
 うにして手向けたので。
 いかでかくなど……どうしてこんなに
 大した事をなさいますかなど。
 殿の人ども……蕭の家來達で浮舟の
 處に親しく出入した者は皆法事の
 場所には遣はされた。
 あやしく音も……變な一向開いた事
 もなかつた女の法事を。
 あるじがりを……常陸介は表面上
 浮舟の父親だから。
 少將の子産ませて……常陸介は娘に
 少將の子を産ませてすばらしい出
 産祝をしようと奔走し。以下常陸
 介の心。
 唐土新羅のかざり……結構な舶來物
 飾。
 限あれば……身分が身分ゆゑ大した
 事もなかつた。
 忍びたるやうに……蕭は内々の積り
 で産まれたのであるけれど。
 生きたらましかば……生きてゐたら
 我が實子は及びもつかぬ浮舟の御
 幸運だわいと常陸介は思ふ。
 宮の上も……中の君も布施を寄贈な
 され、七僧への養應をなされた。

の誘知らず、懇に尋ねむと思しける。
 四十九日の業などせさせ給ふにも、
 いかゞなりにけむ事にかと思せ
 ど、とてもかくても罪得まじき事な
 れば、いと忍びて、かの律師の寺に
 てなむせさせ給ひける。六十僧の
 布施など、おほきに掟てられたり。
 母君も來居て、事ども添へたり。宮
 よりは右近がもとに、白銀の壺に黃
 金入れて賜へり、人見咎むばかり
 大きな業はえし給はず。右近が志
 にしたりければ、心知らぬ人は、
 いかでかくなどいひける。殿の人
 ども、睦まじきかざり數多たまへり。
 あやしく、音もせざりつる人の
 は、てを、かく扱はせ給ふ、誰なら
 む」と、今驚く人のみ多かるに、常
 陸守きて、心もなくあるじがりを
 るなむ怪しと、人々見ける。少將の
 子産ませて、嚴めしき事せさせむ
 と惑ひ、家の内になき物は少なく、
 唐土新羅のかざりをもしつべきに、
 限あればいと怪しかりけり、この
 御法事の忍びたるやうに思したれど、
 けはひこよなきを見るに、生きたら
 ましかば、わが子に竝ぶべくもあらぬ
 人の御宿世なりけりと思ふ。宮の上
 も

蜻

蛉

七僧、誦師、讀師、呪願、三禮、唄師、散華、堂連の僧をいふ。かゝる人持給へりけり。蕭は浮舟といふ隠し妻を持つて居られた。疎にも……並大抵でもなく愛してゐた浮舟を、女二宮に蕭が御遠慮なされて。二人の人、蕭と匂宮。舊りず悲し、浮舟の事が何時までも新しい悲みである。宮は……匂宮は切ない愛の最高潮に達した時浮舟に死なれたのは非常に悲しいけれど、浮氣なお心では、かうもしたら慰まうかと他の女に關係して御覽になる事も段々あるやうになつた。かの殿は……蕭は取り切つて。残の人、常陸介の子供達。かひなき事、浮舟の失せた事。後の宮の御輕服……明石中宮が御叔父式部卿宮の喪にある中は矢張六條院にいらつしやるが。二の宮、第二皇子、匂宮の兄君。參り給はず、御母中宮の許に。この宮は、匂宮は。一品の宮、女一宮、匂宮の姉宮。よき人の容貌をも……美しい女一宮の侍女達の姿をも、匂宮は場合が場合でよく御覽なさる事も出来ぬのが残念である。

誦經し給ひ、七僧の前の事もせさせ給ひけり。今なむかゝる人持給へりけりと、帝まで聞し召して、疎にもあらざりける人を、宮に畏まり聞えて隠しおき給へりけるを、いとほしと思しける。二人の人の御心の中、舊りず悲し。宮はあやにくなりし御思の盛に、かき絶えてはいとみじけれど、あだなる御心は慰むやなど、試み給ふこともやう／＼ありけり。かの殿は、かく取り持ちて何やかやと思して、残の人をはぐくませ給ひても、猶いふかひなき事を忘れ難く思す。後の宮の御輕服の程は、猶かくておはしますに、二の宮なむ式部卿になり給ひにける重々しうて、常にしも參り給はず。この宮はさう／＼しく物あはれなるまゝに、一品の宮の御方を慰め所にし給ふ。よき人の容貌をも、えまほに見給はぬ、残おほかり。大將殿の辛うじていと忍びて語らひ給ふ小宰相の君といふ人、容貌なども清げなる、心ばせある方の人と思されたり。同じことを掻きならす爪音も撥音も、人にはまさり、文を書き物うちいひたるも、よしある節をなむ添へたりける。

大將殿、蕭。小宰相の君、女一宮の侍女。この宮も年頃……匂宮も年來小宰相を大變よい女と思召して、例の癖で蕭の戀の邪魔をして自分に靡けようとなさるが。なかさしも……何のさう平凡に靡かうかと小宰相が手厳しく撥ねつけて匂宮を悔しがらせるのを、實直な蕭は多少普通より立勝つた女だと思召すのであつた。あはれ知る……貴方の悲みに御同情申上げる心は人に劣りませぬが、つまらぬ私ゆゑわざと御挨拶も致さず引込んで過して居ります。代へたらば、私が浮舟様の代りに死んだらよかつたでせうに。故ある紙、趣ある紙。よく推し量りて……悲歎にくれさうな場合を旨く察して見舞つたのも、常なしと……多くの實例を経験して無常なこの世だと感じてゐる私でも、人の氣づく程未練に歎きはせぬ積りだのに、よくも推量して慰めてくれましたねえ。この喜……このお禮を、場合が場合でまあ一層嬉しく思ひましたなどいひに小宰相の許に立寄られた。いと恥かしげに……蕭の風采は誠に立派で重々しく、一體、こんな局

この宮も、年頃いといたきものにし給ひて、例のいひやぶり給へど、なかさしも珍しげなくはあらむと、心強くねたき様なるを、まめ人は、少し人よりは異なりと思すになむありける。かく物思したる様も見知りければ、忍び餘りて聞えたり。
小宰相「あはれ知る心は人におくれねど
 數らなぬ身に消えつゝ、ぞ經る
 代へたらば」と、故ある紙に書きたり。物あはれなる夕暮、しめやかなる程を、いとよく推し量りていひたるも憎からず。
蕭「常なしとこゝら世を見るうき身だに
 人の知るまで歎きやはする」
 この喜、あはれなりし折からも、いとどなむなど、いひに立ち寄り給へり。いと恥かしげに物々しげにて、なべてかやうになども慣らし給はぬ人柄もやむことなきに、いと物はかなき住居なりかし。局などいひて、狭く程なき遺戸口に寄り居給へる、かたはら痛く覺ゆれど、流石

這入なども餘りなさらぬお人柄も氣高いのに。局などいひて……それは女部屋などいつて小さく仕切つた間。見し人よりも一浮舟よりも。などてかく……何でこんな奉公に出た事だらうか、愛人として私でも圍つて置いてよいものをと薫は思召す、然し内々の關係は一寸でも人にお見せなさらぬ。御八講せらるゝ明石中宮が法華八講をお誓みなされた。八講は上卷三八〇頁の頭註参照。六條院一源氏。五卷の日一上卷三八一頁頭註参照。當日薪の行道(上卷三八一頁、中卷一四三四頁頭註参照)がある。女房につきつゝ……女房に手筈を求めて參詣して。五日といふ……五日目の朝講座で八講の法會が終つて。御堂の飾取りさけ……法事の假御堂にした室内裝飾を取り退け。皆入り立ちて……大勢入込んで室内を取片附ける間。姫宮一女一宮。物聴き困じて一説法聽問に草臥れて。御前は一女一宮の御前は。大將殿一薫。必ず宜ふべき……是非仰しやらねば

にあまり卑下してもあらで、いとよき程に物なども聞ゆ。見し人よりも、これは心にくき氣添ひてもあるかな、などてかく出で立ちけむ、さる者にて我も置いたらましもものをと思す。人知れぬ筋はかけても見せ給はず。蓮の花の盛に御八講せらる。六條院の御爲、紫の上など、皆思し分けつ、御經佛など供養せさせ給ひて、嚴めしく尊くなむありける。五卷の日などは、いみじき見物なりければ、こなたかなた、女房につきつゝ、参りて、物見る人多かりけり。五日といふ朝座に果て、御堂の飾取りさけ御しつらひ改むるに、北の廂も、障子ども放ちたりしかば、皆入り立ちてつくるふ程、西の渡殿に姫宮おはしましたけり。物聴き困じて、女房もおのゝ局にありつゝ、御前はいと人少ななる夕暮に、大將殿直衣著換へて、今日まかづる僧の中に、必ず宜ふべき事あるにより、釣殿の方におはしたるに、皆まかづれば、池の方に涼み給ひて、人少ななるに、かくいふ宰相の君など、かりそめに几帳などばかり立て、う

ならぬ事があるので。皆まかづれば一僧達が皆退出してしまつたので。かくいふ宰相の君一上に述べた小宰相の君。上局にしたり一控部屋にした。此處にやあらむ一小宰相は此處にゐるのか。馬道一殿内の中廊下。例さやうの人の……平素女房達のゐる處らしい雑然たる様子もなく、あたりをかりりと取片附けてある。唐衣一婦人の上衣で禮装。汗衫一童女の上衣。御前は……女一宮の御前は薫は思つていらつしやらぬのに。白き羅の御衣著給へる人一これが即ち女一宮。手に氷を……女房達が手に氷を持ちながらかうして騒ぐのを。こちたき御髪一うるさい程澤山ある髪。こゝらよき人を……薫は澤山美人を見て来たけれど、この人には似もつかぬと思召す。御前なる人は一女房達はこの人に比べると。土などの……長恨歌傳に「粉色如土」、薄色なる裳著たる人一これは即ち小

ち休む上局にしたり。此處にやあらむ、人の衣の音すと思して、馬道の方の障子のほそく明きたるより、やをら見給へば、例さやうの人の居たるけはひには似ず、晴れしくしつらひたれば、なかゝ几帳どもの立てちがへたるあはひより、見通されてあらはなり。氷を物の蓋に置いて割るとて、もて騒ぐ人々、大人三人ばかり童とゐたり。唐衣も汗衫も著す、皆うち解けたれば、御前とは見給はぬに、白き羅の御衣著給へる人の、手に氷を持ちながらかく争ふを、すこし笑み給へる御顔、いはむ方なく美しげなり。いと暑さの堪へ難き日なれば、こちたき御髪の苦しう思さるゝにやあらむ、少しこなたに靡かして曳かれたる程、譬へむものなし。こゝらよき人を見集むれど、似るべくもあらざりけりと覺ゆ。御前なる人は、まことに土などの心地ぞするを、思ひしづめて見れば、黄なる生絹の單衣、薄色なる裳著たる人の、扇うち使ひたるなど、用意あらむはやと、ふと見えて、なかゝ物扱ひにいと苦しげなり。只さながら見給へかし」とて、笑ひたるまみ、愛敬づきたり、聲

宰相。薄色は紫の薄色。用意あらむはやと。他の女房達よりもたしなみがあるわいと。なか／＼物扱ひに……涼を取る爲に水を弄んでそんなに大騒しては却て厄介ですよ。

この志の人とは……豫て愛する小宰相だと薫がお氣付になつた。心強く割りて……それでも女房達は遮二無二水を割つて。

この人は……小宰相は。御前にも……女一宮へも。拭はせ給ふ……女一宮が包んだ儘の水で手をお拭かせなさる。持たらじ……持つてゐるのはよしませう、雫が厄介です。

我も物の心も知らで……薫自身もまだ頭はなくて。

この御前は……女一宮の御様子。例の安からず……又大君や浮舟の時のやうに私に煩悶させようといふのだらうかと、一面不安ながら女一宮を見つめて立つてゐる間に、この障子は……薫の覗いて居られる障子は、先刻急いだ事とて明け放した儘で自分の部屋に退出した事を見つけられて小言いはれるかも知れぬと思つたので、あたふたやつて来た。

聞くにぞ、この志の人とは知りぬる。心強く割りて、手ことに持たり、頭にうち置き胸にさしあてなど、様あしうする人もあるべし。この人は紙につゝみて、御前にもかくて參らせたれば、いと美しき御手をさしやり給ひて、拭はせ給ふ。いな持たらし。雫むつかし」と宣ふ御聲、いとほのかに聞くも限なくうれし。またいと小さくおはしまし、程に、我も物の心も知らで見奉りし時、めでたの兒の御様やと見奉りしその後、絶えてこの御前はひをだに聞かざりつるものを、いかなる神佛のかゝる折見せ給へるならむ、例の安からず、物思はせむとするにやあらむと、且は靜心なくて、まもり立ちたる程に、こなたの對の北面に涼みける下藤女房の、この障子はとみの事にて開けながら下りにけるを思ひ出でて、人もこそ見つけて騒がるれと思ひければ、惑ひ入る。この直衣姿を見つくるに、誰ならむと心騒ぎて、おのが様見えむことも知らず、寶子よりたゞ來に來ればふと立ち去りて、誰とも見えじ、すき／＼しきやうなりと思ひて、隠れ給ひぬ。この御許は、いみ

この直衣姿……薫の。おのが様……自分の姿の見られるのも構はず。

この御許……この下藤女房。いみじき業かな……大變な事をしたものだなあ。以下女房の心。左の大殿の……障見したのは夕霧の御子息達だらう。

物の聞えあらば……障見した男があるなどいふ噂が立つたら。必ず出で來なむ……きつと吟味が始るであらう。

生絹……練らぬ絹。夏の服地に用ゐる。え人も聞きつけ給はぬ……衣摺の音が殆どせぬので、女房達も氣附かなかつたのであらうよと思つて。

かの人……薫は。やう／＼……聖に……自分は段々道心が進んで來たのに、一旦大君の爲に意馬を狂はせて以來中の君、浮舟、小宰相、今又女一宮に心を動かして色々煩悶を重ねる人になつたものだなあ。以下薫の心。

なぞて年頃……何で年來女一宮を見たいと思つたらう、見て却て苦痛を増す果敢ない片思だのに。つとめて……翌朝早く薫は自邸でお起きになつた。

女宮……女二宮。これより必ず……女二宮よりも女一

じき業かな、御几帳をさへあらはに引きなしてけるよ、左の大殿の君達ならむ、疎き人はた此處まで來べきにもあらず、物の聞えあらば、誰か障子はあけたりし」とか、必ず出で來なむ、單衣も袴も生絹なめりと見えつる人の御姿なれば、え人も聞きつけ給はぬならむかしと、思ひ困じてをり、かの方は、やう／＼……聖になりてし心を、一節違へそめて、様々なる物思ふ人ともなるかな、そのかみ世を背きなましかば、今は深き山に住みはて、かく心亂らましやはなど、思し續くるも安からず。なぞて、年頃見奉らばやと思ひつらむ、なか／＼苦しうかひなかるべき業にこそと思ふ。

つとめて起き給へり。女宮の御容貌いとをかしげなめるは、これより必ず勝るべきことかはと見えながら、更に似給はずこそありけれ、淺ましきまであてに薫り、えもいはざりし御様かな、片へは思ひなしか、折からかと思して、いと暑しや。これより薄き御衣奉れ。女は例ならぬ物著たるこそ、時々につけてをかしけれ」とて、あなたに參りて、

宮が必ず美しいと極つた事はない
 とは思はれるけれど。
 浅ましきまであてに薫り一宮は
 呆れる程上品に優雅で。
 片へは……それも一つは氣のせるか
 或は折が折だつた爲かと。
 奉れ一宮お召しなさい。女二宮にいふ。
 例ならぬ物一珍しい著物を。
 あなたに参りて一宮三宮の御許へ行
 つて。侍女に命ずる詞。
 大貳一宮三宮の侍女。
 御前なる人は一侍女達は。
 この御容貌の一宮二宮の御容色の。
 もてはやし聞え給ふと一薫が御寵愛
 遊ばすのだと。
 渡り給へれば一宮二宮のお居間へい
 らつしやると。
 宣ひつる御衣一羅の單衣の衣をさす
 なぞこは奉らぬ一何故これはお召に
 なりませぬか。
 放俗一無作法。
 只今はあへなむ一今は見る人も無い
 から思切つて着てもよいでせう。
 昨日のおなじ紅一昨日女一宮のはい
 て居られたと同じ紅。
 裾一髪の末。
 取りて一つ……薫は水を取つて一つ
 女二宮に上げたりなさるのが昨日
 際見した通りなので、我ながら心
 の中でをかしい。

大貳に、「羅の單衣の御衣縫ひてまゐれ」といへ」と宣ふ。御前なる人
 は、この御容貌のいみじき盛におはしますを、もてはやし聞え給ふと、
 をかしく思へり。例の念誦し給ふ。わが御方におはしましたとして、晝
 つ方渡り給へれば、宣ひつる御衣御几帳にうち懸けたり。なぞこは奉
 らぬ。人おほく見る折なむ、透きたる物著たるは、放俗に覺ゆる。只今
 はあへなむとて、手づから著せ奉り給ふ。御袴も昨日のおなじ紅なり。
 御髪のおほさ、裾などは劣り給はねど、なほ様々なるにや、似るべく
 もあらず。氷召して、人々に割らせ給ふ。取りて一つ奉りなどし給ふ
 心の中もをかし。繪にかきて戀しき人見る人は、なくやはありける。ま
 してこれは慰めむに似げなからぬ御程ぞかしと思へど、昨日かやう
 にて我まじり居、心に任せて見奉らましかばと覺ゆるに、心にもあら
 ずうち歎かれぬ。一品の宮に御文は奉り給ふや」と聞え給へば、内裏
 にありし時、上のさ宣ひしかば聞えしかど、久しうさもあらず」と宣
 ふ。たゞ人にならせ給ひにたりとて、彼よりも聞えさせ給はぬにこ

繪にかきて……戀しい人の姿を繪に
 描いて朝夕見る人もあるのだ、ま
 して女二宮は女一宮の妹ゆゑ女一
 宮の代りとして私の心を慰めるに
 は、繪にも勝つて決して不適當で
 はない、と薫は思召すけれど。
 昨日かやうにて……こんな風にして
 昨日女一宮の處で自分も一緒に打
 ちまじつてみて。
 上の一父帝の。
 久しう……長く手紙は上げません。
 たゞ人に……貴女が平人の私の妻に
 なられたからといふので。
 大宮一明石中宮。
 恨み聞えさせ給ふと……貴女が女一
 宮のお文を下さらぬのを恨んで居
 られる、と申上げませう。
 下衆に……妹は平人に成下つたと女
 一宮がお見送りなのだと、さう女
 二宮の目からは見えますので、そ
 れで態と女一宮へお手紙を上げな
 いので御座いますと、かう中宮へ
 申上げませう。
 例の宮一匂宮。
 丁子に一丁子茶色に。
 女の御身なり一宮の御容姿。
 覺え給へり……匂宮が女一宮に似
 ていらつしやると見るにつけても
 薫は先づ女一宮が戀しいのを。
 たゞなりしよりは一知らぬ昔よりは。

そは心憂かなれ。今大宮の御前にて、恨み聞えさせ給ふと啓せむと
 宣ふ。いかに恨み聞えむ。うたて」と宣へば、下衆になりたりとて、
 思しおとすなめりと見れば、驚かし聞えぬとこそは聞えぬ」と宣ふ。
 その日は暮して、またの朝に大宮にまゐり給ふ。例の宮もおほしけり。
 丁子に深く染めたる羅の單衣を、こまやかなる直衣に著給へる、いと
 好ましげなり。女の御身なりのめでたかりしにも劣らず、白く清らか
 にて、猶ありしよりは面瘦せ給へる、いと見るかひあり。覺え給へりと
 見るにもまづ戀しきを、いとあるまじき事と靜むるぞ、たゞなりしよ
 りは苦しき。繪をいと多く持たせて参り給へりける、女房してあなた
 に参らせ給ひて、我も渡らせ給ひぬ。大將も近く参りより給ひて、御八
 講の尊く侍りしこと、古への御事、少し聞えつゝ、残りたる繪ども見
 給ふついでに、この里にもものし給ふ内親王の、雲の上離れて思ひ屈し
 給へるこそいとほしう見給ふれ。姫宮の御方より御消息も侍らぬを、
 かく品定まり給へるに、思し捨てさせ給へるやうに思ひて、心ゆかぬ

女房して……その繪を女房に命じて
女一宮へ差上げて。我も……
大將も……薫も明石中宮の御前に近
く参上して。古への御事……源氏や紫上の尊。
残りたる繪……女一の宮に上げ残の繪。
この里に……禁中を離れて私の處に
居られる女二宮が、平人の妻にな
つて屈託してゐられるのが。
姫君の御方より……女一宮から。
かく品定まり……平人の妻に身分が
極つてしまはれたので、女一宮が
お見限りなされたやうに女二宮は
思つて。かやうの物……こんな繪などを時々
お贈り下さいまし。某が……私が戴いて退出したのでは。
なとてか捨て聞え……何の女一宮が
お見限り申されませう。
内裏にては……女二宮がまだ宮中に居
られた頃は。所々に……貴方に嫁した爲別れ……
になられた頃から。そ……のかし聞えむ……女一宮に文通
をお勧め申させう、女二宮から
も何の御遠慮が入りませうと仰し
やい。彼よりは……それなら女二宮からは
何の御無沙汰致しませう、元より

氣色のみ侍るを、かやうの物など、時々物せさせ給はなむ。某がおろし
てもて罷らむ、はた見るかひも侍らじかし」と聞え給へば、
「あやしく、
なとてか捨て聞え給はむ。内裏にては近かりしにつきて、時々も聞え
通はし給ふめりしを、所々になり給ひし折に、とだえ初め給へるにこ
そあらめ。今そ、のかし聞えむ、それよりも、なかはと聞え給へ。」
「彼
よりはいかでかは、もとより數まへさせ給はざらむをも、かく親しく
て侍ふべきゆかりによせて、思し召し數まへさせ給はむこそ、嬉しく
は侍るべけれ。ましてさも聞え慣れ給ひにけむを、今捨てさせ給はむ
は、からき事に侍り」と啓し給ふを、好きばみたる氣色あるかとは、思
しかげざりけり。
立ち出でて、一夜の志の人にあはむ、ありし渡殿も慰めに見むかしと
思して、御前をあゆみ渡りて、西ざまにおはするを、御簾の内の人々
は、心ことに用意す。げにいと様よく限なきもてなしにて、渡殿の方
は、左の大殿の君達など居て、物いふけはひなどすれば、妻戸の前に居

可愛くは思召さぬ女二宮でも、貴
女と私とは兄弟でかうして親しく
お事へ申すべき關係ゆゑ、それに
免じて女二宮をも愛して下された
ら嬉しう御座いませう。
ましてさも……まして女一宮とは昔
はそれ程親しくされましたものを。
好きばみたる……薫が女一宮に心あ
つての事とは、明石中宮は思ひが
けもなさらなかつた。
一夜の志の人……小宰相をいふ。
ありし渡殿……隙見をしたあの渡殿。
西ざま……女一宮のお部屋の方。
げにいと様よく……ほんに薫は風采
立派にこの上もない態度で。
左の大殿の君達……夕霧の子息達。
この御方の見参……女一宮の方の女
房達には容易にお目にかゝれない
ので、誠に知人もなく我ながら年
寄臭くなつた氣持がしますが、今
後は近附になつて戴きたいと思つ
て來ました。
ありつかずと……ごちない者よと。
甥の君達……夕霧の子息達。
をかしき御方の……ゆかしい女一宮
姫君はあたりの御様子ではある。
中宮はあなたに……女一宮は御母明石
大將……薫。
大納言の君……女一宮の侍女。

給ひて、大方には参りながら、この御方の見参に入ることの難く侍
れば、いと覺なく翁びはてにたる心地し侍るを、今よりはと思ひおこ
し侍りてなむ。ありつかずと、若き人どもぞ思ふらむかし」と、甥の君
達の方を見やり給ふ。今よりならばせ給ふこそ、げに若くならせ給ふ
ならめ」など、はかなき事をいふ人々のけはひも、怪しうみやびかに、
をかしき御方の有様にぞある。その事となけれど、世の中の物語など
しつゝ、しめやかに例よりは居給へり。姫宮はあなたに渡らせ給ひに
けり。大宮、「大將のそなたに参りつるは」と問ひ給ふ。御供に参りたる
大納言の君、「小宰相の君に、物宜はむとにこそは侍るめりつれ」と聞
ゆれば、
「まめ人の流石に人に心とめて物語すること、心地おくれた
らむ人は苦しけれ。心の程も見ゆらむかし。小宰相などはいと後やす
し」と宣ひて、御兄弟なれど、この君をば猶恥かしく、人も用意なくては
見えざらなむと思いたり。一人よりは心よせ給ひて、局などにも立ち寄
り給ふべし。物語こまやかにし給ひて、夜更けて出でなどし給ふ折々

まめ人の……眞面目男の薫が流石に心を留めて話などするのには、氣のきかぬ人ではその相手として困まる。

この君をば……中宮は薫を矢張り悪い程立派な人と思ひ、又女房達でも薫へは不用意で應對してほしくないと思つていらつしやる。心よせ給ひて……薫君が小宰相を懐か例の目馴れたる……世間普通の色戀ではないのかも知れませぬ。

宮をこそ……匂宮様を大變無情でいらつしやる小宰相は思つて。辱なき事……勿體ない事で御座います。宮も……明石中宮も。

いと見苦しき……匂宮の不體裁な浮氣を小宰相が見抜いてあるのが面白、どうかしてあの浮氣癖は止めさせたいものです。ほんに恥かしい事です、女房達に對しても。

この大將殿の……薫君の亡くなされた浮舟といふ人は、匂宮様の二條邸にいらつしやる奥方中の君のお叔母も母とも……その浮舟の叔母といひ或は母とも申します。その女君に……その浮舟に匂宮様が物にお通ひなされたと申します。俄に迎へ給はむ……急に浮舟を引取

も侍れど、例の目馴れたる筋には侍らぬにや。宮をこそいと情なくおはしますと思ひて、御答をだに聞えず侍るめれ。辱なきこと」といひて笑へば、宮も笑はせ給ひて……いと見苦しき御様を、思ひ知るこそをかしけれ。いかでか、る御癖やめ奉らむ。恥かしや、この人々も」と宣ふ。

いとあやしき事こそ聞き侍りしか。この大將殿のなくなし給ひてし人は、宮の御二條の北の方の御おとうとなりけり。異腹なるべし常陸の前の守某が妻は、叔母とも母ともいひ侍るなるは、いかなるにか。その女君に、宮こそいと忍びておはしましたけれ。大將殿や聞きつけ給ひたりけむ、俄に迎へ給はむとて、まもりめ添へなど、事々しくし給ひける程に、宮もいと忍びておはしましたながら、え入らせ給はず、怪しき様に、御馬ながら立たせ給ひつゝ、ぞ歸らせ給ひける。女も宮を思ひ聞えさせけるにや、俄に消え失せにけるを、身投げたるな。めりとしてこそ、乳母などやうの人どもは泣き惑ひ侍りけれ」と聞ゆ。宮もいと淺ましと思ひて、誰かさる事はいふぞとよ、いといとほしく心憂き業

らうとなされて番人を添へたりして仰山に警戒して居られた爲に。女も宮を……浮舟も匂宮様を。宮もいと淺ましと……明石中宮も實に大變な事と思召して。

さばかり珍かならむ……それ程稀有な事件は自然世間の尊にもなりさうな筈だのに。

大將もさやうには……薫もそんな話はず。

宇治の宮の族……八宮の一族。いさや……いや、どうで御座いませうか知ら。

彼處に……その宇治の邸に。宰相が里……小宰相の實家。おどろしく……恐しく氣味悪いやうだと申して。

さて委しくは……それ故薫君が委しくはお話にならなかつたもので御座いませう。

更にかゝる事……決してこんな事を二度と話すなど、その童にいひ付けさせるがよい。

かゝる筋に……こんな懸路ゆゑに匂宮が身をも過ち。

姫宮……女一宮。二の宮……女二宮。薫の妻。かくてこそ……こんな風に文通させて疾うから女一宮の手紙を見ればよかつたと薫は思召す。

かな。さばかり珍かならむ事は、おのづから聞えありぬべきを、大將もさやうにはいはず、世の中のはかなくいみじき事、かく宇治の宮の族の命短かりけることをこそ、いみじく悲しと思ひて宣ひしか」と宣ふ。

いさや、下衆はたしかならぬ事をもいひ侍るものをと思ひ侍れど、彼處に侍りける下童の、只この頃、宰相が里に出でまうで来て、確なるやうにこそいひ侍りけれ。かく怪しくて失せ給へること、人に聞かせじ、おどろしくおぞきやうなりとて、いみじく隠しける事どもとや。さて委しくは聞かせ奉らぬにやありけむ」と聞ゆれば、更にかかる事、又まねぶな」といはせよ。かゝる筋に御身をもてそこなひ、人にも軽く心づきなきものに思はれ給ふべきな。めり」と、いみじく思ひたり。

その後、姫宮の御方より二の宮に御消息ありけり。御手などのいみじく美しげなるを見るにも、いと嬉しく、かくてこそ疾く見るべかりけれと思す。數多をかかしき繪ども多く、大宮も奉らせ給へり。大將殿、う

をかき繪ども……これは二の宮への贈物の繪。
 大宮も一明石中宮も女二宮に。大將殿うち勝りて……薫はそれ以上面白繪など集めて女一宮へお上げなされた。
 芹川の大將一當時あつた物語の名と思はれるが今傳はらぬ。
 とほ君一右の物語中の人名か。
 いとよく思ひ寄せらる一薫は自分の身に非常によく思ひ當る。
 然ばかり……その物語中の女一宮のやうに思ひ込んでくれる人があつたらなあと。
 萩の葉に……萩の葉に置いた露を吹き結ぶ秋風も、夕暮方が取り分け身に沁みて悲しく様々の事を思はせます。
 添へまほしく……繪に添へて差上げたく思召すけれど、女一宮に懸想してゐるやうな素振が少しでも人にけどられたら。
 昔の人……大君がゐたら何事があらうと何で他の女に心を移さうぞ。
 得奉らざらまし一頂戴すまい。
 又さ思ふ人……又さ程愛する女が他にあると帝が聞召したら、こんな橋姫一宇治の橋姫。大君に擬するに。又宮の上に……薫の心は又中の君の

ち勝りてをかき繪ども集めて、參らせ給ふ。芹川の大將のとは君の、女一の宮思ひかけたる秋の夕暮に、思ひわびて出でて往きたる繪をかきう描きたる、いとよく思ひ寄せらる。然ばかり思ひ磨く人のあらましかばと、思ふ身ぞ口惜しき。
 「萩の葉に露吹きむすぶ秋風も」
 夕べぞわきて身にはしみける」

と書きても添へまほしく思せど、さやうなる露ばかりの氣色にても漏りたらむに、いと煩はしげなる世なれば、はかなき事をも、えほのめかし出づまじく、かくよろづに何やかやと、物を思ひくのはては、昔の人物し給はましかば、いかにも一外様に心を分けまじや。時の帝の御女を賜ふとも、得奉らざらまし、又さ思ふ人ありと聞し召しながらは、かゝる事もなからましを、猶心うく、わが心亂り給ひける橋姫かなと思ひ餘りては、又宮の上に取りかゝりて、戀しくもつらくも、わりなき事ぞ鳴濤がましきまで悔しき。これに思ひ詫びてのさし

事に馳せて。鳴濤がましきまで一我ながら愚癡だと思ふ位。
 これに思ひ詫び……中の君の事に思ひ餘つた次には、淺ましく死んだ浮舟が誠に子供らしくて熟慮の無かつた輕卒さを薫は思ひながら。わが氣色例ならず……薫の素振が變だと浮舟が良心の咎めから歎き沈んでゐたといふ様子を、侍女達から聞かれた事も薫は思出されて。重りかなる方……本妻でなく只氣安くかはゆらしい愛人として置かうと考へたには、浮舟は誠に可憐な女だつたものを。
 思ひもていけば……薫は思詰めてゆくと匂宮をもお恨み申すまい、浮舟をも心外だと思ふまい、只私自身の世馴れぬ罪なのだなどと。心のどかに……大様によく落着いて居られる薫すらこんな戀故には。宮はまして一匂宮は尙更。
 かの形見に一浮舟の形見として、心中の大きな悲しみを打明けける相手もないのを。
 對の御方……中君だけは、浮舟は可愛さうになど仰しやるけれど、元來中の君と浮舟とは深く馴染みもなさらなかつた突然の仲だから。思すまゝに一匂宮が思ふ儘にあけす

次には、淺ましくて失せにし人のいと心をさなく、滯る所なかりける輕々しさをば思ひながら、流石にいみじと物を思ひ入りけむ程、わが氣色例ならずと、心の鬼に歎き沈みて居たりけむ有様を、聞き給ひしも思ひ出でられつゝ、重りかなる方ならで、只心安く、らうたき語らひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を、思ひもていけば、宮をも恨み聞えじ、女をも憂しと思はじ、只わが有様の世づかぬ意ぞなど、詠め入り給ふ時々多かり。
 心のどかに様よくおはする人だに、かゝる筋には身も苦しきこと自らまじるを、宮はまして慰めかね給ひつゝ、かの形見に、飽かぬ悲しさをも宣ひ出づべき人さへなきを、對の御方ばかりこそは、「あはれ」などは宣へど、深くも見馴れ給はざりけるうちつけの睦なれば、いと深くしもいかでかはあらむ。又思すまゝに、「戀しや、いみじや」など宣はむには、かたはら痛ければ、彼處にありし侍従をぞ、例の迎へさせ給ひける。皆人どもは行き散りて、乳母とこの人二人なむ、取り分きて

彼處にありし一宇治に仕へてゐた。皆人どもは……浮舟の侍女達は皆その右近侍従の兩人が、殊に浮舟に目をかけられたのも忘れられず、侍従は元々浮舟の侍女ではないけれど、矢張乳母等の話相手として残つてゐるのに。世づかぬ川の音……嘗ては聞馴れぬ恐しい河の音も、浮舟に仕へて居れば又幸福な折もあらうかと思つて當にしてゐた時は慰んだが、浮舟亡き後……あやしき所に……賤しい知人の家に。尋ね出で給ひて……その侍従を匂宮がお見つけなされて。御心はさるものにて……匂宮の御深切はよいとして。さる筋のこと……中の君と浮舟とは姉妹の間ながら面倒な仲でそんな處に御奉公しては。後の宮に……明石中宮に御奉公に上りたいと申出たので。さて人知れず……その上で私がお前を目をかけて使はう。参りぬ……明石中宮へ御奉公した。きたなげなくて……見苦しからず可なりな下藪女房だ、と侍従の事をよく評して。

思したりしも忘れ難くて、侍従はよそ人なれど、なほ語らひてあり經るに、世づかぬ川の音も、嬉しき瀬もやと頼みしほどこそ慰みけれ、心憂くいみじく、物恐ろしくのみ覺えて、京になむ、あやしき所にこの頃来て居たりける。尋ね出で給ひて、かくて侍へ」と宣へど、御心はさるものにて、人々のいはむことも、さる筋のことまじりぬるあたりは、聞きにくき事もあらむと思へば、うけひき聞えず。後の宮に参らむとなむおもむけたれば、「いとよかなり。さて人知れず思し使はむ」と宣はせけり。心細く寄るべなきも慰むやとて、知るたより求めて参りぬ。「きたなげなくて、よろしき下藪なり」とゆるして、人も諍らず、大將殿も常にまゐり給ふを見る度ごとに物のみあはれなり。「いとやむごとなき物の姫君のみ、多く参りつどひたる宮」と、人もいふをやうやう目とめて見れど、なほ見奉りし人に似たるは無かりけりと、思ひありく。

いとやむごとなき……明石中宮の處は誠に高貴な、小説にでもありさうな美しい姫君ばかり澤山宮仕に集つてゐる御殿だと人もいふので、なほ見奉りし人……矢張御主人浮舟様に及ぶ人はないと。式部卿の宮の御女……君と名づける。式部卿は源氏の弟。あひ思はで……仲がよくなくて。兄人の右馬頭……繼母の兄の右馬頭で人品も格別でない男が宮の君に懸想してゐるのを。いとほしうなども……そんな者に遣ふことを可愛相とも繼母は思はず。さるべき様になむ……右馬頭に與へてもよきさうに約束したと、明石中宮が或便宜でお聞きになつて、徒らなるやうに……右馬頭風情にやつてまるで埋木同様にしてしまはうとする事よ。かく尋ね宣はするを……明石中宮様がお氣にかけて下さるものを。御兄人の侍従……宮の君の兄君。迎へ取らせ……明石中宮の御殿へ宮の君をお引取りなされた。姫宮の御具にて……宮の君は女一宮のお相手として誠に缺點のない御身おれば……元はとにかく今は宮仕の身といふ限があるので。

はで、兄人の右馬頭にて、人柄も殊なることなき心懸けたるを、いとほしうなども思ひたらで、さるべき様になむ契ると、聞し召す便ありて、いとほしう、父宮のいみじうかしづき給ひける女君を、徒らなるやうにもてなきむこと……などは宣せければ、いと心細くのみ思ひ歎き給ふ有様にて、懐かしうかく尋ね宣はするを、など、御兄人の侍従もいひて、この頃迎へ取らせ給ひてけり。姫宮の御具にて、いとよなからぬ御程の人なれば、やむごとなく心殊にて侍ひ給ふ。限あれば、宮の君などうちいひて、裳ばかり引き懸け給ふぞいとあはれなりける。兵部卿の宮、この君ばかりや、戀しき人に思ひよそへつべき様したらむ、父親王は兄弟ぞかしなど、例の御心は人を戀ひ給ふにつけても、人ゆかしき御癖やまで、いつしかと御心かけ給ひてけり、大將、もどかしきまでもある業かな、昨日今日といふばかり。春宮にやなど思し、我にも氣色ばませ給ひきかし、かくはかななき世の衰を見るには、水の底に身を沈めても、もどかしからぬ業にこそなど思ひつゝ、人よりは心寄

うちいひて一名づけて。裳ばかり……唐衣を略して裳だけを着けた。普通の侍女なら唐衣をも着るが宮の君は身分がよいので區別される意。
 兵部卿の宮一旬宮。
 この君ばかりや……宮の君だけが戀しい浮舟に思ひ擬へてもよきさうな姿をしてゐるやうだ。
 父親王は式部卿宮と八宮とは。例の御心は……例の浮氣な御氣質で、大將……蕭は、宮の君が侍女奉公をするとは感服されぬ仕儀だなあ、昨今まで父宮は春宮に上げようかなど考へ又私にも遣らうかといふ素振をお見せになつたものを、こんな果敢ない家運の衰微を見る位なら浮舟のやうに入水してしまつても非難あるまいと思召し。この院に……明石中宮がこの六條院にいらつしやるのを、人々は、常にしも侍はぬ……いつも詰めきりでない女房達も。
 左大臣殿一夕霧。
 昔の御前はひ源氏の御威勢。殿めしう……全盛になつた夕霧の一門だから、却て源氏時代よりも華やかさは勝つてさへゐた。
 この宮一旬宮。

せ聞え給へり。この院におはしますをば、内裏よりも廣く面白く住みよきものにして、常にしも侍はぬ人ども、皆うち解け住みつゝ、はるばると多かる對ども、廊、渡殿に滿ちたり。左大臣殿、昔の御前はひにも劣らず、すべて限もなく營み仕うまつり給ふ。殿めしうなりたる御族なれば、なか／＼古へよりも、今めかしき事は勝りてさへなむありける。この宮、例の御心ならば、月頃の程に、いかなるすき事どもを仕出で給はまし、こよなく静まり給ひて、人目には少し生ひ直り仕給ふかなと見ゆるを、この頃ぞまた、宮の君に本性あらはれて、かゝづらひありき給ひける。
 涼しくなりぬとて、宮、内裏に參らせ給ひなむとすれば、秋のさかり、紅葉の頃などを見ざらむこそなど、若き人々は口惜しがりて、皆参りつどひたる頃なり。水に馴れ月をめめて、御あそび絶えず、常よりも今めかしければ、この宮ぞかゝる筋は、いとこよなくもてはやし給ふ。朝夕に目馴れても、^(旬宮が)なほ今見む初花の様し給へるを、大將の君は、

生ひ直り仕給ふかな一生まれ變つて來られたわい。
 本性あらはれて一地金が出て。
 宮一明石中宮。
 紅葉の頃……この六條院の紅葉の頃を見ないのが残念な事よ。
 この宮ぞ一旬宮が一番。
 かゝる筋一かうした遊の業。
 朝夕に目なれても一旬宮の御様子は何時も見てゐる人でも。
 今見む初花一珍しい初咲の花。
 大將の君は……蕭はそれ程な明石中宮の御殿に出遣入なさらぬ頃ほひで、極りが悪く氣のつまるお方だと、女房達は皆思つてゐる。
 二所一旬宮と蕭。
 いづ方にも……旬宮にでも蕭君にでも何れへなりと浮舟様が随つて、果報めでたい御生活で今まで御存命であればよかつたに、ひどくまあ果敢なく恨めしい浮舟のお心ではあつた。
 そのわたりの事……宇治の事件は全く知らぬ顔してゐる事だから。
 宮は一旬宮は。
 内裏の御物語一宮中の様子のお話。
 今一所一蕭。
 見付けられ奉らじ……蕭君に見られないやうにしよう、浮舟の一周忌過ぎるのも待たずに淺慮な女よ、

いとさしも入り立ち馴らし給はぬ程にて、恥かしう心ゆるびなきものに、皆思ひたり。例の二所參り給ひて、御前におはする程に、かの侍従は物より覗きて見奉るに、いづ方にもいづ方にも寄りて、めでたき御宿世見えたる様にて、世にぞおはせましかし、淺ましくはかなく、心憂かりける御心かななど、人には、そのわたりの事、かけて知り顔にもいはぬ事なれば、心一つに飽かず胸いたく思ふ。宮は内裏の御物語など、こまやかに聞えさせ給へば、今一所は立ち出で給ふ。見付けられ奉らじ、暫し御はてをも過さず、心淺しと見え奉らじと思へば隠れぬ。東の渡殿に、開きあひたる戸口に、人々あまた居て、物語など忍びやかにする所におはして、^(蕭は)某をぞ女房は睦ましく思すべきや。女だにかう心安くはよもあらじかし。流石にさるべからむ事教へ聞えぬべくもあり。やう／＼見知り給ふべかめれば、いとなむ嬉しきと宣へば、いと答へにく、のみ思ふ中に、辨の御許とて、馴れたる大人、^(辨)そも睦ましく思ひ聞ゆべき故なき人の、恥ぢ聞え侍らぬやは、物はさこそは

と薫に見られたくないと侍従は思ふので隠れた。
 某をぞ……私をこそ女房達は親しく思つてよい筈ですよ、女ですら私のやうな氣の置けぬ者はあるまいわ、又男とはいへ私は女の知つて居るべき事をお教へする事も出来ませぬ、然し段々貴女方が私の氣持を知つて下さるやうだから誠に嬉しい。
 そも陸ましく……それも貴方を親しくお思ひ申すべき縁故もない者がよく無遠慮に致しますよ、尤も世間の事は却てそんなもので御座います、貴方は必しも親しくすべき縁故を尋ねてから優しくして下さるといふ譯のものでもありませんけれど。
 かばかり……臆面ない女房生活に馴れた身で、折角のお言葉に、引受けにお答申上げぬも笑止千萬で御座いますので、かう申上げます。
 恥づべき故……私に對しては遠慮なく挨拶が出来ると決定されたものが、畢竟私の平凡さを語るもので、唐衣は……女房達の體。
 心もとなき花……何の花か、しかと分片へは……女房中の一部分は。

なか／＼侍りけれ。必ずその故尋ねて、うち解け御覽せらるゝにしも侍らねど、かばかり面なく作りそめてける身に負はさらむも、かたはら痛くてなむ」と聞ゆれば、「恥づべき故あらじと、思ひ定め給ひてけるこそ口惜しけれ」など宣ひつゝ、見れば、唐衣は脱ぎすべし押しやり、うち解けて手習しけるなるべし、硯の蓋にすゑて、心もとなき花の末々たをりて、翫びけりと見ゆ。片へは几帳のあるにすべり隠れ、あるはうち背き、押しあけたる戸の方に紛らはしつゝ、居たる頭付ども、をかしと見渡し給ひて、硯ひき寄せて、

「女房花みだるゝ野邊にまじるとも

露のあだ名を我にかけめや

心安くは思さで」と、只この障子に後したる人に見せ給へば、うち身じろきなどもせず、のどやかなるものからいと疾く、

「花といへば名こそあだなれ女郎花

なべての露に亂れやはする」

戸の方に紛らはしつゝ、戸口にはみ出した風にして。
 女郎花……美しい女房達の澤山ある處に立まじつても、私は元來眞面目な男ゆゑ少しの浮名でも人が私に負はせる事が出事ようかい。以下の歌、女郎花は女に譬へた。心安くは……それを安心はせず、矢張私を警戒して隠れるのですか。後したる……背中を寄せること。或は「後おしたる」の誤脱か。
 花といへば……花といへば名からして如何にも移り氣なやうに思はれますが、女郎花はそんなにどの露にも濡れて亂れはしません。たゞ片そばなれど……只一寸見たばかりであるが趣があつて。今まう上りける……この中將は今此方へ来たが道を塞がれて此處に留つてゐたものと見える。
 いとけざやかなる……浮名を立てられる筈がないなどと、餘りきつぱりした年寄臭いお言葉が憎らう御座います。
 旅寝して……一夜お泊りになつて尙たためして御覽なさいませ、美しい女達にお心が移るか移らぬか。さて後……浮名の立つか立たぬかは、その上で判断して差上げませう。宿かさば……泊めてさへくれたら一



夜位は泊りませうよ、大抵の女に
 心を移す私ではないけれども。
 何か恥かしめ……さう安つぽく仰し
 やいますな、私は一般的に申上げ
 たのみで私達の中にお泊り下さい
 といふのでは御座いませぬのに。
 殘開かまほしくもつとあとのお言
 葉が聞きたいものと。
 道あけ侍りなむよ、道をあけて私は
 立去りませうね。中將にいふ。
 わきてもかの……殊に女房達の極り
 わるがつて隠れてゐるのは、きつ
 と譯のありさうな折柄で、多分其
 處らに立派なお人でも来ていらつ
 しやるのでせうから。
 おしなべて……侍女達皆一般にこの
 辨の如くあけすけなのばかりだら
 うと薫が推量なされさうなのが心
 外だ、と思つてゐる女房もある。
 勾欄におしかゝりて……薫のさま。
 御前、中宮の御座所の庭前。
 中についで腸……白氏文集「大抵四
 時心總苦、就中腸腸是秋天」。
 ありつる衣の音なひ、先程の中將の
 君の衣摺の音が。
 かの御方の……女一宮様の侍女の中
 將の君で御座いました。
 なほ怪しの業や……どうも面白くな
 い仕方だ、誰だらうと假初にも好

と書きたる手、たゞ片そばなれど、よしづきて、大方目やすければ、誰
 ならむと見給ふ。今まう上りける道にふたげられて、とゞこほり居た
 るなるべしと見ゆ。辨の御許は、「いとけざやかなる翁言にく、侍り」
 とて、
 旅寝してなほこゝろみよ女郎花
 さかりの色にうつりうつらず
 さて後定め聞えさせむ」といへば、
 「宿かさばひと夜は寝なむ大かたの
 花にうつらぬこゝろなりとも」
 とあれば、何か恥かしめさせ給ふ。大方の野邊のさかしらをこそ聞え
 さすれ」といふ。はかなき事を只少し宜ふも、人は殘開かまほしくの
 み思ひ聞えたり。心なし、道あけ侍りなむよ。分きてもかの御物恥の
 ゆゑ、必ずありぬべき折にぞあゝめる」とて、立ち出で給へば、おしなべ
 てかく殘なからむと、思ひやり給ふこそ心うけれ、と思へる人もあり。

奇心を抱いてゐる人に、いきなり
 こんなに露骨に何の某と名を教へ
 るとはまあ、と薫は中將の爲に可
 愛さうで、それにしても匂宮には
 此處の侍女達が皆お馴染み申して
 ゐるやうなのも妬ましい。
 おり立ちて……匂宮が懸命になつて
 の無理やりな挑みに女達はあの通
 り根氣負けで靡きもするが、私は
 あんなにまあ、この匂宮の爲には
 戀の邪魔をされて妬ましくも心外
 な思ばかりしてゐる事だ。
 このわたりにも……この邸にも氣の
 きいた女で匂宮が例の如く目をつ
 けて熱狂して居られるのがあらう
 が、それを私が口説き落して、曾
 て私が骨めさせられた苦痛のやう
 に、せめて匂宮に心外千萬だ位に
 でも思はせて上げたいものだ。
 まことに心ばせ……本當に思慮のあ
 る女は私に勝つた。
 對の御方の……中の君が匂宮の行迹
 を不似合なものと思召して頗る面
 白からぬお仲になつて來、世間の
 思はくを苦しく氣にかけながら猶
 切るに切られぬ關係と觀念してい
 らつしやる態度は稀有な立派なも
 のだ。
 こゝろの中に……多くの女の中に、
 入りたちて……女の事に深く立入つ

東の勾欄におしかゝりて、夕影になるまゝに、花の紐とく御前の叢を
 見渡し給ふも、物のみあはれなるに、中について腸斷ゆるはこれ秋の
 天」といふことを、いと忍びやかに誦じつゝ居給へり。ありつる衣の
 音なひ、著きけはひして、母屋の御障子より通りて、あなたに入るなり。
 宮の歩みおはして、これより彼方に参りけるは誰ぞ」と問ひ給へば、
 「かの御方の中將の君」と聞ゆなり。なほ怪しの業や、誰にかと、假初に
 もうち思ふ人に、やがてかくゆかしげなく聞ゆる名ざしよ、といとは
 しく、この宮には、皆目馴れてのみ覺え奉るべかゝめるも口惜し。おり
 立ちてあながちなる御もてなしに、女はさもこそ負け奉らめ、我がさ
 も口惜しく、この御ゆかりには、妬く心憂くのみある業かないかで、こ
 のわたりにも、珍しからむ人の、例の心入れて騒ぎ給はむを語らひ取
 りて、わが思ひしやうに、安からずとだにも思はせ奉らむ、まことに
 心ばせあらむ人は、わが方にぞ寄るべきや、されど難いものかな人
 の心は、と思ふにつけて、對の御方の、かの御有様をば、ふさはしから

蜻

蛉

るこの西の對に局を持つて居られ
る。若き人々女房達。
いであはれ……まあ可愛さうに、
宮の君も矢張同様に帝の御血統だ
のにと。
親王の昔……御父式部卿の宮が私に
宮の君を遣らうと御内意があつた
ものをといふ事を口實にして、薰
は宮の君の處へいらしたつた。
耀かし……恥かしさうである。
これぞ世の常と思ふ……男を避けて隠
れるのはそれは普通の態度で、風
情はないと薰は思ふ。
人知れぬ心寄せ……密に宮の君に御
同情して居りますなど申上げると
却て人のいひ古した一通りの挨拶
を今更初心らしく真似するやうに
聞えます、然し思ふといふ詞以外
に私の心持を現す詞を眞剣に探し
て居ります。思ふてふ言より外に
又もがな君ばかりをばわきてしの
ばむ。(河海)
君にもいひ傳へず女房が宮の君に
も取次がないで。
いと思ほし懸けざりし……宮の君様
は誠に思ひもかけなかつた現在の
御境遇につけても、亡き父宮の愛
して下された有様などお思出しな
され、それに又貴方様がこんなな

けて入る様ども、耀かし。これぞ世の常と思ふ。南面の隅の間により
(薰が)
て、うち聲づくり給へば、少し大人びたる人出で來たり。人知れぬ心
寄せなど聞えさせ侍れば、なか／＼皆人聞えさせ舊しつらむ事を、う
ひうひしき様に、まねぶやうになり侍り、まめやかになむ、言より外
を求められ侍る」と宣へば、君にもいひ傳へず、さかしらだちて、いと
思ほし懸けざりし御有様につけても、故宮の思ひ聞えさせ給へりし
事など、思ひ給へ出でられてなむ、かくのみ折々聞えさせ給ふなる御
後言をも、喜び聞え給ふめる」といふ。並々の人めきて、心地なの様や
と物憂ければ、もとより思し捨つまじき筋よりも、今はまして、さる
べき事につけても思ほし尋ねむなむ嬉しかるべき。疎々しく人傳な
どにてもてなさせ給はば、えこそ」と宣ふに、げにと思ひ騒ぎて、君を
引き揺がすべかめれば、松も昔の、とのみ詠めらるゝにも、もとより
など宜ふ筋は、まめやかに頼もしうこそは」と、人傳ともなくいひな
し給へる聲、いと若やかに愛敬づき、やさしき所添へたり。只なべて

折々御深切に仰しやつて下さる蔭
でのお言葉をも聞いて喜んでいら
つしやいます。
並々の人……こんな女房の取次で
話すとは見極られたやうで不愉快
な有様だなあと思は心外なので。
もとより……私をお見限なさるまじ
き従兄妹といふ關係はともかくと
して、今の御境遇ではまして何事
につけても私に親しく仰しやつて
下されば嬉しいのです、他人らし
く取次などで私をおあしらひ下さ
るなら私も參上致しかねます。
げにと思ひ騒ぎて……成程と女房は
驚き氣付いて宮の君に自身御返事
なさるやう促してゐるらしく。
松も昔の……昔の知人も皆疎くなつ
てゆくと思つたのみにして居りますに
ついても、元より従兄妹の縁があ
るなど仰しやるのは心から頼もし
く存じます。古今……誰をかも知る
人にせむ高砂の松も昔の友ならな
くには。
只なべての……只これが一通りのか
うした處の奉公人ならば随分趣あ
る人ともいへようが、宮様の姫君
ともあらう人が、今では何でこの
位にでも男に直接話をするやうに
なられた事やらと。
この人ぞ又……この宮の君こそ又あ

のかゝる住處の人と思はば、いとをかしかるべきを、只今は、いかでか
ばかりも、人に聲聞かすべきものと慣らひ給ひけむと、なま後めたし。
容貌もいとなまめかしからむかしと、見まほしきけはひのしたるを、
この人ぞ、又例のかの御心亂るべきつまなめると、をかしくも、あり
難の世やとも、思ひの給へり。これこそは、限なき人のかしづきおふし
立て給へる人の姫君よ、又かばかりぞ多くはあるべき、怪しかりける
事は、さる聖の御あたり、山の懷より出で來たる人々の、片ほなる
は無かりけるこそ、このはかなしや、輕々しやなど思ひなす人も、かや
うのうち見る氣色は、いみじうこそをかしかりしかと、何事につけて
も、只かの一つゆかりをぞ思ひ出で給ひける。怪しくつらかりける契
どもを、つく／＼と思ひ續けながめ給ふ夕暮、蜻蛉の物はかなげに飛
びちがふを。
「ありと見て手には取られず見ればまた
ゆくへも知らず消えし蜻蛉

あるかなさかの」と、例の獨ごち給ふとかや。

の浮氣な匂宮の心を擾亂す種にな
るに相違ない。理想通りの女は
稀な世の中だわいと。これこそは……宮の君こそは立派な
父宮が大事にお育て申した姫君様
よ、然し又この位な女が世間には
多からう。
怪しかりける事は……不思議だつた
事は、俗人離れのした八宮のお側
であの宇治の山陰に成長した大君
や中の君など、何れも皆見苦しい
人は無かつた事だ。
はかなしや……しかとしないとか、
軽々しいと思ふ浮舟でも。
只かの一つゆかり……只大君と同じ
間柄の御姉妹達を薫は思ひ出され
た。
蜻蛉遊絲、とんぼ、をもカゲロフと
いふが、こゝは別の小蟲らしい。
ありと見て……表面の意は明白、裏
は、大君や中の君は遂に我が手に
入らず、手に入つたと見た浮舟は
又やがて行方も知らず消えてしま
つた事よ。
あるかなさかの……後撰、あはれとも
憂しともいはじ蜻蛉のあるかなさ
かにけぬる世なれば。

手習

この巻は薰二十七歳の三月から翌年夏までの事。叡山の横川に尊い僧都があつた。その母と妹の尼とが初瀬詣の歸途、母尼が病氣になつたので、僧都も山から下りて来て宇治院で静養させた。すると森蔭に白く怪しいものがある。よく見ると女の屍體であつた。手當を盡すとやつと蘇生したので、妹尼はこれは死んだ我が娘の再生で観音のお授けだとか喜び喜んだ。丁度母の病も愈つたので、共に打連れて比叡の麓なる小野の庵に歸つた。この女こそ浮舟であつた。「只世の憂さに堪へかねて、死んでしまひたいと思つて、夕暮毎にながめ暮してゐると、或夜木蔭から怪しげな者が出て来て尋くのについて行つたが、その後は一切覚えな」といふ。その儘小野の庵にあつて、人戀しい折々は手習しつゝ悲しい歌など書いた。時々来る尼の婿の中將といふ人が浮舟を見て思を焦し、手紙など送つたが浮舟は取合はない。浮舟は妹尼がその後また初瀬詣をした留守中、來合はせた横川の僧都に乞うて髪をおろした。薰は薄々この話を聞いて驚き、浮舟ではあるまいかと疑つた。ともかく母親の悲歎が氣の毒なので、事實を確めた上で知らせようと考へ、小野へ行くことにした。
卷の名は、「思ひ餘る折には手習をのみぞたけき事とは書きつけ給ふ」と、例のなぐさめの手習を行の隙にはし給ふ」その他數箇所手習といふ詞あるによる。

そのころ横川に某僧都とかいひて、いと尊き人住みけり。八十あまり

横川—比叡山の北谷の横川谷。
舊き願ありて……ずつと以前に立願
してゐたので、そのお禮参りに、母
と妹と連立つて。舊き願は宿願。
長谷—大和國の初瀬の觀音。
事ども多くして—様々の供養を鄭重
に營んで。
奈良坂—奈良から京街道に通ずる道
にある。
もて騒ぎて—妹尼や弟子の阿闍梨が

手を盡して。横川に消息したり。僧都の許に通知をした。山籠りの本意ふかく。僧都は山に籠つて俗塵を避けようとする希望が深く。今年に里に出まいと決心してゐたけれど。限の様な親の危篤と思はれる。人の母が急ぎ物し給へり。僧都は急いで宇治へ行かれた。惜むべくもあらぬ。八十餘歳で惜しくもない命であるが。家あるじ。この借りた家の主人。御嶽精進し侍るを。今私は御嶽精進をして居りますが。御老體のひどくお煩ひなされるのはどうしたらよいものでせうか。萬一の事でもあつたら穢れになつて困りますが。との意。御嶽精進は役行者の開いた吉野の金峯山に詣でる爲千日の精進をするをいふ。後めたげに。心配さうに。さもいふべき事と。尤な主人の申し條と僧都は氣の毒に思つて。やう／＼率て。その病入を連れて歸る筈であつたのに。中神。天一神ともいふ。この神のふの方を塞りと稱してその方角に向

の母、五十ばかりの妹ありけり。舊き願ありて長谷に詣でたりけり。睦ましくやむごとなく思ふ弟子の阿闍梨を副へて、佛經供養するこ
と行ひけり。事ども多くして歸る道に、奈良坂といふ山越えける程よ
り、この母の尼君、心ち悪しうしければ、かくては、いかでか殘の道を
もおはし着かむと、もて騒ぎて、宇治のわたりに知りたりける人の家
ありけるにとゞめて、今日ばかり休め奉るに、猶いたく煩へば、横川
に消息したり。山籠りの本意ふかく、今年は出でじと思ひけれど、限
の様なる親の、道の空にて亡くやならむと驚きて、急ぎ物し給へり。
惜むべくもあらぬ人の様を、自らも弟子のなかに、驗あるして加持
し騒ぐを、家あるじ聞きて、御嶽精進し侍るを、いたく老い給へる人
の重く惱み給ふはいかごと、後めたげに思ひていひければ、さもい
ふべき事といとほしく思ひて、いと狭くむつかしくもあれば、やう
やう率て奉るべきに、中神塞がりて、例住み給ふ方は忌むべかりけれ
ば、故朱雀院の御領にて宇治の院といひし所は、このわたりならむと

例住み給ふ方。豫ねて僧都の宿りつ
けの所。院の管理者は僧都の知人で
あつたから。みな詣でにける。院守の一家が皆參
詣致しました。宿守の翁。留守居の老人。
おはしまさばはや。入らつしやるな
ら直に入らつしやいまし。いたづらなる。どうせあいてゐる。
寢殿。建物の本屋。公所。皇室御料の屋敷ゆゑいふ。
この翁例も。この老人は常々も。疎かなるしつらひ。簡単な部屋の
用意などして来てくれた。まづ僧都わたり給ふ。病人達より先
に僧都がまづ宇治院に行かれた。大徳だち。弟子の僧をさしていふ。
長谷に副ひたりし。長谷に同行した。同じやうなる今一人。同じ弟子なる
今一人の僧。つき／＼しきほどの。尤もらしい
下衆の僧。後の方。寢殿の後の方。
疎ましげのわたりや。氣味のわるい
所だなあ。物の居たる姿なり。何者かじつとし
てゐる姿である。これが浮舟。よ
からぬ物ならむ。何か魔性の物で

思ひ出でて、院守僧都知り給へりければ、一二日宿らむといひに遣り
給へりければ、「長谷になむ昨日みな詣でにける」とて、いとあやしき
宿守の翁を呼びて、率て來たり。「おはしまさばはや。いたづらなる院
の寢殿にこそ侍るめれ。物詣の人は常にぞ宿り給ふ」といへば、「いと
よかなり。公所なれど、人もなく心やすきを」とて、見せに遣り給
ふ。この翁、例もかく宿る人を見慣らひたりければ、疎かなるしつら
ひなどして來たり。まづ僧都わたり給ふ。いといたく荒れて、恐ろし
げなる所かなと見給ひて、「大徳だち經讀め」など宣ふ。この長谷に副
ひたりし阿闍梨と、同じやうなる今一人、何事のあるにか、つき／＼
しきほどの下臈法師に火ともさせて、人も寄らぬ後の方にいきたり。
森かと思ゆる木の下を、疎ましげのわたりやと見入れたるに、白き物
のひろごりたるぞ見ゆる。かれは何ぞと立ちとまりて、火を明くなし
て見れば、物の居たる姿なり。「狐の變化したるか。憎し。見顯はさむ」と
とて、一人は今すこし歩み寄る。今一人は、「あな用な。よからぬ物な

手

習

あらう。印指先で種々の形を作つて佛菩薩の本誓を表はす標識とするもの、加持祈禱の時もこれに倣つて僧が印を結び悪魔を退ける。まもる見つめてゐる。頭の髪あらば……僧侶だから髪は無いが有つたら太くなりさうな氣持、髪がずんとするといふ今日の形容と同意。奥なき様一踏踏もない様子の意。一人は入りて一人の僧は僧都の部屋に來て。狐の人に變化する一狐が人に化ける。わざと下りておはす……僧都が。かの渡り給はむとする……尼君達が跡から入らつしやるに就いて、下人達の皆氣のきいた者はお勝手元などのせねばならぬ用事などを、かうした際には急いでする次第であるから、今此處はひっそりしてゐる故。此處なる物一その怪しい物を。疾く夜も……早く夜が明けてくれ、ばよい。夜が明けると化物なら正體が顯れるから。僧都の心。さるべき眞言一かういふ場合に讀むべき眞言秘密の呪文。著くや思ふらむ一はつきり分つたのであらうか。

らむといひて、さやうのもの退くべき印作りつ、流石に猶まもる。頭の髪あらばふとりぬべき心地するに、この火ともしたる大徳、はかりもなく奥なき様にて、近く寄りてその様を見れば、髪は長くつやつやとして、大きな木の根のいとあらしくしきに寄り居て、いみじう泣く「珍しきことにも侍るかな。僧都の御坊に御覽せさせ奉らばや」といへば、げにいと怪しき事なりとて、一人は入りて、かゝる事なむと申す。狐の人に變化するとは昔より聞けど、まだ見ぬものなり」とて、わざと下りておはす。かの渡り給はむとする事によりて、下衆ども皆はかゝしきは、御厨子所など、あるべかしき事どもを、かゝるわたりには急ぐものなりければ、居靜まりなどしたるに、たゞ四五人して此處なる物を見るに、かはる事もなし。怪しうて時の移るまで見る。疾く夜も明けはてなむ、人か何ぞと見顯はさむと、心にさるべき眞言を讀み、印を作りて試みるに、著くや思ふらむ、これは人なり。更に非常のけしからぬものにあらず。寄りて問へ。亡くなりたる人には

更に非常の……決して不思議な魔物ではない。亡くなりたる人には……死人ではないやうである。何のさる人をか一何のまあそんな死人などを。木精一古人は山中に於ける聲の反響を不可思議なものに思ひ、木の精魂のなす業と解し、それを木魂又は山彦と名づけて恐れたもの。欺きて一たぶらかして。いと不便にも……誠に折わるい仕儀で御座いますなあ、折角御病人をお連れ申すに此處は穢のある處らう御座いますよ。あやしの様に……宿守の男は變な恰好で手で額を撫で上げながら出て來た。困つた様子。まうで來たりしかども……私が驅けつけて來ても知らぬ顔して居りました。さこそは人を……そんな風に人を脅やかしますが大した事もない奴で御座いますよ。かの夜深き……宿守は夜更けて尼君や僧都達に差上げる召上り物の用意の方に氣を奪はれてゐるのであらう。寄せたれば一近づかせると。かばかりの天の下の……僧都様ほど

あらぬにこそあめれ。もし死にたりける人を棄てたりけるが、蘇りたるか」といふ。何のさる人をか、この院の内に棄て侍らむ。たとひ誠に人なりとも、狐木精やうのもの、欺きて取りもて來たらむにこそ侍らめ。いと不便にも侍りけるかな。穢らひあるべき所にこそ侍るめれ」といひて、ありける宿守の男を呼ぶ。山彦の答ふるもいと恐ろし。あやしの様に額おしあげて出で來たり。こゝには若き女房などや住み給ふ。かゝる事なむある」とて見すれば、狐の仕うまつるなり。この木のもとになむ、時々怪しき業し侍る。一昨年の秋も、こゝに侍る人の子の、二つばかりに侍りしを、取りてまうで來たりしかども、見驚かず侍りき。さてその兒は死にやしにし」といへば、生きて侍りき。狐はさこそは人を脅かせど、事にもあらぬ奴」といふ様いと馴れたり。かの夜深きまわり物の所に、心を寄せたるなるべし。僧都「さらばさやうの物のしたる業か。猶よく見よ」とて、この物おぢせぬ法師を寄せたれば、鬼か神か、狐か木精か。かばかりの天の下の驗者のおは

遂に死ぬべくは……それでも結局死ぬものなら仕方がない、この大徳……例の勇敢な僧。たいくしき業かな……迂闊ななされ方だ。怠慢で不行届のこと。意で、必死……きつとこの者は死んで此處に穢れがかりませう。もどく……非難する。雨にうち失はせむは……雨に打たせて死なせてしまふのは誠に残酷な事だから、僧都様のお計らひは當然な事だ。物をうたていひなす……物事を變な風に導く。降り給ふほど……尼君が到着して車からお下りになる際。のしる……人々が聲高に騒ぐ。何か物に……先程の怪しい人は。人に相違ありません。しかん……の事をなむ……これ……の事を取計らひました。六十にあまる年……六十餘りのこの年になつて。おのが寺にて……實は私が長谷寺で見た夢があります。遺戸になむ……遺戸の處に置いてあります。遺戸は引開ける戸。人も寄り付か……その怪しい女の側

て助け試みむ。遂に死ぬべくは、いふ限にあらず」と宣ひて、この大徳して抱き入れさせ給ふを、弟子ども「たいくしき業かな。いたう煩ひ給ふ人の御あたりには、よからぬ物を取り入れて、穢らひ必ず出で來なむとす」と、もどくもあり。又「物の變化にもあれ、目に見す……生ける人を、かゝる雨にうち失はせむは、いみじき事なれば」など、心々にいふ。下衆などは、いと騒がしく、物をうたていひなすものなれば、人騒がしからぬ隠れの方になむ臥せたりける。御車寄せて……り給ふほど、いたう苦しがり給ふとてのしる。少し静まりて、僧都「ありつる人は、いかゞなりぬる」と問ひ給ふ。なよ……として物もいはず、生きもし侍らず。何か物にけどられにける人にこそ」といふを、妹の尼君聞き給ひて、「何事ぞ」と問ふ。「しかん……の事をなむ、六十にあまる年、珍らかなるものを見給へつる」と宣ふ。うち聞くまゝに、「おのが寺にて見し夢ありき。いかやうなる人ぞ。まづその様見む」とて泣きて宣ふ。「只この東の遺戸になむ侍る。はや御覽せ

には介抱の人も居らず。香は……着物に柱き籠めた香は。たい我が戀ひ悲し……妹尼は全く平素自分の戀ひ歎いてゐる死んだ娘が歸つて來たものだと思つて。この尼は右衛門督といふ人の妻であつたが、某中將に嫁したその娘が若死したのを歎いて出家した由が下に見えてゐる。御達……女房達。いかなりつらむとも……發見された時どんな様子をしてゐたかも知らぬこの女房達は。いかなる人か……貴女はどんな人でまあ此處にからしていらつしやるのですか。湯取り……妹尼は薬湯を取つて自分女口の口につき込んだりしてゐるが。験者の阿闍梨……長谷に同行した僧。あやしき御物扱ひなり……變なお道樂ですなあ。神などの御爲に……神分といつて祈禱にかゝる前に般若心經を讀んで神道に手向ける事だと舊註の説。よく調じて問へ……憑物をうまく調伏して問ふがよい。え生き侍らじ……これは助かりますまい、つまらぬ死人の穢れ故に此處に引籠つて難儀致しませう。

よ」といへば、急ぎ行きて見るに、人も寄り付か……捨て置きたりける。いと若う美しげなる女の、白き綾の衣一襲、紅の袴を著たる。香はいみじう芳ばしくて、あてなるけはひ限なし。たゞ我が戀ひ悲しむ女の歸りおはしたるなめりとして、泣く……御達を出だして、抱き入れさす。いかなりつらむとも、有様見ぬ人は、恐ろしからで抱き入れつ。生けるやうにもあらで、流石に目をほのかに見あげたるに、「物宜へや。いかなる人か、かくては物し給へる」といへど、物覚えぬ様なり。湯取りて手づから掬ひ入れなどするに、只弱りに絶え入るやうなりければ、なか……いみじき業かなとて、「この人亡くなりぬべし。加持し給へ」と、験者の阿闍梨にいふ。「さればこそ、あやしき御物扱ひなり」とはいへど、神などの御爲に經讀みつ、祈る。僧都もさし覗きて、いかにぞ。何のしわざぞと、よく調じて問へ」と宣へど、いと弱げに消えもて行くやうなれば、「え生き侍らじ。すゞなる穢らひに籠りて煩ふべきこと。流石にいとやむごとなき人にこそ侍るめれ。死に果つ

流石にいと……然しこの女は大變身
 分高い人でせう、死んでしまつて
 も、いゝ加減に葬る譯にもいきま
 せん。
 あなかま——まあ尊ましい。
 煩はしき事もぞある一人に知れては
 厄介な事が起るかも知れない。
 尼君は——妹尼は。
 この人を……この女を本復させて見
 たく惜しがつて、びつたりと側に
 附添うてゐた。
 徒らになさじ——死なせたくない。
 見る限……そばにゐる程の人々が皆
 世話を焼いて奔走した。
 いみじう悲しと思ふ……若死したの
 がひどく可愛さうと歎いてゐる娘
 の代りに、佛様が貴女を私に授け
 て下さつたものと存じますのに。
 なか——なる事をや……私はなまな
 か一層の歎をする事せう。
 さるべき契にてこそ——然るべき宿縁
 があればこそ。
 不用の人なり——私は世にあつて益な
 い者で御座います。
 この河——宇治河。
 まれ——物宜ふを……たまさか口を
 おき——になつたのを、やれ嬉しや
 と思ひますのに。
 さる所には……あんな變な處には居
 られましたか。

とも、たゞにてやは棄てさせ給はむ。見苦しき業かなといひ合へり。
 一あなかま、人に聞かすな。煩はしき事もぞあるなど口固めつ、尼
 君は親の煩ひ給ふよりも、この人を生け果て、見まほしく惜みて、う
 ちつけに添ひ居たり。知らぬ人なれど、見めのこよなうをかしけれ
 ば、徒らになさじと、見る限あつかひ騒ぎけり。流石に時々目見あけな
 どしつ、涙の盡きせず流るゝを、あな心うや、いみじう悲しと思ふ
 人の代りに、佛の導き給へると思ひ聞ゆるを、かひなくなり給はば、
 なか——なる事をや思はむ。さるべき契にてこそかく見奉るらめ、猶
 いさ、か物宜へ——といひ續くれど、辛うじて、いき出でたりとも、怪
 しき不用の人なり。人に見せて、夜この河に落し入れ給ひてよと、息
 の下にいふ。まれ——物宜ふを嬉しと思ふに、あないみじや、いかな
 ればかくは宜ふぞ、いかにしてさる所にはおはしつるぞと問へども、
 物もいはずなりぬ。身にもし疵などやあらむとて見れど、こ、はと見
 ゆる所なく美しければ、淺ましく悲しく、まことに人の心惑はさむと

まことに人の心……ほんに人の心を
 誰かさうとして現れて来た化生の
 ものではないか知らんと。
 二人の人を——母の尼と浮舟とを。
 怪しき事どもを思ひ騒ぐ——浮舟の素
 姓の變な事などを怪んで彼はいつ
 てゐる。
 僧都に仕うまつりける……嘗て僧都
 に仕へてゐたのが、かうして僧都
 が宇治院にいらつしやると聞いて
 尋ねて来た者も。
 故八の宮の御女——浮舟。
 右大將殿の……薫君がその人にお通
 ひなされましたが。
 殊に惱み給ふ事も……大してお煩ひ
 もなさらず亡くなられたと申して
 大騒ぎして居ります。
 さやうの人の魂を……この正體知れ
 ぬ女は或は鬼がそんな人の魂を奪
 取つて化けて来たのかと僧都は思
 ふと、現に眼前に見ながら眞の姿
 があるものと思はれぬ氣がして。
 夜べ見やられし火は……昨夜こゝか
 ら見えた火は人を焼くやうな大袈
 裟な様子にも見えなかつたに。屍
 體が無かつたのでさう見えたもの。
 珠更に事そぎて——愈と簡略にして。
 穢らひたる人とて……この下衆は死
 者の穢に觸れた人だといつて内へ
 入れずに歸した。

て出で來たる假のものにやと疑ふ。二日ばかり籠り居て、二人の人を
 祈り加持する聲絶えず、怪しき事どもを思ひ騒ぐ。そのわたりの下衆
 などの、僧都に仕うまつりける限は、かくておはしますなりとて、訪
 らひ出で來る、物語などしていふを聞けば、故八の宮の御女、右大將
 殿のかよひ給ひしが、殊に惱み給ふ事もなくて、俄にかくれ給へりと
 て騒ぎ侍る。その御送葬の雜事ども仕うまつり侍るとて、昨日はえ參
 り侍らざりしといふ。さやうの人の魂を、鬼の取りもて來たるにやと
 思ふにも、かつ見る——在るものとも覺えず、危く恐ろしと思す。人
 人「夜べ見やられし火は、しか事々しき氣色も見えざりしを」といふ。
 下衆「殊更に事そぎて、嚴めしくも侍らざりし」といふ。穢らひたる人とて、
 立ちながら追ひ返しつ。「大將殿は、宮の御女もち給へりしは、失せ給
 ひて年頃になりぬるものを、誰をいふにかあらむ。姫宮をおき奉り給
 ひて、世に異心おはせじ」などいふ。
 尼君よろしくなり給ひぬ。方も明きぬれば、かくうたてある所に、久

手

習

大將殿は―薫君は。宮の御女―大君の事をいふ。誰をいふにか……今頃八宮のお娘が亡くなられたとは一體それは誰の事をいふのだらう、殊に薫君は女一宮以外に決して浮氣などなさるまい。

尼君よろしく―母の尼は大分快方に方も明きぬれば―塞りだつた方角もよくなつたから。

この人は―浮舟は。

老人―母の尼。

次には……次の車には浮舟を。湯参りなどし給ふ―浮舟に薬湯を進めたりなさる。

坂本―西坂本。比叡山の山城方の登り口。

小野―大原村の一部。

中宿をぞ……途中に泊り支度をしておけばよかつたなど。

この知らぬ人―浮舟。

老の病の……老病の事で何時と極つて悪い事もないのが、苦しいと思つた遠い旅行の名残で又暫くは煩つたが。

のぼり給ひぬ―横川へ歸られた。

法師のあたりには……若い女を連れてきた故のこと。

見ざりし人には……實際見なかつた弟子連には僧都は話さない。

しうおはせむも便なしとて歸るに、この人はなほいと弱げなり。道の程もいかゞ物し給はむ。いと心苦しきこと」といひ合へり。車二つして、老人の乗り給へるには、仕うまつる尼二人、次にはこの人を臥せて、傍に今一人乗り添ひて、道すがら行きもやらず、車とゞめて湯参りなどし給ふ。比叡坂本に、小野といふ所にぞ住み給ひける。そこにおはし著く程いと遠し。「中宿をぞ設くべかりける」などいひて、夜更けておはし著きぬ。僧都は親をあつかひ、女の尼君はこの知らぬ人をはぐくみて、皆抱きおろしつゝ、休む。老の病のいつともなきが、苦しと思ひ給ひし遠道の名残こそ、暫し煩ひ給ひけれ、やう／＼よろしうなり給ひにければ、僧都はのぼり給ひぬ。「かゝる人をなむ率て來たる」と、法師のあたりには善からぬ事なれば、見ざりし人にはまねはず。尼君も皆口固めさせつゝ、もし尋ね來る人やあると思ふも、靜心なし。いかでさる田舎人の住むあたりに、かゝる人落ちあふれけむ。物語などしたりける人の、心地など煩ひけむを、繼母などやうの人の

尼君も皆……小野の尼君も召使達に口どめをして。落ちあふれ―零落し。心地など煩ひけむを―途中で病氣などになつたのを。置かせたりけるにや―あの宇治院に捨て置かせたのか。

いつしか人にも……早く人並の體に本復させてやりたいと思ふのに。起きあがる世もなく―浮舟は起き上る折もなく。

夢語りも仕出でて―妹尼が長谷で見初より祈らせし阿闍梨―長谷詣に同行した阿闍梨をさす。

芥子焼く事―祈禱の爲の護摩。

うちへ―引續き。

かひなき事を……妹尼が介抱して。憑きしみ……深く取憑いてこの人の體を我が物にしてゐる魔物が。あが佛―我が親愛なる人よとの意を強く表はす詞。あが君ともいふ。京に出で給は……京までもお出になるのは不本意でせうが、此處までは差支ありますまい。

やがてうち捨て……ましかば―あの儘捨て置いたらどんなに残念な事だつたらうに、よこそ救つた。それにとまらずば―それ程までにして命が留らなかつたら。

たばかりて置かせたりけるにや、などぞ思ひ寄りける。河に流してよ」といひし一言より外に、物も更に宜まはねば、いと覺束なく思ひて、いつしか人にもなして見むと思ふに、つく／＼として起きあがる世もなく、いと怪しうのみ物し給へば、遂には生くまじき人にやと思ひながら、うち捨てむもいとほしくいみじう、夢語りも仕出でて、初より祈らせし阿闍梨に、忍びやかに芥子焼く事させ給ふ。

うちはへかく扱ふ程に、四五月も過ぎぬ。いと怪しうかひなき事を思ひわびて、僧都の御許に、なほ下り給ひて、この人助け給へ。流石に今日までもあるは、死ぬまじかりける人を、憑きしみ領じたる物の去らぬにこそあめれ。あが佛、京に出で給は……こそはあらめ、こゝまではあへなむ」など、いみじき事を書き續けて、奉れ給へれば、「いと怪しき事かな。かくまでもありける人の命を、やがてうち捨て、ましかば。さるべき契ありてこそは、我しも見つけ、め、試に助け果てむかし。それにとまらずば業盡きにけりと思はむ」とて、下り給ひけり。喜

下り給ひけり。小野へ下られた。喜び拜みて。妹尼が。不氣味な相好が自むつかしき事。不氣味な相好が自然現れる筈のものですが。ねぢけたる所なく。いやに變つた所が更におありにならず。おふな。大凡に。見付けしより。發見の當初からして引續いて不思議なあの人の御様子ではある。警策もと對策の優れたものをいひ轉じて詩文の秀逸にもその他の事物の優良なものにも用ゐる語。警策なりける。御容面にかゝる。容面。ヨウメイ。容貌。功徳の報にこそ。容貌端正に生まる。者は前世に善根功徳を積んだ報だといふ佛説によつていふ。違ひ日。不運。もしやと。若しやそれではあるまいかと思ひ當るやうな話を。何かは長谷の。何のまあ。これは初瀬の觀音様が私に授けて下された人なのです。それも縁に隨ひてこそ。授けて下さるにしても。さうなるべき縁があつてこそ授けても下さるのでせう。何の因縁もなくそんな事がある道理がありません。おほやけの召。あの僧都は朝廷の

び拜みて、月頃の有様を語る。かく久しう煩ふ人は、むつかしき事自らあるべきを、聊か衰へず、いと清げに、ねぢけたる所なくのみ物し給ひて、限と見えながらも、かくても生きたる業なりけり。など、おふな。おふな泣く。宣へば、見付けしより、珍かなる人の御有様かな。いでとて、さし覗きて見給ひて、げにいと、警策なりける人の御容面かな。功徳の報にこそ、かゝる容面にも生ひ出で給ひけり。いかなる違ひ目にて、かくそこなはれ給ひけむ。もしきにやと聞き合はせらる、事もなしや」と問ひ給ふ。更に聞ゆる事もなし。何かは、長谷の觀音の賜へる人なり」と宣へば、何か、それも縁に隨ひてこそ導き給ふらめ。種なき事はいかでか。など宣ひ、怪しがり給ひて、修法はじめたり。おほやけの召にだに隨はず、深く籠りたる山を出で給ひて、すゝろにかかる人の爲になむ行ひ騒ぎ給ふと、物の聞えあらむ、いと聞きにくかるべしと思し、弟子共もいひて、人に聞かせじと隠す。僧都「いで、あなかま、大徳たち、われ無慚の法師にて、忌む事のなかに破る戒は多

お召にも應ぜぬ辭に、深く籠つた山から出て得體も知れぬあんな女の爲に大騒ぎして加持して居られると、世間の評判が立つたり。と思し。尼君が。無慚。僧が戒律を犯して恥ともせぬを破戒無慚といふ。こゝは僧都が自ら卑下していふ。忌む事のなかに。多くの戒律の中で破つてゐる戒も随分あるだらうが女犯戒については。人のもどき負はむは。世間の非難受けさうなのは、これも約束事であらう。善からぬ人の。無知な者共が師の坊の事を變に噂しましたら。見えすば。の下。我が身を減し給へ。などの語が略かれてある。いみじき事どもを。僧都は非常な決意を自ら誓はれて。人に狩り移して。浮舟に憑いてゐる物怪を寄兎(ウサ)に移して。調ぜられて。新り伏せられて。いさゝかなる世に。僅の事でもこの世に妄執を残して、中有に迷ひ歩いてゐた間に。よき女のあまた住み給ひし所。宇治の八宮の邸をいふ。片へは失ひてしに。一部分は取り殺したが。大君の事をいふ。

からめど、女の筋につけて、まだ誘取らず、過つことなし。齡六十にあまりて、今更に人のもどき負はむは、さるべきにこそはあらめ」と宣へば、善からぬ人の、物を便なくいひなし侍る時には、佛法の瑕となり侍ることなり」と、心よからず思ひていふ。この修法の程にしるし見えすば」と、いみじき事どもを誓ひ給ひて、夜一夜加持し給へる曉に、人に狩り移して、何やうの物のかく人を惑はしたるぞと、有様ばかりいはせまほしうて、弟子の阿闍梨代り。に加持し給ふ。月頃はいさゝかも顯はれざりつる物の氣、調せられて、おのれは此處までまうで来て、かく調せられ奉るべき身にもあらず。昔は行せし法師の、いさゝかなる世に恨をとめて漂ひありきし程に、よき女のあまた住み給ひし所に住みつきて、片へは失ひてしに、この人は心と世をうらみ給ひて、我いかで死なむといふ事を、夜晝宣ひしに便を得て、いと暗き夜、一人物し給ひしを取りてしなり。されど觀音と様かう様にはぐくみ給ひければ、この僧都に負け奉りぬ。今は退りなむ」との、し

この人は……浮舟は自分で世をお恨
 みなされて。一人物し給ひしを……一人でいらつ
 しゃつた所を攫つたのです。
 はぐくみ給ひければ、浮舟を保護な
 されたので。今は退りなむ。最早浮舟の身から離
 れて立去りませう。
 憑きたる人……物怪を移されたその
 寄託が氣力が弱いせむか、はつき
 りとも名乗らない。
 正身……浮舟をさす。
 いさゝか物覺えて……多少意識を回
 復して周囲を見廻した處が。
 住みけむ所……自分の住んでゐた場
 所も、自分は何といふ名の人間だ
 といふ事すらも、確實にはつきり
 と覺えない。
 われは限とて……私はこれが最後だ
 と思つて身を投げた者だ、それが
 今一體何處に來てゐるのだらう、
 と一生懸命に思出して見ると。
 いといみじと物を思ひ歎きて……以
 下浮舟の回想。
 來し方行く先も覺えて、前後も忘れ
 て。
 行くべき方も……どちらへ行つてよ
 いか分らず、といつて屋敷へ歸る
 のも中途はんばで。
 鳴瀝がまじうて……死にそこなつて

る。かくいふは何ぞと問へば、憑きたる人、物はかなきけにや、はか
 ばかしくもいはず。正身の心地はさわやかに、いさゝか物覺えて見廻
 したれば、見し人の顔は一人もなく、みな老法師、ゆがみ衰へたる
 者どものみ多かれば、知らぬ國に來にける心地して、いと悲し。ありし
 世の事思ひ出づれど、住みけむ所、誰といひし人とだに、たしかには
 かばかしうも覺えず、只、われは限とて身を投げし人ぞかし、いづくに
 來にけるにかと、せめて思ひ出づれば、いといみじと物を思ひ歎きて、
 皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風烈しう川波もあら
 う聞えしを、ひとり物恐ろしかりしかば、來し方行く先も覺えて、簀
 子の端に足をさしおろしながら、行くべき方も惑はれて、歸り入らむ
 も中空にて、心強くこの世に、失せなむと思ひ立ちしを、鳴瀝がまじう
 て人に見付けられむよりは、鬼も何も喰ひて失ひてよといひつゝ、つ
 くづくと居たりしを、いと清げなる男の寄り來て、いざ給へ。おのが
 許へ」といひて抱く心地のせしを、宮と聞えし人のし給ふと覺えし程

恥かしい有様で人に見つけられよ
 うよりは、鬼でも何でも私を食ひ
 盡してくれよかしと。
 いざ給へ……いざあ、いらつしやい。
 宮と聞えし人の……句宮がさうなさ
 るのだと思つたその時から氣が變
 になつたらしい。
 遂にかく本意のごとも……とう／＼
 こんなに希望通りに死ぬことも出
 來なくなつてしまつた事よと。
 人のいふを聞けば、看護の人々の話
 によると。
 いかによきさまを……意識を失つて
 ゐた間に、どんなに嫌な動作を知
 らない人々に見られた事だらうと。
 なか／＼沈み給へり、却て塞いでゐ
 られた。
 現心もなき……意識を失つて居られ
 た時分は、夢中のやうな有様で食
 物を多少召上る事もあつたのに。
 うちへぬるみなど……今まで熱氣
 などのあつたのは。
 たゆむ折なく……妹尼が怠る時なく
 浮舟に付き切りて。
 ある人々……此處にゐる人々。
 あたらしき御様容貌……惜しい浮舟の
 姿容。
 心には……浮舟は自分の心の中では、
 さばかりにて……あれ程の重態であ
 りながら命を取留めた位の浮舟の

より、心地違ひにけるなめり、知らぬ所にすゑ置きて、この男は消
 え失せぬと見しを、遂にかく本意のごともせずなりぬると思ひつゝ、
 いみじう泣くと思ひし程に、その後の事は、絶えていかにも……覺え
 ず、人のいふを聞けば、多くの日頃も經にけり、いかに憂きさまを、知ら
 ぬ人に扱はれ見えつらむと、恥かしく、遂にかくて生き返りぬるか
 と思ふも口惜しければ、いみじく覺えて、なか／＼沈み給へり。日頃は
 現心もなき様にて、物いさゝか參る折もありつるを、露ばかりの湯を
 だに參らず。いかなれば、かく頼もしげなくのみはおはするぞ。うち
 はへぬるみなどし給へることは醒め給ひて、さわやかに見え給へれ
 ば嬉しう思ひ聞ゆるを、と泣く／＼たゆむ折なく添ひ居て、扱ひきこ
 え給ふ。ある人々も、あたらしき御様容貌を見れば、心を盡してぞ惜
 み聞えまもりける。心には、猶いかで死なむとのみと思ひわたり給へ
 ど、さばかりにて生きとまりたる人の命なれば、いと執念くて、やう
 やう頭もたげ給へば、物參りなどし給ふにぞ、なか／＼面瘦せもてゆ

手

習

命だから、非常にねばり強くて。いつしかと……妹尼は間もなく浮舟が回復するだらうと。さてのみなむ……それが私として唯一の生きる道で御座います。いとほしげなる御座を……剃りこぼつにはお氣の毒な程美しい御器量、どうしてさうされませう。頂ばかりをそぎ、剃りこぼたずに髪先だけを切つて。心もとなければ……浮舟はそれでは氣が済まないけれど、妹尼は元々鋭敏でない氣質なので、無理に分別らしく出家のことを要請はしない。

今はかばかりにて……當分は尼になつた眞似事だけにして置いて、病氣をすつかり直してお上げなさい。上り給ひぬ。僧都は横川にお歸りになつた。

尼君は喜びて……妹尼は喜んで強ひて浮舟を起きて坐らせ。さばかり淺ましう……浮舟の髪は病中あれ程構ひもせず只束ねて引延へてゐたのであるが。

一年たらぬ……老女ばかり多いこの庵室で浮舟の姿が目立つての意。伊勢物語「百年に一年たらぬつゝも髪われを戀ふらし面影に見ゆ」の上の句のみを取つて單に老女の

く。いつしかと嬉しう思ひ開ゆるに、^{浮舟}「尼になし給ひてよ。さてのみなむ、生くやうもあるべき」と宣へば、^{妹尼}いとほしげなる御座を、いかでかさはなし奉らむ」とて、只頂ばかりをそぎ、五戒を受けさせ奉る。心もとなけれど、元よりおれ／＼しき人の心にて、え強ひてさかしくも宜はず。僧都は「今はかばかりにて、いたはりやめ奉り給へ」といひ置き、^{のほ}て上り給ひぬ。夢のやうなる人を見奉るかなと、尼君は喜びて、せめて起しするつゝ、御髪手づから梳り給ふ。さばかり淺ましう引きゆひてうち遣りたりつれど、いたうも亂れず、解き果てたれば、つや／＼とけうらなり。一年足らぬつゝも髪のみ多かる所にて、目もあやにいみじき天人の、天降れるを見たらむやうに思ふも、危きこゝちすれば、^{妹尼}「などかいと心うく、かばかりいみじく思ひ開ゆるに、御心隔て、は見え給ふ。何處に誰と聞えし人の、さる所にはいかでおはせしぞ」とせめて問ふを、いと恥かしと思ひて、^{浮舟}「怪しかりける程に、皆忘れたるにやあらむ、ありけむ様なども、更に覺え侍らず。只ほのかに思ひ出づ

意を表した。危き心地すれば、若し天人なら何時飛去るか不安だから。原文、すれどとある。宜長説による。

かばかりいみじく……私の方ではこれ程深く貴女をお思ひ申すのに。何處に誰と……貴女はこの何と仰しやつた方で、どうしてあんな處にいらつしやいましたか。

怪しかりける程に……病中意識を失つてゐた間に。

この世に……現世に。率てゆく心地なむせし……私を連れて行くやうな風に思ひました。

世の中に……この世にまだ生きてゐたわいと、どうか人に知られないやうにしたいのです。

いとみじうこそ……大變面倒な事が起りませうから。

赫奕姫……現存の小説中最も古い竹取物語の女主人公、竹取の翁が或日野山で竹の節の中から見つけ出した美しい姫君。

消え失せむとすらむと……赫奕姫が遂に昇天したやうに或は浮舟も姿を消さうかと。

この主人……庵室の主人、母の尼。女の尼君……妹尼。

上達部……右衛門督だつた人。但右衛門督は從四位下相當であるが中納

る事としては、只いかでこの世にあらじと思ひつゝ、夕暮ごとに端近くて詠めし程に、前近く大きな木のありし下より、人の出できて率て行く心地なむせし。それより外の事は、我ながら誰ともえ思ひ出でられ侍らず」と、いとらうたげにいひなして、「世の中に猶ありけりと、いかで人に知られじ。聞きつくる人もあらば、いとみじうこそ」とて泣い給ふ。餘り問ふを苦しと思したれば、え問はず、赫奕姫を見つげたりけむ竹取の翁よりも、珍しき心地するに、いかなる物の隙に消え失せむとすらむと、靜心なくぞ思しける。この主人もあてなる人なりけり。女の尼君は上達部の北の方にてありけるが、その人亡くなり給ひて後、女た一人をいみじくかしづきて、よき君達を婿にして思ひ扱ひけるを、その女の君も亡くなりければ、心憂しいみじと思ひ入りて、形をも變へ、かゝる山里には住み初めたるなりけり。世と共に戀ひわたる人の形見にも、思ひ擬へつべからむ人をだに見出でてしがなと、徒然と心細きまゝに、思ひ歎きけるを、かく覺えぬ人の、容貌

手

習

言參議が兼任する事が多く、參議は上達部であるから、この人も多分さうであつたらう。
 よき君達へ―出家をし。
 形をも變へ―常住不斷に戀ひ續けてゐる亡き娘の形見とも見られるやうな若い女を得たいものだとかく覺えぬ人の―思ひも寄らなかつた浮舟が。
 勝りざまな。―娘より勝り加減な。現の事とも覺えず―夢のやうで。ねびにたれど―この妹尼は年は寄つてゐるけれど。
 昔の山里よりは―この小野の里は昔住んだ宇治よりは。
 所につけたる。―場所柄相應に人のする事を皆がしつゝ。
 引板―鳴子。
 見し東路の。―浮舟は嘗て常陸にゐた時の事なども思出されて。
 夕霧の御息所―落葉宮。朱雀院の皇女ゆゑ御息所といふ。母君の病氣保養に隨つて小野の山莊に行かれ。た事が夕霧の巻の冒頭に見え。山に片かけたる。―庭の一部を山に續けて造つた寢室だから。
 尼君ぞ―妹尼が。
 少將の尼―弟子の尼。
 かゝる業は―貴女は音楽は。浮舟に

けはひも勝り様なるを得たれば、現の事とも覺えず、あやしき心地しながら嬉しと思ふ。ねびにたれど、いと清げに由ありて有様もあてはかなり。昔の山里よりは、水の音もなごやかなり。造り様故ある所の木立おもしろく、前栽などもをかしく故を盡したり。
 秋になりゆけば、空の氣色もあはれなるを、門田の稻刈るとて、所につけたる物まねびしつゝ、若き女どもは歌うたひ興じ合へり。引板ひき鳴らす音もをかき、見し東路の事なども思ひ出でられて。かの夕霧の御息所のおはせし山里よりは、今少し入りて、山に片かけたる家なれば、松蔭しげく風の音もいと心細きに、徒然と行をのみしつゝ、いつともなくしめやかなり。尼君ぞ、月などあかき夜は琴など弾き給ふ。
 少將の尼などいふ人は、琵琶弾きなどしつゝ、遊ぶ。―かゝる業はし給ふや。徒然なるに―などいふ。昔も怪しかりける身にて、心のどかにさやうの事すべき程もなかりしかば、聊かをかきき様ならずも生ひ出でにけるかなと、かくさだ過ぎたる人の、心を遣るめる折々につけて

問ふ調。
 昔も怪しかりける。―自分は幼い時から不運な身で、ゆつくり落着いて音楽の道など稽古する機會もなかつたので。
 聊かをかきき様ならず。―少しの優雅な點もなく成長した事よと。
 かくさだ過ぎたる人。―こんな老人透が氣慰めに琴など弾いてゐる時、時につけて浮舟は思ひ出す。
 なほ淺ましく。―いくら考へて見ても矢張呆れる位取柄のない身ではあると。
 手習に―いたづら書きに。これより浮舟を「手習の君」とも呼ぶ。
 身を投げし。―堪へ難い悲みに涙は河をなす程泣きつゝ、遂に早瀬に身を投げた私を、誰がこんなな救ひ留めてくれた事か、却て恨めしい心地がする。しがらみは構。
 思の外に。―助けられて更に物思を重ねるのが思も寄らぬ事で心外なので、我が身の將來も心配で。われかかて。―自分がかうしてこの世に生きてゐるといふ事も都では誰が知らうか、恐らく誰も知るまゝいと。思ふ人々の居る都をよそへていつた。
 今は限と。―愈自殺と決心した時は。

は思ひ出づ。なほ淺ましく物はなかりけると、我ながら口惜しければ手習に、
 身を投げし涙の河のはやき瀬を
 しがらみかけて誰かとゞめし
 思の外に心憂ければ、行末も後めたく、疎ましきまで思ひ遣らる。月のあかき夜な―、老人どもは艶に歌よみ、古へ思ひ出でつゝ、様々の物語などするに、答ふべき方もなければ、つくづくとうち詠めて、
 誰かは知らむ月のみやこに
 今は限と思ひはてにし程は、戀しき人多かりしかど、異人々はさしも思ひ出でられず、たゞ親いかに惑ひ給ひけむ、乳母よろづに、いかで人並々になさむと思ひ苛られしを、いかに敢へなき心地しけむ、いづこにかあらむ、われ世にあるものとは、いかでか知らむ同じ心なる人もなかりしまゝに、よろづ隔つる事なく語らひ見馴れたりし右近な

異人々は今では他の人々は。いかで人並みに……どうにかして私を人並の幸福な身にしよと焦慮してゐたのに、私が姿を消したのでもんなにあつて思つたらう、彼は何處にゐるだらうか。同じ心なる……浮舟は他には氣の合つた侍女達も無かつたので。若き人の……小野の庵室では若い女が、こんな山里に今はこれまでと世を思ひ諦めて引籠るといふ事はむづかしい事だから。常の人にては……何時もゐる人達ではあつた。異様にてあるも……宮仕でなく縁になど付いてゐる者も。かやうの人につけて……こんな人達が京から来るにつけて……私の關係ある家に入つてもして、その口から自然私がまだ生きてゐると誰にでも知れたら随分恥かしい事であらう。以下浮舟の心。いかなる様にて……どんな具合であらうついでゐたものかなどと、匂宮や薫の御推量が當り前でなく變な風に走るに違ない事を思ふので、浮舟は京から来るその人達に決して面會しない。こもき童女の名。尼君のわが人に……妹尼が自分の召

ども、折々は思ひ出でらる。若き人のかゝる山里に、今はと思ひ絶え籠るは難き業なりければ、只いたく年經にける尼七八人ぞ常の人にてはありける。それらが女、孫やうの者ども、京に宮仕するも、異様にてあるも、時々ぞ來通ひける。かやうの人につけて、見しわたりに往き通ひ、おのづから世にありけりと、誰にもく聞かれ奉らむこと、いみじく恥かしかるべし。いかなる様にてさすらへけむなど、思ひやり世づかず怪しかるべきを思へば、かゝる人々に、かけても見えず。たゞ侍從、こもきとて、尼君のわが人にしたりける一人をのみぞ、この御方にいひ分けたりける。見めも心様も、昔見し都鳥に似たることなし。何事につけても、世の中にあらぬ所はこれにやあらむとぞ、かつは思ひなされける。かくのみ人に知られじと忍び給へば、まことに煩はしかるべき故ある人にも物し給ふらむとて、くはしき事、ある人々にも知らせず。尼君のむかしの婿の君は、今は中將にて物し給ひける。弟の禪師の君、

使にして申付けた。都鳥……都の人々の意。我が思ふ人々は……どうしてゐるやらといふ浮舟の心持を表はす爲に、伊勢物語の、「名にしおはどいざ言問はむ都鳥我が思ふ人はありやなしや」との詞を借り用ゐたもの。或は別に引歌あるか。世の中にあらぬ所……この世の外のこと。東屋の巻の歌の詞（一九二八頁）を思ひ出して。まことに煩はしかるべき……妹尼は浮舟が本當に面倒な事情ある人なのだらうと察して。ある人々……庵室にゐる人々。婿の君……妹尼の亡き娘の夫。弟の禪師の君……中將の弟の禪師の君といふのが横川の僧都の許に弟子になつてゐて。山籠りしたる一年限を定めて山内に禁足の行をすること。中將此處に……中將が小野の庵室に忍びやかに……昔宇治に微行して來られた薫の御様子。これもいと心細き……此處も宇治と同様に寂しい。住みつきたる人々……住馴れた尼達。君もおなじ裝束……中將も狩衣姿。

僧都の御許に物し給ひけるが、山籠りしたるを訪らひに、兄弟の君達常にのぼりけり。横川に通ふ道のたよりによせて、中將此處におはしたり。前驅うち追ひて、あてやかなる男の入る來るを見出だして、忍びやかにておはせし人の御有様はひぞ、さやかに思ひ出でらる。これもいと心細き住居の徒然なれど、住みつきたる人々は、物清げにをかしうしなして、垣ほに植ゑたる瞿麥もおもしろく、女郎花桔梗など咲き始めたるに、いろくの狩衣姿の男どもの若き數多して、君もおなじ裝束にて、南面に呼びすゑたれば、うちながめて居たり。年二十八のほどにて、ねび整ひ、心地なからぬ様もてついたり。尼君、障子口に几帳たて、對面し給ふ。まづうち泣きて、年頃のつもりには、過ぎにし方いと氣遠くのみなむ侍るを、山里の光になほ待ち聞えさすること、うち忘れず止み侍らぬを、かつは怪しく思ひ給ふると宣へば、心のうちあはれに、過ぎにし方の事ども思ひ給へられぬをりなきを、あながち住み離れ顔なる御有様に、怠りつゝなむ。山籠りも羨ま

少將一少將の尼。昔見し人々は妻の在世中に仕へて
 心浅きにや……私が薄情でもある
 やうに皆がお思ひなさるでせう。
 仕うまつり馴れにし……少將の尼は
 中將夫婦に側近く仕へ馴れた人で
 かの廊の……先程私がああ端の端か
 ら入つた時。
 すべては……普通の女房など
 ではなささうな女の。
 打垂髪の一俗體の女姿の。
 姫君の……浮舟の一寸立つた後姿を
 中將が御覽になつたのだらうと少
 將の尼は思つて。
 こまかに見せたらば……もつとよく
 お見せしたら中將はきつとお氣に
 入るに違ない、亡くなられた奥方
 (妹尼の娘)は浮舟に比べるとずつ
 と劣つて居られたに、それでさへ
 まだ戀しがつていらつしやるもの
 をと、少將の尼は一人で合點して。
 過ぎにし御事……妹尼君が故姫君を
 忘れかねて歎いていらつした際。
 覚えぬ人……思ひがけない人。浮舟
 をさす。
 うち解け給へる……打寛いで居られ
 た浮舟のお姿を。
 かゝる事こそは……中將はかういふ
 耳よりな事もあるものだらうと。

まじかりつる人の打垂髪の見えつるは、世を背き給へるあたりに、誰
 ぞとなむ見驚かれつる」と宣ふ。姫君の立ち出で給へりつる後手を見
 給へりけるなめりと思ひて、ましてこまかに見せたらば、心とまり
 給ひなむかし、昔の人はいとこよなく劣り給へりしをだに、まだ忘れ
 難くし給ふめるをと、心一つに思ひて、^{少將}過ぎにし御事を忘れ難く慰め
 かね給ふめりし程に、覚えぬ人を得奉り給ひて、且暮の見物に思ひ聞
 え給ふめるを、うち解け給へる御有様を、いかで御覽じつらむ」とい
 ふ。かゝる事こそはありけれとをかしくて、何人ならむ、げにいとをか
 しかりつと、ほのかなりつるをなかく思ひ出づ。こまかに問へど、そ
 のまゝにもいはす。^{少將}「おのづから聞し召してむ」とのみいへば、うちつ
 けに問ひ尋ねむも、様悪しき心地して、^{尼者}「雨も止みぬ。日も暮れぬべし」
 といふに、^{妹尼}「唆かされて出で給ふ。前近き女郎花を折りて、なに匂ふら
 む」と口ずさみて、^{浮舟}「獨ごち立てり。人の物いひを流石に思し咎むるこ
 そ」など、^{古代}「古代の人どもは物めでをし合へり。いと清げに、あらまほし

そのまゝにもいはす。少將の尼が有
 りの儘にも答へず。
 うちつけに……眞正面から。
 なに匂ふらむ……拾遺……こゝにしも何
 匂ふらむ女郎花人の物いひさが憎
 き世に……の上句の意味のみを取つ
 て浮舟を女郎花に擬し、どうして
 こんな美しい人がゐるのか知らん
 との意を寓した。
 人の物いひ……人の噂を中將が流石
 に憚つて早く歸られるのが殊勝な
 事よ。中將の微吟した歌の下句を
 直に取つた當意即妙の詞。
 古代の人……古めかしい人。
 同じくは……同じ事なら、浮舟を娘
 の代りにして、中將を昔のやうに
 婿君としてお見上げ申したいもの
 である。
 藤中納言……中將の現在の妻の里。
 親の殿がち……父君のお屋敷に大抵
 いらつしやるといふ話です。
 心憂く物をのみ……心外にも貴女は
 私に隔ばかり置いていらつしやい
 ますのが。浮舟にいふ詞。
 さるべきな……かうした運
 命なのだと思念なされて。
 人の上も……娘の上も。
 思ひ聞え給ふべき……貴女を思つて
 いらつしやる人があるとしても、
 今は貴女は死なれたものと段々諦

くもねびまさり給ひにけるかな、同じくは昔のやうにても見奉らば
 や。藤中納言の御あたりには、絶えず通ひ給ふやうなれど、心もとゞ
 め給はず、親の殿がちになむ物し給ふとこそいふなれ」と、尼君も宣
 ひて、^{妹尼}「心憂く物をのみ思し隔てたるなむいとつらき。今は猶さるべき
 なめりと思しなして、晴れくしくもてなし給へ。この五年六年、時
 の間も忘れず、戀しく悲しと思ひつる人の上も、かく見奉りて後より
 は、こよなく思ひ忘れにて侍る。思ひ聞え給ふべき人々世におはすと
 も、今は世になきものにこそは、やうく思しなりぬらめ。よろづの
 事さし當りたるやうには、えしもあらぬ業になむ」といふにつけても、
 いと涙ぐみて、^{浮舟}「隔て聞ゆる心は侍らねど、怪しくて、生き返りける
 程に、よろづの事夢のやうにたどられて、あらぬ世に生まれたらむ人
 は、かゝる心地やすらむと覚え侍れば、今は知るべき人、世にあらむ
 とも思ひ出でず。ひた道にこそ睦ましく思ひ聞ゆれ」と宣ふ様も、げ
 に何心もなくうつくしければ、うち笑みてぞまもり居給へる。

手習

める氣になられたでせう。よろづの事さし當りたる……世の中の事は萬事その時のやうにばかりはない譯のもので、去る者は日々疎くなりませう。よろづの事夢のやうに……我が身の上のすべての事もまるで夢のやうによくは思出されず。あらぬ世に……全く知らない世界に生まれた人は。知るべき人……私を知つてゐる人が。ひた道にこそ……私は全く一途に貴女を力にお親しみ申して居るので御座います。禪師の君……中將の弟。猶さばかりの……矢張あの妹尼程の心構のある人は少いやうです。なべての人とは……侍女風情とは。さやらの所に……あんな尼法師ばかりの所によい女は置くべきものではないな。自ら目馴れて……自然尼法師の振舞が目に馴れて優雅な點が缺けて來るでせう。見ぬ事なれば……禪師の君は自分で實際見ない事だから。又の日……翌日中將が横川からお歸りになるにも。素通りは出来ませ

中將は山におはし著きて、僧都も珍しがりて、世の中の物語し給ふ。その夜は泊りて、聲尊き人々に經など讀ませて、夜一夜あそび給ふ。禪師の君と、こまやかなる物語などする序に、小野に立ち寄りて、物あはれにもありしかな。世を捨てたれど、猶さばかりの心ばせある人は難うこそなど宜ふ序に、「風の吹きあげたりつる隙より、髪いと長くをかしげなる人こそ見えつれ。あらはなりとや思ひつらむ、立ちてあなたに入りつる後手、なべての人とは見えざりつ。さやらの所に、よき女は置きたるまじきものにこそあめれ。且暮見るものは法師なり。自ら目馴れて覺ゆるむ不便なることぞかし」と宜ふ。禪師の君、「この春長谷に詣でて、あやしく見出でたる人となむ聞き侍りし」とて、見ぬ事なれば細かにはいはず。「あはれなりける事かな。いかなる人にかあらむ。世の中を憂しとぞ、さる所には隠れ居けむかし。昔物語の心地もするかな」と宜ふ。又の日歸り給ふにも、「過ぎ難くなむ」とておはしたり。さるべき心づかひしたりければ、昔思ひ出でたる御まか

んでねえ、といつて小野の庵室へお寄りになつた。さるべき心づかひ……小野でも中將が立寄られるかも知れぬと心用意をして居つたから。昔思ひ出でたる……娘の存命が思出されるやうなおもてなしで。袖口……今は尼姿の法衣の袖口が昔の美しかった袷の袖口とは様子が違つてゐるけれど。いや目……涙ぐんだ目つき。忍びたる様にて……この庵室に隠れてゐるやうな様子の女は。忘れわび侍りて……亡き娘の事を忘れてかねまして猶更罪障の深くなつて行きさうに思はれるその慰めに、この數ヶ月以來世話をしてゐる人なので。いかでかは聞き顯はさせ……どうして貴方はお聞き出しなされましたか知らん。うちつけ心ありて……最初から浮舟に懸想の心で通つて來たとした處で、こんな山深い道を遙々來る苦勞はそれを口實にして多少の無理もいつてよいでせう、まして私の亡き妻に準へる女なら私に没交渉な事としてお隠しなさるべきではありますまい。あだし野の……美しい女郎花よ、餘

なひの少將の尼なども、袖口さま異なれどもをかし。いとよいや目に尼君は物し給ふ。物語の序に、「忍びたる様にて物し給ふらむは、誰にか」と問ひ給ふ。煩はしけれど、ほのかにも見つけ給ひてけるを、隠し顔ならむも怪しければ、忘れわび侍りて、いと罪ふかうのみ覺え侍りつる慰めに、この月頃見給ふる人になむ。いかなるにか、いと物思しげき様にて、世にありと人に知られむことを、苦しげに思ひて物せらるれば、かゝる谷の底には誰かは尋ね聞えむと思ひつ、侍るを、いかでかは聞き顯はさせ給ひつらむ」と答ふ。うちつけ心ありて參り來むにだに、山深き道のかごとは聞えつべし。まして思し擬ふらむ方につけては、ことごとくに隔て給ふまじき事にこそは。いかなる筋に世を恨み給ふ人にか、慰め聞えばやなど、ゆかしげに宜ふ。出で給ふとて、疊紙に、
中將
「あだし野の風になびく女郎花
われし標ゆはむ道とほくとも」

所の野の風に靡かないでくれ、道は遠くとも私が通つて来て園を造り自分の物として眺めようからとの意。女郎花を浮舟に、あだし野をあだし男即ち他の男に擬した。入れたり―浮舟の手許に送つた。いと心にくき氣……中將は奥ゆかしい氣持を持つた人ゆゑ、御返事をなされても仔細ありません。いとあやしき手……誠に下手な私の筆蹟を何でお目にかげられませう。はしたなき事なり―御返事を上げないのは無作法です。聞えさせつるやうに……先程もお話し申上げたやうに、浮舟はまだ男女間の情なども分らず、普通と違つた女で、自分では御返事も上げません。

うつし植ゑて……あの浮舟は世を捨てた私の草庵に連れて来ていたはつて居りますが、中々外に氣を移す様子もなく、何か一心に思ひ詰めてゐるものやうです。此度は……今度は初めての事で返事せぬのも無理はないと。文など……中將は改つて浮舟に文などやらうのも流石に初心らしく。小鷹狩―秋の鷹狩の稱。おはしたり―中將が小野へ。例の尼―少將の尼。

と書きて、少將の尼して入れたり。尼君も見給ひて、^{妹尼}この御返り書かせ給へ。いと心にくき氣つき給へる人なれば、後めたくもあらじ」とそゝのかせば、いとあやしき手をは、いかでか」とて、更に聞き給はねば、^{妹尼}はしたなき事なり」とて、尼君「聞えさせつるやうに、世づかす人に似ぬ人にてなむ。

うつし植ゑて思ひみだれぬ女郎花

うき世をそむく草のいほりに

とあり。此度はさもありぬべしと、思ひゆるして歸りぬ。文などわざと遣らむも流石にうひくしう、ほのかに見し様は忘れず、物思ふらむ筋、何事と知らねどあはれなれば、八月十日あまりの程に、小鷹狩の序におはしたり。例の尼呼び出でて、一目見しより、^{中將}心なくてなむ」と宣へり。答へ給ふべくもあらねば、尼君「待乳の山となむ見給ふる」といひ出だし給ふ。對面し給へるにも、^{中將}心苦しきさまにて物し給ふと聞き侍りし人の御上なむ、残ゆかしく侍る。何事も

答へ給ふべくも……浮舟が返事する管もないので。待乳の山のと……浮舟が貴方に御返事もしないのは外に思ふ人があるらしく思はれますとの意。新古今、^{中將}「誰をかもまつちの山の女郎花秋と契れる人ぞあるらし」。人の御上なむ……浮舟の事でまだ聞き洩しの處を聞きたいものです。



山住―出家遁世。許い給ふまじき……許してくれさうもない親達などに妨げられて。世に心地よげなる……何の苦勞もなく得意でゐる女などを思ふ事は、私自身がこんな引込思案のせむか不似合です、物案じに暮して居られる浮舟に私の胸を打明けたいものです。

心地よげならぬ……失意の女がほし、いと御注文には成程浮舟はお相手にして不似合でないと思はれますが、普通の女のやうに男は持つまい尼にでもならうといふ程世を恨んでゐるので、到底駄目です。残すくなき……然し私のやうな餘命少い老人ですら愈出家する時は心細く感じましたのに、浮舟のやうに生先長い今の妙齡では、遂にいかかと……末は遂げられるかどうかと。

入りても―浮舟の部屋へ入つても。なさけなし……餘りそつけない事です、矢張一寸でも御返事なさい。すゞるなる事も一寸した事にも。物聞ゆらむ方も―物のいひ方も。いづら―御返事は如何ですか。

秋を契れるは……「待乳の山の」といつた尼の引歌の下句の「秋と契れる」を相手が自分に契つたもの

心になはぬ心地のみし侍れば、山住もし侍らまほしき心ありながら、許い給ふまじき人々に思ひ障りてなむ過しはべるに、世に心地よげなる人の上は、かく屈したる人の心がらにや、ふきはしからずなむ。物思ひ給ふらむ人に、思ふ事を聞えばや」など、心とゞめたる様に語らひ給ふ。「心地よげならぬ御願には、聞えかはし給はむに、つきなからぬ様になむ見え侍れど、例の人にてはあらじと、いと、うた、あるまで世を恨み給ふめれば、残すくなき齡の人だに、今はと背き侍る時は、いと物心ばそく覺え侍りしものを、世を籠めたる盛にては、遂にいかがとなむ見給へ煩ひ侍る」と、親がりていふ。入りても、「なさけなし。なほ聊かにも聞え給へ。かゝる御住居は、すゞるなる事もあはれ知るこそ、世の常の事なれ」など拵へてもいへど、人に物聞ゆらむ方も知らず、何事もいふかひなくのみこそ」と、いとつれなくて臥し給へり。客人は、「いづら、あな心う。秋を契れるは、すかし給ふにこそありけれ」など怨みつゝ、

と取成していふ。秋逢はうと約束したのは、さては一時私をなだめ賺したのですなどの意。

まつ蟲の……松蟲の聲を尋ねて来たが、そのかひなくて徒に又萩原の露に困却した、裏面の意は尼君が待つて居られるといふに引かされ、て来たけれど、我が思ふ浮舟はつれなくして私は途方にくれてゐるとの意。萩原の露は典據があらうと思ふが未勘。

これをだに―せめてこの返歌でも。さやうに……そんなに色めかしい事を返事しようのも誠に嫌だし、又返事を一度し初めたら。

尼君早うは……妹尼は若い時は花やかな氣象の人だつたその名残であらう、浮舟に代つて返歌した。

秋の野の……秋の野を分けて來られて何處か餘所の露に貴方の狩衣は濡れたのです、それを私の宿の露にかこつけるのは御無理です。

煩はしがり……浮舟が迷惑がつてかう詠みました。浮舟の歌のやうに妹尼が装うていふ。

内にも……篋の内の人々も、浮舟が不本意にもまだ生きてゐる事を人に知られ出すのを苦しがつて居られるその心中を察せず。

男君―中將。

「あない」とほし。これをだに」と責むれば、さやうに世づいたらむ事いひ出でむもいと心憂く、又いひそめては、かやうの折々に責められむもむつかしう覺ゆれば、答をだにし給はねば、餘りいふかひなく思ひあへり。尼君、早うは今めきたる人にぞありける名残なべし。

「秋の野の露わけきたるかりころも
葎しげれる宿にかこつな

となむ、煩はしがり聞え給ふめる」といふを、内にも、猶かく心より外に世にありと知られはじむるを、いと苦しと思す心の内をば知らで、男君をも飽かず思ひ出でつゝ、戀ひわたる人々なれば、「かくはかなき序にも、うち語らひ聞え給はむに、心より外に世に後めたくは見え給はぬものを、世の常なる筋に思しかけずとも、情なからぬ程に、御答ばかりは聞え給へかし」など、ひき動かすべくいふ。流石にかゝ

うち語らひ聞え……貴女が中將のお相手になられても、中將は決して案外な都合な結果を生ずるやうな御様子には見えませんものを。世の常なる……假令色戀の沙汰でないにしても。

古代の心……昔氣質には似合はず。いと後めたう覺ゆ。中將を引入ればせぬかと浮舟が甚だ不安に感ずる。ひたぶるに……自分はこの世にゐないものと一途に。

鹿の鳴く音に……古今、山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつゝ。

心地なくは、殺風景では。過ぎにし方の……亡き妻の事が思出されるにつけても此處に來たのが却て傷心の種で。

今初めて……今新に浮舟が同情して下さるといふ事も望み難いゆゑ。見えぬ山路……嘗ては此處に棲んでも世の憂目見えぬ山家とは思へなくなりました。古今、世の憂目見えぬ山路に入らむには思ふ人こそ絆なりけれ。

などあたら夜を……惜しいこの良夜を何故賞翫しかけてお歸ですか。後撰、あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや。

る古代の心どもにはありつかず、今めきつゝ、腰折歌このましげに若やぐ氣色どもは、いと後めたう覺ゆ。限なく憂き身なりけりと見果ててし命さへ、あさましう長くて、いかなる様にさすらふべきならむ。ひたぶるに亡きものと、人に見聞き捨てられても止みなばや、と思ひ臥し給へるに、中將は、おほかたに物思はしき事のある頃にや、いといたくうち歎きつゝ、忍びやかに笛を吹き鳴らして、「鹿の鳴く音に」など獨ごつけはひ、實に心地なくはあるまじ。過ぎにし方の思ひ出でらるゝにも、なか／＼心づくしに、今初めてあはれと思すべき人はた難げなれば、見えぬ山路にも、え思ひなすまじくなむ」と、怨めしげにて出で給ひなむとするに、尼君「など、あたら夜を御覽じさしつる」とて、ゐざり出で給へり。「なにか、をちなる里も試みはべりぬれば」などいひすさみて、いたう好きがましからむも流石に便なし、いとほのかに見えし様の目とまりしばかりに、徒然なる心慰めにと思ひ出でつるを、餘りもて離れ奥深げなるけはひも、所のさまに合はずさまじと思

をちなる里も……引歌未勘。この小野の山里も私の心を慰めてくれぬと分りましたので、との意か。いたう好きがましからむも……餘り色つぼくするのも行懸り上流石に面白くない。中將の心。徒然なる……妻を失つた寂しい氣慰めに浮舟をしようと思つたに、餘りに浮舟がよそ／＼しく。ふかき夜の……この深夜の月の美しさを解せぬ無風流者が、山の端近く月を見るによいこの庵に泊らぬのでせう、貴方も情趣がお分りならお泊りなされさうなものです。なま片はなる……何だかうまくもない歌を、かう申されますと浮舟の歌のやうにしていふので。山の端に……それは山の端に入るまで此處で月を眺ませう、板間洩る光に人戀ふる胸の痛もなほる。胸の痛に板間をかけた。大尼君「母の尼君。なか／＼昔の事……相手が中將と知つたら亡き孫娘の事など話さうなものだが却てそんな事はまるで話さぬ、誰とも見分けが付かぬのであらう。琴のこと……七絃の琴。くそたち……お前達の意。くそ」は呼

へば、歸りなむとするに、笛の音さへ飽かずいと覺えて、
「妹尼」「ふかき夜の月をあはれと見ぬ人や
 山の端ちかき宿にとまらぬ」
 と、なま片はなる事を、「かくなむ聞え給ふ」といふに、心ときめきして、
「中將」「山の端に入るまで月をながめ見む
 むねの板間もしるしありやと」
 などいふに、この大尼君、笛の音をほのかに聞きつけたれば、流石にめでで出で來たり。此處彼處うちしはぶき、淺ましきわなゝき聲にて、なか／＼昔の事などもかけていはず、誰とも思ひ分かぬなるべし。
「大尼」「いで、その琴のこと弾き給へ。横笛は月にはいとをかしきものぞかし。いづら、くそたち、琴取りて參れ」といふに、それなめりと推し量りに聞けど、いかなる人、かゝる處にいかで籠り居たらむ、定めなき世ぞ、これにつけてもあはれなる。盤渉調をいとをかしく吹き立てて、
「中將」「いづら、さらば」と宣ふ。女の尼君、これもよき程のすき者にて、

格で「こそ」の轉。それなると推量しつゝ聞いてゐるが、どんな老人がこんな處にどうしてかくまで長命でゐた事か、又反對に若い私の妻は死んでしまつて無常な世がそれにつけてもしみじみ思はれる。いづらさらばどれ、それでは琴をお弾きなさい。女の尼君一妹尼。昔聞き侍りし……以前承りましたよ。りも貴方のお笛がひどく面白く感じますのは、山松風ばかり聞馴れた耳のせいでせうか。これは僻ごとになりて……私の琴は調子はづれになつて居りませう。僻事は僻事の口合。今様は……當世は琴(ハ)は餘り一般の人の好まなくなつて来た物ゆゑもてはやす一琴の音を引立たせる。めでられて一母尼が感を催して。事もなく一旨。今の世は……當世は手法が變つたのでせうか、仲の僧都が、聞き苦しい、念佛以外の餘計な事はおよしなきいと叱られるので。いと怪しき事をも……實にけしからぬ事を止めて……僧都ですな。かゝる事をして……音楽を奏して。

「昔聞き侍りしよりもこよなく覺え侍るは、山風をのみ聞き馴れ侍りにける耳がらにや」とて、「いでや、これは僻ごとになりて侍らむ」といひながら弾く。今様は、をさく／＼なべての人の、今は好まずなり行くものなれば、なか／＼珍しくあはれに聞ゆ。松風もいとよくもてはやす。吹き合はせたる笛の音に、月も通ひて澄める心地すれば、いよいよめでられて、宵感ひもせず起き居たり。大尼は、昔は吾妻琴をこそは、事もなく弾き侍りしかど、今の世は變りにたるにやあらむ、この僧都の、「聞きにくし、念佛より外のあだ業なせそ」と、はしたなめられしかば、何かはとて弾き侍らぬなり。さるは、いとよく鳴る琴も侍り」といひ續けて、いと弾かまほしと思ひたれば、いと忍びやかにうち笑ひて、「いと怪しき事をも制し聞え給ひける僧都かな。極樂といふなる所には、菩薩なども皆かゝる事をして、天人なども舞ひ遊ぶこそ尊かなれ。行まぎれ、罪得べきことかは。今宵よく聞き侍らばや」とすかせば、いとよしと思ひて、「いで主殿のくそ、吾妻取りて」といふにも、し

行ひまぎれ……音楽をしたからとて佛道修行が疎略になり罪を作るといふ事があるものですか。主殿のくそ……雑事を賄ふ女中をいふ。「くそ」は呼格。吾妻取りて……和琴を取つて下さい。僧都をさへ……僧都のとめるまで恨めしく思つて中將に懇訴する位ゆゑ、人々は氣の毒で。只今の笛の音をも……中將が今吹いてゐる笛の調子にもお構なく。みな異物は……他の樂器は調子が揃はぬので皆やめてしまつたのを、母尼は皆が自分の和琴に感心してゐるのだと思つて。たりたんなちり／＼たりたんな一笛の唱歌を和琴に移したも。はやりかに一調子づいて。耳ほの／＼しく一耳が遠くて。かやうなる事ぞ……和琴をさす。姫君一浮舟をさす。埋もれて一引込んで。尼君などは一妹尼その他の人々は。これに事皆醒めて……この母尼の和琴ですつかり興が醒めて。聞えくる笛の音一歸りつゝ中將が吹鳴らす笛の音。小野の庵の人々は夜起き明したり一翌朝早く。つとめて一翌朝早く。

はぶきは絶えず。人々は見苦しと思へど、僧都をさへ怨めしげに愁へていひ聞かすれば、いとほしくて任せたり。取り寄せて、只今の笛の音をも尋ねず、只おのが心を遣りて、あづまの調を爪さわやかに調ぶ。みな異物は聲止めつるを、これにのみめでたりと思ひて、「たりたんなちり／＼たりたんな」と搔き返し、はやりかに弾きたる言葉ども、わりなく古めきたり。「いとをかしう、今の世に聞えぬ言葉こそは弾き給ひけれ」と譽むれば、耳ほの／＼しく、傍なる人に問ひ聞きて、「今様の若き人は、かやうなる事ぞ好まれざりける。こゝに月頃物し給ふなる姫君、容貌はけうらに物し給ふれども、はら、かゝるあだ業などし給はず、埋もれてなむ物し給ふめ」と、我賢にうちあざ笑ひて語るを、尼君などはかたはら痛しと思す。これに事皆醒めて、歸り給ふほどに、山おろし吹きて聞えくる笛の音、いとをかしう聞えて、起き明したり。つとめて、「夜べは、かた／＼心亂れ侍りしかば、急ぎまかゝで侍りし。

かた／＼亡き妻の事や新しい浮舟の事。忘れぬ……忘れかねる亡き妻の事について、浮舟の無情な點に、ついても聲にまで出して泣かずには、それまでもしたとの意。笛竹はその折玩んだものを以て浮舟に擬した。節は笛の操語。
 なほ少し……猶多少は私の切なる心を汲むやう浮舟に教へて下さい、辛抱出来る程なら、これ程好色がましきまで何の申しませうぞ。いとゞ侘びたるは、中將よりも猶更屈託してゐる妹尼は、
 笛の音に……貴方の笛の音に亡き娘の事なども思出されて、お歸りの後も泣いて居りました。昔の事に古風な琴と懸けた。
 怪しう物思ひ知らぬ……不思議な程人情を解しないのか知らとまで疑はれる浮舟の有様は、
 珍しからぬも、珍しくもない妹尼の返事であるのも、
 萩の葉に……萩の葉がそよとの風にも音を立てる、それにも劣らず何彼につけて中將が文をよこすのが、誠にうるさい事よ。浮舟の心を見知りし……嘗て匂宮の熱心を見折々の事も……矢張こんな色戀

忘れぬむかしのことも笛竹の
 つらき節にもねぞ泣かれける
 なほ少し思し知るばかり教へなさせ給へ。忍ばれぬべくは、すき／＼しきまでも何かは」とあるを、いとゞ侘びたるは、涙とゞめ難げなる氣色にて書き給ふ。

「妹尼」
 笛の音に昔のことも忍ばれて

かへりし程も袖ぞ濡れにし

怪しう物思ひ知らぬにや、とまで見え侍る有様は、老人の間はず語りにも聞し召しけむかし」とあり。珍しからぬも見所なき心地して、うち置かれけむかし。萩の葉に劣らぬ程々に音づれわたる。いとむつかしうもあるかな、人の心はあながちなるものなりけり、と見知りし折々も、やう／＼思ひ出づるまゝに、猶かゝる筋の事、人にも思ひ放たすべき様に、疾くなし給ひてよ」とて、練習ひて讀み給ふ。心のうちにも念じ給へり。かくよろづにつけて、世の中を思ひ捨つれば、若き

の情を人にも断念させるやうな尼姿に早くして下さいまし。
 念じ給へり……佛を祈念なされた。若き人として……浮舟は若い女といったても花やかな點も取立て、無く元來憂鬱な性質なのだ、妹尼は思つてゐる。
 よろづの咎……すべての缺點。
 この尼君……妹尼。
 戀しき人の上も……亡き娘の事も忘れられなかつたのを、かうして娘と別人とも思はれぬ浮舟を慰めとして見出したので。
 返り申しだちて……御禮参りの格で。いざ給へ……さあいらつしやい、人の氣付く管がありませうかい。さやうの所に……初瀬のやうに靈驗あらたかな所に。
 かやうにいひ知らせつ……これと同じやうな事をいひ聞かせて。
 かひなきにこそ……今こんな悲しい運命に落ちてゐる所を見れば觀音様の加護も無かつたのであらう。命さへ心になはさず……死ぬる事さへ思ふやうに出來ず。
 見るは……上の「かひなきにこそ」に返る文法。
 知らぬ人に……元から深く知りもせぬ尼君と連れ立つてそんな遠い所に出かける事よと。

人とてをかしやかなる事も殊になく、結ばほれたる本性な……めりと思ふ。容貌の見るかひあり美しきに、よろづの咎見ゆるして、あけくれの見物にしたり。少しうち笑ひ給ふ折は、めづらしくめでたきものに思へり。
 九月になりて、この尼君長谷に詣づ。年頃いと心細き身に、戀しき人の上も思ひやまれざりしを、かくあらぬ人とも覺え給はぬ慰めを得たれば、觀音の御しるし嬉しとて、返り申しだちて詣で給ふなりけり。
 「いざ給へ。人や知らむとする。おなじ佛なれど、さやうの所に行ひたるなむ、しるしありて、よきためし多かる」といひてそゝのかし立つれど、昔母君乳母などの、かやうにいひ知らせつ、度々詣でさせしを、かひなきにこそあめれ、命さへ心になはさず、類なきいみじき目を見るはと、いと心憂きうちにも、知らぬ人に具して、さる道のありきをしたらむよと、空恐ろしく覺ゆ。心ごはき様にはいひもなさで、
 「存舟」
 心地のいと悪しうのみ侍れば、さやうならむ道の程にもいかゞと、い

心ごはき……然し浮舟は強情を張るやうな風にはいはない。生きてゐる情けないこの立場では、二本杉で名ある初瀬に詣でようとも思はぬとの意。經るに古川をかけた。初瀬川古川のへに二本ある杉年を経て又も逢ひ見む二本ある杉による。

二本は……二本杉と詠まれたのは又再び逢ひたいといふ人が貴女はあるのでせう。旋頭歌によつていふ。ふる川の……古川のへと詠まれた杉の本立即ち貴女のもの氏種姓は知りませんが、私は亡くなつた娘と思つて親んでゐるのです。

忍びてといへど……妹尼は少數で密に行き管の仕へる人々が皆行きたがつて、その結果庵室には小人数で浮舟が残るのを尼は氣の毒に思ひ。

左衛門侍女の名。淺ましき事を……浮舟は我が身の上の悲しい事を思ひながら、今はもう仕方がないと諦めて力に頼んでゐるこの妹尼君が留守になされたのでは。いと人も見えず！妹尼の不在では尙更訪ひ来る人もなく。

とつ、ましようなむ」と宣ふ。物おぢは、さもし給ひつべき人ぞかしと思ひて、強ひてもいざなはず。

「はかなくて世にふる川のうき瀬には尋ねもゆかじふたもとの杉」と、手習にまじりたるを、尼君見つけて、二本は、又も逢ひ聞えむと思ひ給ふ人あるべし」と、戲言をいひ當てたるに、胸つぶれて、面赤め給へるも、いと愛敬づき美しげなり。

「ふる川の杉のもとだち知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る」

殊なることなき答を口疾くいふ。忍びてといへど、皆人慕ひつゝ、此處には人少なにておはせむを、心苦しがりて、心ばせある少將の尼、左衛門とてある大人しき人、童ばかりをぞとぐめたりける。

皆出で立ちぬるを詠め出でて、淺ましき事を思ひながらも、今はいかはせむと、頼もし人に思ふ人一人ものし給はぬは、心細くもあるか

いと怪しうこそは……恭も頗る危い手つきでした。

我はと思ひて……少將の尼が自分上手だと思つて浮舟に先手をお打たせ申した處が、浮舟は非常にうまいので。

この御恭——浮舟の恭。かの御恭——妹尼の恭。けしうはあらず……まづくはないと自ら思つて居られましたが。いと恭聖大徳になりて、頗る恭聖大徳を氣取つての意。今なら本因坊を氣取つてともいふ處。宇多醍醐の頃肥前の人橋良利出家して寛蓮といつたが、恭の名人であつたので恭聖大徳と呼ばれた。

さし出でてこそ……私は何の某と天下に名を知られた恭打でこそないが、貴女の恭には負けますまい。恭聖が恭には……恭聖大徳を氣取る兄君僧都にすら勝たれるゆゑ、妹尼君の恭は恭聖大徳以上で御座いませう。

さだ過ぎたる……年ふけて額つきも醜くなつた少將の尼が不似合な遊藝好みをするの。むつかしき事も……由ない恭なんか打つてこれは面倒な事を遣り出したわいと、浮舟は後悔して。こゝろには……心から秋の夕暮の悲

など、いと徒然なるに、中將の御文あり、御覽せよ」といへど、聞きも入れ給はず。いと人も見えず、つれづれと、來し方行く先を思ひ屈し給ふ。苦しきまでも詠めさせ給ふかな。御恭打たせ給へ」といふ。

いと怪しうこそはありしか」とは宣へど、打たむと思したれば、盤とりにやりて、我はと思ひて先せさせ奉りたるに、いとこよなければ、又手直して打つ。尼上疾う歸らせ給はなむ。この御恭見せ奉らむ。かの御恭ぞいと強かりし。僧都の君、早うよりいみじう好ませ給ひて、けしうはあらずと思したりしを、いと恭聖大徳になりて、さし出でてこそ打たざらめ、御恭には負けじかし」と聞え給ひしに、遂に僧都なむ二つ負けさせ給ひし。恭聖が恭には勝らせ給ふべきなめり。あな

いみじ」と興すれば、さだ過ぎたる尼額の見つかぬに、物好みするに、むつかしき事も仕初めてけるかなと思ひて、心地悪しとて臥し給ひぬ。時々は晴れくしうもてなしておはしませ。あたら御身を、いみじく沈みてもてなさせ給ふこそ口惜しく、玉に瑕あらむ心地し侍れ

哀といふ事を解してゐる譯ではな
いが、つく／＼と詠めて居れば何
とも知れぬ涙が袖に零れる事だ。
あなうたて……まあいやな、これは
一體どうしたものだらうと、浮舟
は思はれたので。

さも餘りにも……それ程になさるの
も餘りなお仕打で御座いますよ、
中將が慇々來られたお心持もこん
な折柄は一層感ぜられる筈で御座
います。その仰しやる事を少し
でも聞いてお上げなさいまし。
しみ著かむ事……中將の言葉を聞い
たら身體に沁み着きでもするかの
やうに思召すのが、餘りひどう御
座います。

おはせぬよしをいへど……浮舟も初
瀬詣に行つて不在ですと斷つたけ
れど、晝來た使が浮舟一人は残つ
て居られるなど聞いて知つてゐた
と見える。

御聲も……お聲を聞かせて下さいと
も申しますまい、只も少し近くで
私の申上げる事をお聞になつた上
で、否とでも何とでも極めて下さ
いますし。
餘りかゝるは……こんなに無情な御態
度は餘りひど過ぎます。
あはめつゝ……非難しつゝ。
山里の……この山里の深夜の情趣も

といふ。夕暮の風の音もあはれなるに、思ひ出づる事ども多くて、

「こゝろには秋の夕べを分かねども」

ながむる袖に露ぞみたるゝ」

月さし出でてをかしき程に、晝文ありつる中將おはしたり。あなうた
て、こはなぞと覺え給へば、奥深く入り給ふを、さも餘りにもおはし
ますものかな。御志の程もあはれまさる折にこそ侍るめれ。ほのかに
も、聞え給はむことも聞かせ給へ。しみ著かむ事のやうに思したるこ
そ……などいふに、いと後めたく覺ゆ。おはせぬよしをいへど、晝の使の、
一所など問ひ開きたるべし、いと多く恨みて、御聲も聞き侍らじ。
たゞ氣近くて聞えむことを、聞きにくしとも思しことわれ」と、よろ
づにいひ詫びて、いと心憂く、所につけてこそ物のあはれも勝れ。餘
りかゝるは「などあはめつゝ、」

「山里の秋の夜ふかきあはれをも」

物おもふ人は思ひこそ知れ」

自ら御心も通ひぬべきをなどあれば、尼君おはせで、紛らはし聞ゆべ
き人も侍らず。いと世づかぬやうならむとせむれば、

「うきものと思ひも知らで過す身を」

物おもふ人と人は知りけり」

身に物思のある人なら一層深く解
する筈です。
自ら御心も……物思ある身同士で自
然お心持も私に合ひさうなものを。
紛らはし聞ゆべき取成し申すべき
いと世づかぬ……餘り愛想がない。
うきもの……別に物憂い身とも思
はずに過してゐる私を、さも深い
物思でもある人のやうに貴方がお
察しなは不思議です。
わざといふとも……特に返歌といふ
程でもなくいつたのを、少將の尼
が聞いて中將に傳へると。
猶たゞいさゝか……もう少し近くへ
出て來られるやうに浮舟に勧めて
下さいと。
この人々を……中將が少將の尼等を。
例は假初にも……平素は浮舟が一寸
も覗いても見ぬ母尼のお部屋へ逃
込んでしまはれた。
かゝる所に……こんな處に物案じに
肩託して居られる浮舟の心中がお
可愛さうで、大體の様子から察し
ても物の分つたやうな人でありな
がら、實に譯の分らぬ者よりも以
上に私に冷淡になさるのは何か仔
細がありませう。
それもまた物懲し……それとも亦男
に手をお焼きなされたか。
知り聞え給ふべき人の……浮舟は前か

「猶たゞいさゝか出で給へと聞え動かせ」と、この人々をわりなきまで
恨み給ふ。「怪しきまでつれなくぞ見え給ふや」とて、入りて見れば、例
は、假初にもさし覗き給はぬ老人の御方に入り給ひにけり。淺ましう
思ひて、かくなむと聞ゆれば、「かゝる所に詠め給ふらむ心のうちのあ
はれに、大方の有様なども情なかるまじき人の、いと餘り、思ひ知らぬ
人よりもけにもてなし給ふめるこそ。それもまた物懲りし給へるか。
猶いかなる様に世を恨みて、いつまでおはすべき人ぞ」など、有様問
ひて、いとゆかしげにのみ思いたれど、細かなる事は、いかでかはいひ
聞かせむ。只「知り聞え給ふべき人の、年頃は疎々しきやうにて過し給

ら妹尼君がお世話すべき筋の人で。姫君は「浮舟は。宵惑ひは。宵惑ひは。宵惑ひをしてゐる母尼は。うちすがひたる。同じ程な年輩の。一つ橋……身を投げに行く者が道にあつた一本橋を危がつて引返して来たといふやうな筋の話が行はてゐたものと思はれる、それで浮舟が我が身の上に似てゐると思つてかう感じたのであらう。こもき供に……童女もこもきを連れてこの部屋に逃げて来られたが、こもきは色めいてゐて。この珍しき男中將をさす。今や来る……浮舟はこもきが今は来るか」と待つて居られるが。はかなき頼もし人……こもきをさす。埋もれて引込思案で。尼君嘆息に……母尼君は嘆に取詰められて。おぼほれは溺れの意。かづきて「かづつて。この君の浮舟の。颯とか……颯とかいふ動物がそんな事をするが、丁度そんな風に頼に手を翳して。颯のまかげの事。東屋の巻一九二頁頭註参照。執念げなる聲。薄氣味わるい聲。鬼の取りもて来けむ……宇治川に身を投げようとした途中鬼が攫つて行つた時は恐怖に意識を失つてゐ

ひしを、長谷に詣であひ給ひて、尋ね聞え給へる」とぞいふ。姫君は、いとむつかしきことのみ見聞く老人のあたりに、うつぶし臥して、いも寝られず。宵惑ひは、えもいはずおどろしき魘しつゝ、前にも、うちすがひたる尼ども二人臥して、おとらじと駢合はせたり。いと怖ろしう、今宵この人々にや食はれなむと思ふも、惜しからぬ身なれど、例の心弱さは、一つ橋危がりて歸り来たりけむもの、やうに、侘しく覺ゆ。こもき、供に率ておはしつれど、色めきて、この珍しき男の艶だち居給へる方に歸りにけり。今や来る今や来ると待ち給へれど、いとほかなき頼もし人なりや、中將いひ煩ひて歸りにければ、いと情なく埋もれてもおはしますかな。あたら御容貌を」など謗りて、皆一とところに寝ぬ。夜中ばかりにやなりぬらむと思ふ程に、尼君咳嗽におぼほれて起きにたり。火影に、頭付はいと白きに、黒き物をかづきて、この君の臥し給へるを怪しがりて、颯とかいふなるものがさる業する、額に手を當て、「あやし。これは誰ぞ」と、執念げなる

た故。いか様にせむと……浮舟は今はどうしようといふ困惑につけても、奇蹟的に蘇生して常態の人になり、再び昔の心外な事を思ひ亂れたり又新に嫌らしいとも恐しいとも様様氣を揉む事よ、然し死んでゐたらこの老尼より恐しい地獄の鬼どもの中にあつた事か知らん。親と聞えけむ人父君八宮。遙なる東路に……遠い陸奥や常陸に年月を過して。はらからの御あたり中君の許。思はずにて……不慮の事(句宮との一條)から音信不通となり。さる方に……愛人として私をお極めなされた薫に信頼して。きはめに……間際に……仕損じた自分の身を考へて見ると。宮を少しも……句宮を少しも懐かしいとお思ひ申した心持が不都合だ、全く句宮ゆゑにこんなに漂泊するのだと思へば。小鳥の色を……句宮が曾て、年經とも變らむものか橋の小鳥の啼に契る心は」と詠まれたのを(浮舟の巻一九八四頁参照)。こよなく飽きたる……句宮がひどく嫌になつたやうな感がする。

聲にて見おこせたる、更に只今食ひてむとすとぞ覺ゆる。鬼の取りもて来けむ程は、物覚えざりければ、なか／＼心安し、いか様にせむと覺ゆるむつかしきにも、いみじき様にて生き返り人になりて、又ありしいろ／＼の憂き事を思ひ亂れ、むつかしとも恐ろしとも物を思ふよ、死なましかば、これよりも恐ろしげなるもの、中にこそはあらましかと思ひ遣らる。昔よりの事を、まどろまれぬまゝに、常よりも思ひ續くるに、いと心憂く、親と聞えけむ人の御かたちも見奉らず、遙なる東路に、返る／＼年月をゆきて、たまさかに尋ね寄りて、嬉し頼もしと思ひ聞えしはらからの御あたりも、思はずにて絶え過ぎ、さる方に思ひ定め給へりし人につけて、やう／＼身の憂きをも慰めつべききはめに、淺ましうもてそこなひたる身を思ひもて行けば、宮を少しもあはれと思ひ聞えけむ心ぞ、いと怪しからぬ、只この人の御ゆかりさすらへぬるぞと思へば、小鳥の色をためしに契り給ひしを、などをかしと思ひ聞えけむと、こよなく飽きたる心地す。初より薄きなが

薄きながらも……熱烈でないながら
も氣長な調子に愛して下された薫
は、あの時はどうであつたらうこ
の時はかうだと、今浮舟が思出さ
れるのは限もなく戀しい。
かくてこそありけれ……かうして生
きてゐたと薫に聞きつけられる時
の恥かしさは、他の人に聞かれる
よりも一層恥かしからう。
この世には……この世では昔の薫の
お姿を。
翫わろの心や、矢張未練な我が心よ。
返さふと思ひ返し……する。
母の御聲を……夜明の雞鳴から母の
聲を思つたのは、玉葉、行基、山鳥
のほろ……と鳴く聲聞けば父かと
ぞ思ふ母かとぞ思ふ……からの聯想
供にて渡るべき……供をして部屋に
歸るべきもきも来ないので。
斯の人……母尼と共に寝てゐた老尼。
もてはやして……拵へて持つて来て。
賄も……給仕の人も氣に入らず。
事なしび給ふを……浮舟が何氣ない
風に辭退なさるのを強ひて侷める
のも無骨である。
下りさせ給ふべし……横川からお下り
になる筈です。
など俄には……何でそんなに急に御下
山なさるのですか。
一品の宮……女一宮。

らも、のどやかなる様に物し給ひし人は、この折かの折など思ひ出づ
るにぞ、こよなかりける。かくてこそありけれと聞き付けられ奉らむ
恥かしさは、人より勝りぬべし。流石にこの世には、ありし御様を、餘所
ながらだにいつかは見むとする、とうち思ふ。猶わろの心や、かくだ
に思はじなど、心一つを返さふ。辛うじて雞の鳴くを聞きて、いと嬉
し。母の御聲を聞きたらむは、ましていかならむと思ひ明して、心地
もいと悪し。供にて渡るべき人も、とみに来ねば、なほ臥し給へるに、
斯の人はいと疾く起きて、粥など、むつかしき事どもをもてはやし
て、「御前に疾く聞し召せ」など寄り来ていへど、賄もいと心づきなく、
うたて見知らぬ心地して、「惱ましく」など、事なしび給ふを、強ひて
いふもいと骨なし。
下衆下衆しき法師ばらなど、あまた来て、「僧都今日下りさせ給ふべ
し。」など俄には「と問ふなれば、一品の宮の御物の氣に惱ませ給ひ
ける、山の座主御修法つかうまつらせ給へど、なほ僧都參らせ給はで

山の座主……比叡山の天台座主。
左大臣殿の四位の少將……夕霧の息。
上りおはしまして……御使者として横
川へ上つて入らしつて。
後の宮……明石中宮。
花やかに……威勢よく。
恥かしくとも逢ひて……浮舟は假令恥
かしくとも僧都に面會して。
さかしら人少なくて……おせつかひを
してとめ立てする人が少くて。妹
尼は初瀬詣中ゆゑ。
忌むこと……受戒を致したいと存じ
ますから。
語らひ給へば……母尼君に御相談なさ
ると。
例の方に……浮舟が自分の部屋に。
尼君のみ……妹尼ばかり。
手づからは……といつて浮舟自身
では出来ない事なので。
親に今ひと度……母君に今一度、尼
にならぬ前この儘の姿をお見せす
ることも途に出来ぬのが、自業自
得とはいへ浮舟は悲しい。
いと悲しけれ……の下、脱字が必ず
あると思はれる。
筋なども……一本一本の毛筋も。
かゝれとて……後撰……たらちねは
かゝれとて……玉のわが黒髪
を撫でずやありけむ。素性法師が
剃髮する時、父通昭の詠んだ歌。

は驗なしとて、きのふ二たびなむ、召侍りし。左大臣殿の四位の少將、
夜べ夜更けてなむ上りおはしまして、後の宮の御文など侍りければ、
下りさせ給ふなりなど、いと花やかにいひなす。恥かしくとも逢ひて、
尼になし給ひてよといはむ。さかしら人少なくて、よき折にこそと思
へば、起きて、心地のいと悪しうのみ侍るを、僧都の下りさせ給へら
むに、忌むこと受け侍らむとなむ思ひ侍るを、さやうに聞え給へこと
語らひ給へば、ほけく、しううち領く。例の方におはして、髪は尼君
のみ梳り給ふを、他人に手觸れさせむもうたて覺ゆるに、手づからは
た、えせぬ事なれば、只少し解きくだして鏡など見給ふ。親に今ひと
度かうながらの様を見えすなりなむこそ、人遣りならすいと悲しけ
れ。いたう煩ひしげにや、髪も少し落ち細りにたる心地すれど、何ば
かりも衰へすいと多くて、六尺ばかりなる末などぞ、いと美しかりけ
る。筋なども、いと細かに美しげなり。「かゝれとてしも」と、獨ごち居
給へり。暮方に僧都物し給へり。南面拂ひしつらひて、まろなる頭付

僧都物し給へり。僧都が小野の庵に御到着なされた。まるなる頭付ども、圓頂の尼法師たち。東の御方、妹尼をいふ。このおはせし人、浮舟をさす。此處にとまりてなむ。この庵室に滞在して居ります。忌むこと受け、尼になつて貴方から戒を受けたいといはれます。此方に、僧都が浮舟の部屋の方に不意に、宇治で思ひも寄らぬにお目にかゝつたのも。世を捨てゝゐる妹尼の側に。世の中に侍らじ。この世に生きてゐたくないと思ひ致しました私が、不思議な事で今日まで生きてゐるのを辛いと存じますもの。よろづに物せさせ、色々とお世話下されました妹尼君の御親切を、東な心にも感じて居りますが、矢張世馴れず結局生きて居られさうもありませんから。例の人にて、世間並の女として夫など持つて暮すことも出来ぬ事情の身で御座います。いかでかひた道に、何の、一途にさう出家の決心などなさるべきものですかい。

ども行きちがひ騒ぎたるも、例に變りていと恐ろしき心地す。母の御方に參り給ひて、いかにぞ月頃は、など宣ふ。東の御方は物詣し給ひにきとか。このおはせし人は、なほ物し給ふや、など問ひ給ふ。しか、此處にとまりてなむ。心地悪しとこそ物し給ひて、忌むこと受け奉らむと宣ひつる」と語る、立ちて此方にいまして、「此處にやおはします」とて、几帳のもとについ居給へば、つゝましかれどゐざり寄りて、答し給ふ。不意にて見奉り初めてしも、さるべき昔の契ありけるにこそと思ひ給へて、御祈など懇に仕うまつりしを、法師は、その事となく、御文聞え承はらむも便なければ、自然になむ疎なるやうになり侍りぬる。いとあやしき様に、世を背き給へる人の御あたりには、いかでおはしますらむ」と宣ふ。世の中に侍らじと思ひ立ち侍りし身の、いと怪しくて今まで侍るを、心憂しと思ひ侍るものから、よろづに物せさせ給ひける御心ばへをなむ、いふかひなき心地にも思ふ給へ知らるゝを、なほ世づかすのみ、遂にえとまるまじく覺え侍るを、尼にな

心をおこし給ふほど、決心なされた當座は道心強くおありですが。いとたいしき、誠にしつかりせぬものですか。妻といふ人並の生活でなく、出家でもしてせめて來世でも助かりたいと。猶いかで、矢張どうかして出家したう御座います。怪しくかゝる容貌、どうも不思議な、これ程の器量で、僧都の心物の氣もさこそ、上に「この人は心と世を恨み給うて」と寄呪のいつたことをさす。さるやうこそは、出家すべき因縁があるのだらう、一體なら今までも生きてゐる人かい、一旦悪いものに見込まれた人だのに、俗體で置くのは危険な事だと、僧都は思召して。思し立ちて宣ふを、出家を思立つてかく熱心に仰しやるものを、これは佛様のえらい事としてお褒めになる事だ。三寶は佛法僧の三をいふが、こゝは單に佛の意。法師にて、法師の身としてそれをとめだてする理由は無い。御忌む事は、御授戒は、まかんでたれば、山を下りて來たの

させ給ひてよ。世の中に侍るとも、例の人にて永らふべくも侍らぬ身になむ」と聞え給ふ。まだいと行く先遠げなる御程に、いかでか、ひた道にしかは思し立たむ。却りて罪ある事なり。思ひ立ちて心をおこし給ふほどは強く思せど、年月経れば、女の御身といふものは、いとたいだいしきものになむ」と宣へば、幼く侍りし程より、物をのみ思ふべき有様にて、親なども、尼になしてや見ましなどなむ思ひ宣ひし。まして少し物思ひ知り侍りて後は、例の人様ならで、後の世をだにと思ふ心深く侍りしを、亡くなるべき程のやうく、近くなり侍るにや、心地のいと弱くのみなり侍るを、猶いかで」とて、うち泣きつゝ宣ふ。怪しくかゝる容貌有様を、などて身を厭はしく思ひ始め給ひけむ、物の氣もさこそいふなりしか、と思ひ合はするに、さるやうこそはあらめ、今までも生きてるべき人かは、悪しき物の見つけ初めたるに、いと恐ろしく危きことなりと思ひ、とまれかくまれ、思し立ちて宣ふを、三寶のいとかしこく譽め給ふ事なり。法師にて聞え返すべき事に

手

習

かの宮一宮の御殿。七日果て、一週間の御祈禱が済んで退出して来た際に、仕うまつらむその時御出家をさせて上げませう。かの尼君おはしなば、妹尼君が歸つて来られたら、亂れ心地の病氣の苦し紛れにふらふらと決行した形にしようと思ひ舟は思つて、忌む事かひなくや侍らむ折角の受戒も無教になりませう。昔は事とも、若い時は何とも思ひませんでしたが、うち休みて、一休みして参内と思ひましたが、その休みの間に、しか思し急ぐ事、それ程剃髪をお急ぎなさること故、それでは今日して上げませう。はじめ見つけ奉りし、最初浮舟を宇治の院で発見した二人の弟子僧もお供して居つたので、げにいみじかりし人の、ほんにあれ程異常な有様で居られたこの人の事ゆゑ、俗體の儘でお暮しになるのもよくない事であらうと。この阿闍梨弟子の僧、几帳の帷子の、弟子の僧は女人の身體に接近するを憚り、几帳越しに髪を切つてやる様、當時の風俗

あらず。御忌む事はいと易く授け奉るべきを、急なる事にてまかしてたれば、今宵はかの宮に参るべく侍り。明日よりや御修法始まるべく侍らむ。七日果て、まかしてむに、仕うまつらむ」と宣へば、かの尼君おはしなば必ずいひ妨げてむと、いと口惜しくて、亂れ心地の悪しかりし程にしたるやうにて、「いと苦しう侍れば、重くならば忌む事かひなくや侍らむ。なほ今日は嬉しき折とこそ思ひ侍れ」とて、いみじく泣き給へば、聖心にいとほしく思ひて、「夜や更け侍りぬらむ。山より下り侍ること、昔は事とも思ひ給へられざりしを、年の老ゆるまには堪へ難く侍りければ、うち休みて内裏には参らむと思ひ侍るを、しか思し急ぐ事なれば、今日仕うまつりてむ」と宣ふに、いと嬉しくなりぬ。缺とりて、櫛の箱の蓋さし出でたれば、「いづら、大徳達こゝに」と呼ぶ。はじめ見つけ奉りし二人ながら供にありければ、呼び入れて、「御髪おろし奉れ」といふ。げにいみじかりし人の御有様なれば、うつし人にては、世におはせむもうたてこそあらめと、この阿闍梨も

が見られる。暫しは鉄を、切るに忍びず暫く鉄を持つた儘躊躇してゐた。兄人の阿闍梨、自分の兄の僧で同じくこの僧都の弟子になつてゐる人。下に居たり、自分の部屋にゐた。この私の、僧都のお供の中の自分の知人に應對するといつて。かゝる所につけては、かういふ所では、皆銘々知合の人々が珍しく出かけて来たのに何か一寸した髪應でもしようとして、その方に髪を取られてゐる際で。かゝる事なむと、浮舟様が尼におなりなると。わが御上の、僧都が御自分の。殊更ばかりとて、形式だけに浮舟にお著せ申して。何方とも知らぬ程なむ、どちらが母君のいらつしやる方か分らぬ場合で。などかく奥なき、何でこんな無分別な事をなさいますか、妹尼君がお歸りなされましたら、かばかりに仕初め、これ程にしかけた事を邪魔立てするのよくな、い事と思つて、僧都が少將の尼をお制しなされるので。流轉三界中、授戒の時授ける偈。全文は、流轉三界中、恩愛不能斷、

道理に思ふに、几帳の帷子の綻びより御髪を掻き出だし給へるが、いとあたらしくをかしげなるになむ、暫しは鉄をもてやすらひける。かかる程に少將の尼は、兄人の阿闍梨の來たるに逢ひて、下に居たり。左衛門はこの私の知りたる人にあへしらふとて、かゝる所につけては、皆とりくに心寄せの人々、珍しくて出で來たるに、はかなき事しける見入れなどしけるほど、こもき一人して、かゝる事なむと、少將の尼に告げたりければ、惑ひ來て見るに、わが御上の衣袈裟などを、殊更ばかりとて著せ奉りて、「親の御方を拜み奉り給へ」といふに、何方とも知らぬ程なむ、え忍びあへ給はで泣き給ひにける。あな淺ましや。などかく奥なき事はせさせ給ふ。上歸りおはしましては、いかなることをか宣はせむといへど、かばかりに仕初めつるを、いひ亂るも物しと思ひて、僧都いさめ給へば、寄りてもえ妨げず。流轉三界中など宣ふにも、斷ち果てしものをと思ひ出づるも流石なりけり。御髪も削ぎ煩ひて、のどやかに尼君達して、直させ給へ」といふ。額は僧都ぞ削ぎ給

手

習

棄恩入無爲、眞實報恩者。斷ち果てしものを……恩愛不能斷と偏にはあるが、自分は既に恩愛を斷つてしまつたものと浮舟が思出すにつけても、流石に悲しいのどやかに……ゆつくり尼君達に直してお貰ひなさいまし。頼は頼愛はとみにせさすべくもなく……急に決行させさうにもなく皆が押止めた出家の事を。生ける暇ありて……浮舟が生きて甲斐があるやうにお感じなされた。皆人々出で静まり……僧都の一行が出家されて跡はひっそりした夜風の音に。この人々……少將の尼等。心細き……此處で貴女(浮舟)が心細くお暮しなのも今暫くの事。かく仕なさせ給ひて……かう出家しておしまひなされて。今は限と……出家する時はこれが一生の終のやうな氣がして。世に經べきものとは……人々の生活をすること、まるで考へないでも済むやうになつ事だが誠に結構な事だと。つとめては……翌朝は、流石に人々が反對した事ゆゑ變り果てた尼姿を見られるのも誠に恥かしく。

ふ。かゝる御容貌やつし給ひて、悔い給ふなど、尊き事ども説き聞かせ給ふ。とみにせさすべくもなく、皆いひ知らせ給へる事を、嬉しくもしつるかなと、これのみぞ生ける暇ありて覺え給ひける。皆人々出で静まりぬる夜の風の音に、この人々「心細き御住居も暫しのことぞ。今いとめでたくなり給ひなむと、頼み聞えつる御身を、かく仕なさせ給ひて、残おほかる御世の末を、いかにせさせ給はむとするぞ。老い衰へたる人だに、今は限と思ひ果てられて、いと悲しき業に侍る」といひ知らすれど、なほ只今は心やすく嬉し。世に經べきものとは、思ひかけずなりぬるこそは、いとめでたき事なれと、胸のあきたる心地ぞし給ひける。つとめては、流石に人の許さぬ事なれば、變りたらむ様見えむもいと恥かしく、髪をすその俄におほどれたるやうに、しどけなくさへ削がれたるを、むつかしき事どもいはで繕はむ人もがなと、何事につけてもつゝ、ましくて、暗うしなしておはす。思ふことを人にいひ續けむ言の葉は、元よりだにはかゝりしからぬ身を、

拾ほどれたる廣がり散つた。むつかしき事どもいはで……うるさい小言などをいはずに。元よりだに……元々すら浮舟ははきはきは出来なかつた身だのに、まして今は懐かしく相談すべき人さへ無いので。たけき事とは……精々えらい事として。なきものに……我が身をも親しい人をも無きものと思つて死んで世を捨てようとしたが、由なく救はれ、今更世に生きながら尼となつてこの世を捨てる事よ。限りつるぞかし……萬事は休した。かぎりぞと……これが最後と誓て一度決心して背いた世を、今又尼となつて再び背く事よ。おなじ筋の事を……折柄浮舟の出家で、人々が取込んで呆れ合つてゐた際なので、かくくゝの次第で浮舟は出家なされたといふ事を中將に知らせた。いとあへなしと……中將は非常に張合の抜けた事に思つて。かゝる心の深く……以下中將の心。はかなき答をも……好い加減調子を合せ、一少將に語らひ……先夜も少將

まいて懐かしくことわるべき人さへなければ、只硯に向ひて、思ひあまる折には、手習をのみぞ、たけき事とは書きつけ給ふ。なきものに身をも人をも思ひつゝ、捨て、し世をそ更に捨てつる。今はかくて限りつるぞかし」と書いても、猶みづからは、いとあはれと見給ふ。かぎりぞと思ひなりにし世の中を。かへすくも背きぬるかな。おなじ筋の事を、とかく書きすさび居給へるに、中將の御文あり。物騒がしくあきれたる心地しあへる程にて、「かゝる事なむ」といひてけり。いとあへなしと思ひて、かゝる心の深くありける人なりければ、はかなき答をも仕初めじと思ひ離るゝなりけり、さても敢へなき業かなと、をかしく見えし髪を、たしかに見せよと、一夜も少將に語らひしかば、「さるべからむ折に」といひしものをと、いと口惜しくて、

の尼等に相談した處が、然るべき
 機會に見られるやうに計らひませ
 うと少將の尼はいつたものをと。
 聞えむ方なきは申上げやうもない
 不慮の御出家の事については。
 岸とほく……この世を背き離れて尼
 となられた貴女に、私も後れず出
 家しようといふ心持が頻に催しま
 すとの意。登舟に尼を懸けた。岸
 漕ぐ、乗るは舟の縁語。
 例ならず……いつもと違つて浮舟が
 この文を取つて御覽になる。
 今と思ふも……浮舟は中将が今は
 これまでと自分の事を断念したの
 も氣の毒ではあるもの。
 心こそ……出家して心こそ憂いこの
 世を背き離れましたが、私の身の
 行末は果してどうなりますやらの
 の意。尼に海人をかけた、浮き木
 は舟のことで、わが身に擬へた。
 岸は舟の縁語。をば歎辭。
 つゝみて奉る……少將の尼等が包ん
 で中将へお送り申上げた。
 書き寫して……私の直筆でなくせめ
 て書き寫してでも遣つて下さい。
 物詣の人……初瀬詣の妹尼が歸られ
 て浮舟の出家に驚き騒がれる事が
 非常である。
 かゝる身にては……私のやうな出家
 の身では貴女にも出家をお勧め申

立ち返り、^{中將ノ文}聞えむ方なきは、
 岸とほく漕ぎ離るらむあま舟に
 乗りおくれじと急がる、かな
 例ならず取りて見給ふ。物のあはれなる折に、今と思ふもあはれな
 るものから、いかゞ思さるらむ、いとほかなき物のほしに、
 一^{浮舟}心こそ憂き世の岸をはなるれど
 行方も知らぬあまのうき木を
 と、例の手習にし給へるをつゝみて奉る。書き寫してだにこそと宣
 へど、^{少將}なかく書きそこなひ侍りなむとて遣りつ。^{中將ノ}珍しきにも、いふ
 方なく悲しくなむ覺えける。
 物詣の人かへり給ひて、思ひ騒ぎ給ふこと限なし。^{妹尼}かゝる身にては、
 勧め聞えむこそはと思ひなし侍れど、殘多かる御身を、いかでか經給
 はむとすらむ。おのれは世に侍らむこと、今日明日とも知り難きに、
 いかで後安^{中將}く見おき奉らむと、よろづに思ひ給へてこそ、佛にも祈

さうとこそ思ひましたけれど。
 殘多かる一行末長い。
 いかで後安く……何とぞして貴女を
 安心の出来るやうな御境遇にして
 お置き申さうと。
 まことの親の浮舟の實の親が。
 やがて浮舟が姿を消してその儘死
 骸も見つからないこと。
 推し量るぞ妹尼が推量するのが。
 例の答もせで浮舟が。
 いと物はかなくぞ……實に貴女はた
 よりないお人ですねえ。
 御衣の事……浮舟の法衣の支度。
 鈍色は……鼠色の法衣は妹尼の仕立
 て馴れた事ゆゑ、小袿や袈裟など
 を特別に準備させた。
 ある人々も……庵室内の人々も。
 いと覺えず……誠に思ひがけなく浮
 舟の來られた事を、嬉しい庵室の
 異彩として。
 一品の宮の御惱……女一宮の御病氣
 は成程僧都の弟子のいつた通り、
 僧都の祈禱に著しい効驗があつて
 御快方に向はれたので。
 名殘も恐ろしとて……豫後がまだ安心
 出來ないといふ事。
 とみにもえ歸り入らで……僧都は急に
 横川の庵室へ歸る事も出來ないで、
 夜居御寮所の次の間にあつて終夜
 加持する僧をいふ。

り聞えつれ」と、伏しまろびつゝ、いといみじげに思ひ給へるにも、ま
 ことの親のやがて死骸もなきものと思ひ惑ひ給ひけむ程推し量る
 ぞ、まづいと悲しかりける。例の答もせで背き居給へるさま、いと若
 く美しげなれば、いと物はかなくぞおはしけると、つらき御心なれど
 も、泣くく御衣の事など急ぎ給ふ。鈍色は手馴れにけることなれば、
 小袿袈裟などしたり。ある人々も、かゝる色を縫ひ著せ奉るにつけて
 も、いと覺えず嬉しき山里の光と、あけくれ見奉りつるものを、口惜
 しき業かな」と、あたらしがりつゝ、僧都をぞうらみ誇りける。一品の
 宮の御惱げにかの弟子のいひしも著く、いちじるき事どもありて、お
 こたらせ給ひにければ、いよゝいと尊きものにいひの、しる。名殘
 も恐ろしとて、御修法延べさせ給へば、とみにもえ歸り入らで侍ひ給
 ふに、雨など降りてしめやかなる夜、召して、夜居に侍はせ給ふ。日頃
 いたく侍ひ困じたる人は皆休みなとして、御前に人少なにて、近く起
 きたる人々少なき折に、大宮も、同じ御帳におはしまして、昔より頼

手習

侍ひ困じたる人―御伽に疲れきつた人達。同じ御帳に……明石中宮が女一宮と昔より頼ませ給ふ……ずつと以前から主上が萬事僧都を御信頼遊ばしていらつしやるがその中でも、今度といふ今度、女一宮の御祈禱に僧都がえらい効験を顯はされたのを見て、愈來世もこの通り救つて下さるに違ないと信頼の念が増しました。

世の中に……もう私のこの世の壽命も長くはなさうに。御物の氣の執念きこと―女一宮に憑いてゐた物怪の執拗だつたこと。かくのごと―この宇治院のやうに。重き病者―母の尼をいふ。思ふ給へしも著く―存じました事も果して當つて。かの見付けたりし事―浮舟を發見した事。恐ろしく思はれて……中宮は僧都の話を恐しがられて、人々をお起しになつた。

大將の語らひ給ふ……薫の密に愛して居られる小宰相が、僧都の今の話を疑ながら聞いてゐた。驚かさ給ひける人々……お起しになつた侍女達はもう何も話を聞か

ませ給ふ中にも、この度なむいよく後の世もかくこそはと、頼もしき事まさりぬる」など宣はす。世の中に久しく侍るまじき様に、佛なども教へ給ふやうなる事ども侍るうちに、今年來年過し難きやうになむ侍りければ、佛を紛れなく念じ勤め侍らむとて、深くこもり侍るを、かゝる仰言にてまかり出で侍りにしなど啓し給ふ。御物の氣の執念きこと、様々に名のるが恐ろしきことなど宣ふ序に、「いと怪しく稀有の事をなむ見給へし。この三月に、年老いて侍る母の願ありて、長谷に詣でて侍りしかへさの中宿に、宇治の院といひ侍る所にまかり宿りしを、かくのごと人住まで年經ぬる大きな所は、よからぬ物必ず通ひ棲みて、重き病者のため悪しき事どもやと、思ふ給へしも著くとて、かの見付けたりし事どもを語り聞え給ふ。げにいと珍かなる事かな」とて、近く侍ふ人々みな寐入りたるを、恐ろしく思はれて、驚かさ給ふ。この大將の語らひ給ふ宰相の君しも、この事を聞けり。驚かさ給ひける人々は、何とも聞かず。僧都怖ちさせ給へる御氣色を、

なかつた。委しくも……その折の事を委しくは述べなかつた。その辭や、不當。その女人―この句「泣くく」以下に懸る。

この度……今度私がお召によつて山から下りて参ります序に。頭おろし……私が落髮させました。某の妹―私の妹。かくなりたれば……浮舟が出家しましたので私を怨んで居ります。けうらにて―美しくて。清らにての音便。

行ひ寢れむも―佛の勤ゆゑに容貌の衰へようもの。いかでさる所に……どうしてまあそんな宇治院のやうな恐しい所に美しい人を魔物が攫つて行つたのでせう、それにしても今では身元が分りましたでせう。

この宰相の君ぞ問ふ―豫て聞いてゐる浮舟の死を思合せて、小宰相が熱心に聞く。さもや侍らむ―或は既に身元がわかつたかも知れません。龍の中より……龍女が成佛した例も無いではなし。法華經にあること。たい人にては……何でもない身分の女としては缺點少い女です。かのわたりに……宇治の邊で姿を消

心もなきこと啓してけりと思ひて、委しくもその程の事をばいひさしつ。その女人、この度まかり出で侍りつる便に、小野に侍りつる尼ども、逢ひ訪らひ侍らむとてまかり寄りたりしに、泣くく―出家の志深きよし、懇に語らひ侍りしかば、頭おろし侍りにき。某の妹、故衛門の督の妻にて侍りし尼なむ、亡せにし女子の代りにと思ひ喜び侍りて、随分に勞りかしづき侍りけるを、かくなりたれば怨み侍るなり。げにぞ、容貌はいとうるはしくけうらにて、行ひ寢れむもいとほしげになむ侍りし。何人にか侍りけむ」と、物よくいふ僧都にて、語り續け申し給へば、いかでさる所に、よき人をしも取りもて行きけむ。さりとも今は知られぬらむ」など、この宰相の君ぞ問ふ。知らず。さもや侍らむ。まことにやむごとなき人ならば、何か、隠れも侍らじをや。田舎人の女もさる様したるこそは侍らめ。龍の中より佛生まれ給はずはこそ侍らめ。たい人にては、罪輕き様の人になむ侍りける」など聞え給ふ。その頃かのわたりに、消え失せにけむ人を思し出づ。この御前

したとかいふ浮舟の事を中宮がお
思ひ出しなされた。
この御前なる人―小宰相。
姉君の傳へに―浮舟の姉君即ち中の
君からのお話で。
それにやあらむ…僧都の話の人が
その浮舟ではあるまいかとは思つ
たけれど、確ならぬ事だし。
かの人…その女は自分の生きてゐ
る事を人に知られまいと、何か悪
い敵見たやうな者でもあるらしい
風について隠して居る様ですが。
宮は―明石中宮は。
それにもこそあんなれ―浮舟がそれ
かも知れぬ。
この人にぞ―小宰相に。
いづ方にも…薫としても浮舟とし
ても内密にすべき事を、きつとそ
れだとも分らぬ儘で、極り悪い程
落着いた薫に切出して仰しやるの
も憚られて、御中止なされた。
姫宮おこたり果て…女一宮が御平
癒なされて。
彼處に―小野の妹尼の庵室に。
なか／＼かゝる御有様…浮舟が若
い身空で出家して行末途げなかつ
たら却て罪にもなりさうな事を、
私に相談もなさらなかつたのを怨
に存じます。事なむ―原文は「事
をなむ」とある。をの辭は行であ

なる人も、姉君の傳へに、怪しくて失せたる人とは聞き置きたれば、そ
れにやあらむとは思ひけれど、定めなき事なり、僧都もかの人、世に
あるものとも知られじと、よくもあらぬ敵だちたる人もあるやうに
赴けて、隠し忍びて待るめるを、事の様の怪しければ啓し侍るなりと、
なま隠す氣色なれば、人にも語らず、宮は、それにもこそあんなれ。大將
に聞かせばや」と、この人にぞ宣はすれど、いづ方にも隠すべき事を、
定めてさならむとも知らずながら、恥かしげなる人にうち出で宣は
せむも、つゝ、ましく思して止みにけり。
姫宮おこたり果てさせ給ひて、僧都ものぼりぬ。彼處に寄り給へれば、
いみじく恨みて、なか／＼かゝる御有様にて罪も得ぬべき事を、宣ひ
も合はせずなりにける事なむ、いと怪しきなど宣へどかひなし。今
はた、御行をし給へ。老いたる若き、定めなき世なり。はかなきもの
に思し取りたるも、ことわりなる御身をや」と宣ふにも、いと恥かし
くなむ覺えける。御法服新しくし給へ」とて、綾、羅衣などいふ物奉

らう。
今はたゞ…浮舟にいふ詞。
某が…私が生きて居ります間は。
世間の榮華に…現世の榮華に憚れ
執着する間は、障り勝て世を捨て
難く誰も思ふ事であるやうです。
林の中―隱棲の處をいふ。
葉の薄きが如し―白氏文集、陵園妾
の句「顔色如花、命如葉之薄」。
松門に曉いたりて…陵園妾の續き
「松門曉到月徘徊、柏城盡日風蕭
瑟」。
思ふやうにも…理想通りにまあ御
教訓下さる事よ、と浮舟は聞いて
みた。
おはしたる人も―僧都も。
山伏―山に住む意で、僧をいふ。修
驗道の山伏に限らない。
かゝる日にぞ…風蕭瑟たるかうい
ふ日にこそ感を催して涙も出るも
のですわい。
道理にとまらぬ…道理で今日は涙
がとまらぬ事だと思つて。
谷の軒端―谷のあはひ。この語、夢
の浮橋の巻にもある。
山へ―比叡山へ。
こなたの道―小野の方からの道。
黒谷―比叡山の西麓、小野の南。
例の姿―世間並の俗人の姿を。
あひなく珍しきに―何となく珍しい

りおき給ふ。某が侍らむ限は仕うまつりなむ。何か思ひ煩ふべき。常
なき世に生ひ出でて、世間の榮華に願ひまつはるゝ限なむ、所狭く捨
てがたく、我も人も思すべかめる事なめる。かゝる林の中に行ひ
勤め給はむ身は、何事をかは怨めしくも恥かしくも思すべき。このあ
らむ命は、葉の薄きが如し」といひ知らせて、松門に曉いたりて月徘徊
す」と、法師なれどいとよし／＼しう、恥かしげなる様にて宣ふこ
とどもを、思ふやうにもいひ聞かせ給ふかな、と聞き居給へり。今日
は日ねもすに吹く風の音もいと心細きに、おはしたる人もあはれ山
伏は、かゝる日にぞ音は泣かるかし」といふを聞きて、我も今は山伏
ぞかし、道理にとまらぬ涙なりけりと思ひつゝ、端の方に立ち出でて
見れば、遙なる谷の軒端より、狩衣姿いろ／＼に立ちまじりて見ゆ。
山へのぼる人なめり。こなたの道には、通ふ人もいとたまさかなり。
黒谷とかいふ方よりありく法師の跡のみ、稀々は見ゆるを、例の姿見
付けたるはあひなく珍しきに、この恨み侘びし中將なりけり。かひな

手

習

のにかひなき事も……浮舟に對する失戀の心持をも訴へようとして出かけた來たのであるが。外の紅に……他の山の紅葉よりも。此處にいと……こんな景色の優れた處に、人並に快活にしてゐる女を見つけたら珍しく面白からうなどと中將は思つて。なほ立ち返り……今は何の甲斐もないものゝ、紅葉の風情の面白さに矢張昔に立返つて一夜泊つても行きたいやうなこの庵です。尼君！妹尼。木がらしの……意は明かである。裏面には浮舟が出家して何の風情も無くなつてしまつたこの庵室には、折角貴方がお出下されてもお泊申す甲斐すらありませんとの意をよせた。蔭だにぞなきは木枯に木の葉の散つたゆゑのこと。待つ人も……今は私を待つてくれる人もあるまいと思ふものゝこの庵室の木々の梢は、矢張昔の心持に牽かれて、見ずに素通りする事が出来ません。いふかひなき人の御事……何といつても最早返しのつかぬ浮舟の事。それをだに……せめて尼姿でも見せて、前に浮舟を見せようとして私に約

き事もいはむとて物したりけるを、紅葉のいと面白く、外の紅に染めましたる色々なれば、入り來るよりぞ物あはれなりける。此處にいと心地よげなる人を見付けたらば、あやしくぞ覺ゆべきなど思ひて、暇ありて徒然なる心地し侍るに、紅葉もいかにと思ふ給へてなむ。なほ立ち返り、旅寝もしつべき木のもとにこそとて、見出だし給へり。尼君例の涙もろにて、

「木がらしの吹きにし山の麓には

たち隠るべき蔭だにぞなき」

と宣へば、

「待つ人もあらじと思ふ山里の

梢を見つゝなほぞ過ぎうき」

いふかひなき人の御事を、なほ盡きせず宜ひて、様かはり給へらむ様を、聊か見せ給へよ」と、少將の尼に宣ふ。それをだに契りしるしにせよ」と責め給へば、入りて見るに、殊更にも人に見せまほしき様し

東したしるしにして下さい。入りて見るに、少將の尼が浮舟の部屋に入つて見ると浮舟は、萱草一萱草色、柑子色に略同じ色。すみたる一花やかな。今めきたる……短く切り下げた髪は五重の扇を……短く切り下げた髪は扇を廣げたやうに。五重の扇は繪扇の親骨を繪の薄板五重に重ねて薄様で包んだもの。こちたき末付なり……過ぎてうるさい位な髪先である。こまかに美しき面様の……よく整つて美しい顔立が。まいて心かけ給はむ……まして懸想してゐる中將は。さるべき折にやありけむ……丁度よい機會であつたものか。紛るべき……覗くの邪魔になる。いとかくは……中將は浮舟がこれ程までの美人とは思はなかつた。實に理想通りな人だのにと、浮舟の出家が中將自身の過失から起つた事でもあるやうに。物狂はしき……氣でも狂ひさうな我が様子、障子越しに浮舟に聞えさうなので。かばかりの様したる……以下中將の心。又その人かの人……又誰その娘

てぞおはする。薄鈍色の綾、中には萱草など、すみたる色を着て、いとさゝやかに様體をかしく今めきたる容貌に、髪は五重の扇を廣げたやうに、こちたき末付なり。こまかに美しき面様の、假粧をいみじくしたらむやうに、あかく匂ひたり。行などをし給ふも、なほ數珠は近き几帳にうち懸けて、經に心を入れて讀み給へる様、繪にも書かまほし。うち見る毎に涙のとぐめ難き心地するを、まいて、心かけ給はむ男は、いかに見奉り給はむと思ひて、さるべき折にやありけむ、障子の懸鐵のもとにあきたる穴を教へて、紛るべき几帳など引き遣りたり。いとかくは思はずこそありしか、いみじく思ふ様なりける人をと、わがしたらむ過ちのやうに、惜しく悔しく悲しければ、つゝみもあへず、物狂はしきけはひも聞えぬべければ、退きぬ。かばかりの様したる人を失ひて、尋ねぬ人ありけむや、又その人かの人かの人か、行方も知らず隠れにたる、もしは物怨じして世を背きにけるなど、自ら隠れなかるべきをなど、怪しく返す……思ふ。尼なりとも、かゝる様

は行方知れず姿を隠したとか、或は何事かを怨んで世を捨てたとか自然世間に噂が廣がりさうなものだのになど。假令尼姿でもこれ程の美人なら嫌な感じもすまい、却つて俗體よりも見勝りがして今後も煩悶しさうだから、こつそりと矢張我が手に入れてしまはうと。世の常の様……俗體の頃は私に逢ふのは御遠慮なさる次第もあつたでせうが、こんな尼姿になられたので却て私は氣安くお話も出来ます。來し方の忘れ難くて……亡き妻の事が忘れられずにかうして参ります。が、又浮舟に對する心持を加へて今後もお尋ね申しませう。後めたき有様に……浮舟の事が氣がかりで御座いますのに。侍らざらむ後……私の亡くなつた後がお可愛さうでせう。この尼君も……妹尼も浮舟と關係ある人なのだらう、それにしても浮舟は一體どんな人だらうと、中將は合點がゆかぬ。行末の御後見……浮舟の將來のお世話さ聞えそめ侍りなば……かう申上げた以上は決して心持の變る事はありません。……浮舟を尋ね取

したらむ人は、うたても覺えじかし、なか／＼見所まさりて心苦しかるべきを、忍びたる様に、なほ語らひ取りてむと思へば、まめやかに語らふ。世の常の様には、思し憚る事もありけむを、かゝる様になり給ひにたるなむ、なか／＼心安く聞えつべく侍る。さやうに教へ聞え給へ。來し方の忘れ難くて、かやうに参り來るに、又今ひとつ志を添へてこそなど宜ふ。いと行末心ばそく、後めたき有様に侍るめるに、まめやかなる様に思し忘れず問はせ給はむ、いと嬉しくこそ思ふ給へ置かめ。侍らざらむ後なむ、あはれに思ふ給へらるべきとて、泣き給ふに、この尼君も離れぬ人なるべし、誰ならむと心得がたし。行末の御後見は、命も知り難く頼もしげなき身なれど、さ聞えそめ侍りなば、更にかはり侍らじ、尋ね聞え給ふべき人は、まことに物し給はぬか。さやうの事の覺束なきになむ、憚るべき事には侍らねど、なほ隔ある心地し侍るべきと宜へば、人に知らるべき様にて世に經給は、さも尋ね出づる人も侍らむ。今はかゝる方に、思ひ限りつる有様にな

つて世話すべき筋の人は本當にのたに落ちないので、何も私が私に必要も無い事ながら矢張それではお互の心が打解けないやうな氣が致しませう。人に知らるべき……浮舟が人目につくやうな風にして暮して居られたら、それは成程そんな風に探し出さうとする人があるかも知れませぬ、然し今はこんな人に知られぬやうな境遇に、世を思ひ諦めた有様です。……浮舟御本人の意向もおもむけも……をば歎

此方にも……中將が浮舟へも。おほ方の……只はかない現世を厭うて御出家なされた貴女とは思ひます、何だか私をお嫌ひの上のやうな氣がして我が身が恨めしく感ぜられます。……中將の懇切な心持などを少將の尼君等が浮舟に傳へる。この厭ふにつけたる……厭ふによせたと誂んだ中將の歌には浮舟は返歌をなさらない。……浮舟は我ながら案外な膽の潰れるやうな事もあつた身だから、色戀の事は實に嫌な氣が

む。心のおもむけも、さのみ見え侍るを」など語らひ給ふ。此方にも消息し給へり。

中將「おほ方の世をそむきける君なれど」

厭ふによせて身こそつらけれ」

懇に深く聞え給ふことなど、多くいひ傳ふ。兄弟と思しなせ。はかなき世の物語なども聞えて慰めむ」などいひ續く。心深からむ御物語など、聞き分くべくもあらぬこそ口惜しけれ」と答へて、この厭ふにつけたる答はし給はず。思ひ寄らず淺ましき事もありし身なれば、いと疎まし。すべて朽木などのやうにて、人に見捨てられて止みなむともてなし給ふ。されば月頃たゆみなく結ばはれ、物をのみ思したりしも、この本意の事し給ひて後より、少し晴れ／＼しくなりて、尼君とはかなく戯れもし交し、碁打ちなどしてぞ明し暮し給ふ。行もいとよくして、法華經は更なり、異法文などもいと多く讀み給ふ。雪ふかく降り積み、人目絶えたる頃ぞ、げに思ひ遣る方なかりける。

する。月頃たゆみなく……この程から絶間もなく気が替りして。この本意の事……本望通り出家をなされて以来は。尼君と一浮舟は妹尼と。異法文一法華經以外の經文。げに思ひやる方……ほんに心の慰めやうもなかつた。君にぞまどふと……「君にぞ惑ふ道は惑はず」(浮舟の卷一九八六頁本文参照)と詠まれた句宮の事は、心憂いと諦めてしまつたけれど。かきくらす……あたり暗くなる程降る野山の雪を眺めるにつけて古い昔の事が思ひ出されて今日も迷しいとの意。降りに舊りを懸けた。われ世になくなりて……私が姿を消してしまつて以来年も隔たつたが時には思出す人もあらうなどと。山里の……山里の雪の中の若菜を摘んでもてはやしつゝ、貴女の將來もこの若菜の如く美しく榮える事だらうと思はれますとの意。挨拶の歌。

年も返りぬ。春のしるしも見えす、氷りわたれる水の、音せぬさへ心細くて、「君にぞまどふ」と宣ひし人は、心憂しと思ひ果てにたれど、猶その折などの事は忘れず。
「浮舟」かきくらす野山の雪をながめても
 ふりにしことぞ今日も悲しき
 など、例のなぐさめの手習を、行の隙にはし給ふ。われ世になくなりて年隔たりぬるを、思ひ出づる人もあらむかしなど、思ひ出づる時も多かり、若菜をおろそかなる籠に入れて、人のもて來たりけるを、尼君見て、
「妹尼」山里のゆきまの若菜つみはやし
 なほ生ひ先のたのまるゝかな
 とて、こなたに奉り給へりければ、
「浮舟」雪ふかき野邊の若菜も今よりは
 君がためにぞ年をつむべき

摘むをかけた。

さぞ思すらむと……成程さうも思召さうと。見るかひあるべき……浮舟が尼でなく將來望ある身ならよいと。春やむかしの一古今、月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして。異花よりも……他の花よりも浮舟が殊にこれを受するの、他いて別



手習

れた譯でもない薫や匂宮の懸しが
が身にしてみてもゐる爲なのか。拾遺、
「あかざりし君が匂の懸しさに梅
の花をぞけさは折りつる」によつ
た。

後夜―夜半からの勤行。

関伽―水の梵語。

かごとがましく―かこち顔にの意。
袖ふれし…袖かけて匂を移した即
ち昔馴染の人こそ見えないが、花
の香はその人の袖の香かとばかり
匂ふこの春の曙よとの意。人は匂
宮や薫をさす。古今「色よりも香
こそあはれと思ほゆれたが袖ふれ
し宿の梅ぞも」。

大尼君―僧都の母の尼。
何事か去年一昨年一昨年は何
か變つた事でも御座いましたか。
ほけしき…母の尼は。
こなたに來て―妹尼の方へ來て。
僻み給ひにけれ―大尼君は遷座され
ましたねえ。

残なき御様を…餘命幾何もなき御
様子を側でお世話も出来ないで。
親たち物し給はで…兩親の亡くな
られて後は大尼君を親がはりとお
思ひ申してゐましたのに。
常陸の北の方―常陸介の妻。この紀
伊守の妹で浮舟の母とは別人。
年月に添へては―多年の間には。

え待ちつけ…常陸介の妻が今度來
るまでは母尼君は生きて居られさ
うもない御様子に見えます。
わが親の名と…常陸といふので、
浮舟は自分の親の名をいつてゐる
と、はつとしたが。
昨日も…實は昨日にも此處へお伺
致さうと存じましたのに。
右大將殿―薫。
日暮し給ひし…薫が。
故宮―八宮。
まづ一所は―大君をいふ。
その御おとらと―妹。浮舟をさす。
忍びてすゑ奉り…密に宇治にお置
き申して居られました處が。
その御果の業…その御一周忌の法
事をお誓み遊ばす事を。
某も…私もその御法事の布施に女
の衣裳を一揃調進して上げる筈で
すが、仕立て、下さいませんか。
いかでか…浮舟は何で無量の感を
催さずにゐられよう。
かの聖の親王―八宮。
兵部卿の宮の北の方―匂宮の奥方即
ち中の君。
この大將殿…薫君の後の愛人（浮
舟）はお妾腹なのでせう、初は餘
り大事にもなさらなかつたのに、
死後は非常に悲んでいらつしやる
のです、初の大君の逝去の時も矢

とあるを、さぞ思すらむと、あはれなるにも、見るかひあるべき御様
と思はましかば」と、まめやかにうち泣い給ふ。聞のつま近き紅梅の、
色も香も見し世に變らぬを、「春やむかしの」と、異花よりもこれに心
寄せのあるは、飽かざりし匂の滲みにけるにや。後夜に關迦奉らせ給
ふ。下藤の尼の少し若きがある、召し出でて花折らすれば、かごとが
ましく散るに、いと匂ひ來れば、
「袖ふれし人こそ見えね花の香の」
それかとはほふ春のあけぼの」

大尼君の孫の紀守なりけるが、この頃のぼりて來たり。三十ばかりに
て、容貌清げに誇かなる様したり。「何事か、去年一昨年」など問ふに、
ほけしき様なれば、こなたに來て、「いとこよなくこそ僻み給ひに
けれ、あはれにも侍るかな。残なき御様を見奉ること難くて、遠きほ
どに年月を過し侍るよ。親たち物し給はで後は、一所をこそ御かはり
に思ひ聞え侍りつれ。常陸の北の方は、音づれ聞え給ふや」といふは妹

なるべし。「年月に添へては、徒然にあはれなる事のみまさりてなむ。
常陸はいと久しく音づれ聞え給はさめり。え待ちつけ給ふまじき様
になむ見え給ふ」と宣ふに、わが親の名と、あいなく耳とまるに、又い
ふやう、まかり上りて日頃になり侍りぬるを、公事のいと繁く、むつ
かしくのみ侍るにか、づらひてなむ。昨日も侍はむと思ふ給へしを、
右大將殿の宇治におはせし御供に仕うまつりて、故八の宮の住み給
ひし所になむおはして、日暮し給ひし。故宮の御女に通ひ給ひしを、
まづ一所は、一年亡せ給ひにき。その御おとらと、又忍びてすゑ奉り給
へりけるを、去年の春また亡せ給ひにければ、その御果の業せさせ給
はむこと、かの寺の律師になむ、さるべき事宜はせて、某もかの女の
装束一領、調じ侍るべきを、せさせ給ひてむや。織らすべき物は急ぎせ
させ侍りなむ」といふを聞くに、いかでかあはれならざらむ。人や怪
しと見むとつ、ましようて、奥に向ひて居給へり。尼君かの聖の親王の
御女は二人と聞きしを、兵部卿の宮の北の方はいづれぞ」と宣へば、

張非常に悲まれました。かのわたりの……さては蕭の邸に親しく出入する人だわいと。彼處にて……宇治でお亡くなりなされました事よ。いと不便に侍りしかな。誠に見かねた事で御座いましたよ。水を覗き給ひて……蕭君が。見し人は……嘗て愛した浮舟は水底に沈んで今は影も留めぬ水の上に落ち添ふ私の涙は堰きとめる事も出来ない非常に。言にあらはして……口に出して浮舟の事を仰しやる事は。女はいみじく蕭君の御容姿は女ならば常非に。若く侍りし時……私は若かつた時から蕭君の御様子を優雅でいらつしやると眞底から存じましたので。一の所……攝政關白。この殿……蕭。殊に深き心も……格別深い考も無ささうなこんな人達より、蕭の御容姿の立派さは認めてゐるのだわいと浮舟は思ふ。故院……源氏。え並び給はじと……蕭とても。この御族……蕭の一統。

「^{紀守}この大將殿の御後ののは、劣り腹なるべし。事々しくもてなし給はざりけるを、いみじく悲しび給ふなり。初のはた、いみじかりき。ほとほと出家もし給ひつべかりきかし」など語る。かのわたりの親しき人なりけりと見るにも、^(浮舟)さすがに恐ろし。あやしく、様のもと、彼處にてしも失せ給ひにけること。昨日もいと不便に侍りしかな。川近き所に、水を覗き給ひて、いみじく泣き給ひき。上にのぼり給ひて、柱に書きつけ給ひし、

見し人は影もとまらぬ水の上に

落ちそふ涙いとせきあへず

となむ侍りし。言にあらはして宜ふ事は少なけれど、只氣色にはいとあはれなる御様になむ見え給ひし。女はいみじくめで奉りぬべくなむ。若く侍りし時より、優におはしますと見奉り染みしかば、世の中の一の所も何とも思ひ侍らず、只この殿を頼み聞えさせてなむ、過し侍りぬる」と語るに、殊に深き心も無げなるかやうの人だに、御有様は

左の大殿……夕露はどうでせう。宿徳……宿徳本……の意で、才徳一世に重きを成す人をいふ。兵部卿の宮……匂宮。女にて馴れ……女になつてお側に宮仕したいものだ。教へたらむやうに……浮舟の聞く處でかういへど誰か教へてもよこしたやうに、紀伊守が語り續けてゐる。出でぬ……紀伊守が退出した。忘れ給はぬ……浮舟は蕭が自分の事をまだお忘れにならぬのだ。なか……いふかひなき……生中何の甲斐もない尼姿をお目にかける事は猶更憚られた。かの人の……紀伊守が頼んで置いた布施の爲の女の装束などを。かけてもいひ出でず……これは自分の法事の爲にする物だなどは曖にも出す譯にゆかない。これ御覽に入れよ……貴女もこれをして下さいまし。捻らせ……一重衣の耳を捻ること。いそぐ事を……至急を要する縫物は打捨て、置いて。紅に櫻の……布施の料の衣裳の色。櫻は表は白、裏は紫或は赤。御前には……浮舟様にはこんなのをこそお着せ申すがよい。

見知りにはけりと思ふ。尼君、光る君と聞えけむ故院の御有様には、え並び給はじと覺ゆるを、只今の世に、この御族ぞめでられ給ふなる。左の大殿」と宣へば、それは容貌もいとうるはしう清らに、宿徳にて、際殊なる様ぞし給へる。兵部卿の宮ぞいとみじくおはするや。女にて馴れ仕うまつらばやとなむ覺え侍る」など、教へたらむやうにいひ續く。あはれにもをかしく聞くに、身の上もこの世の事とも覺えず。滯ることなく語り置きて出でぬ。忘れ給はぬこそはと哀に思ふにも、いと母君の御心のうち推し量らるれど、なか……いふかひなき様を見え聞え奉らむは、猶いとつ、ましくぞありける。かの人のいひつけし事など、染め急ぐを見るにつけても、^(浮舟)怪しく珍かなる心地すれど、かけてもいひ出です。裁ち縫ひなどするを、^(尼)これ御覽に入れよ。物をいと美しく捻らせ給へば」とて、小鞋の單衣奉るを、うたて覺ゆれば、こゝち悪しとて、手も觸れず臥し給へり。尼君、いそぐ事をうち捨て、いかと思さるゝなど、思ひみ

手

習

あま衣……墨染の法衣姿と變つた今の身に、元の俗體の時用ゐたやうな花やかな衣裳でも打懸けて昔を追憶して見ようか。
 亡くなりなむ後……私の死後、何事も知れずにゐない世間ゆゑ妹尼達かやうなる事を……こんな美しい衣裳の準備などなさるにつけて、何だか感慨を催します。
 盡きせず隔て給ふこそ……どこまでも隠して隔をなさるのが。
 かゝる世の常の色合……こんな俗體の人の着る美しい衣裳などは、久しく仕立てた事が無いので縁には出来ないうつて、死んだ娘がゐたらばなどと思出します。
 しか扱ひ……丁度こんな工合に貴女をも大事に育てられた親御が今も御存命でせうか。
 なほ何處にか……矢張どこかに生きてゐさうな氣がして、何處と居所を尋ね知りたい氣がします。
 思ひ聞え給ふ人々……貴女を歎き慕つて居られる方々が。
 見し程まで……身を捨てて居る前までは母一人だけ居りました。
 なか……思ひ出づるに……思出すにつけて却ていやな氣がするので、それでお話も申上げないのです。

だれ給ふ。紅に櫻の織物の小袷かさねて、「御前にはかゝるをこそ奉らすべけれ。淺ましき墨染なりや」といふ人あり。
 一あま衣かはれる身にやありし世の
 かたみの袖をかけて忍ばむ
 と書きて、いとほしく、亡くなりなむ後に、物の隠れなき世なれば、聞き合はせなどして、疎ましままで隠しけるとや思はむなど、様々思ひつゝ、過ぎにし方の事は、絶えて忘れ侍りにしを、かやうなる事を思し急ぐにつけてこそ、ほのかにあはれなれ」とおほどかに宣ふ。「さりとも思し出づることは多からむを、盡きせず隔て給ふこそ心憂けれ。此處にはかゝる世の常の色合など、久しく忘れにければ、なほ……しつゝ侍るにつけても、昔の人あらましかばなど思ひ出で侍る。しか扱ひ聞え給ひけむ人、世におはすらむや、目の前に亡くなして侍りしに、なほ何處にかあらむ、そことだに尋ね聞かまほしく覺え侍るを、行方知らで思ひ聞え給ふ人々侍らむかし」と宣へば、「見し程まで一人は

大將……この果の業……浮舟の一周忌。
 常陸の子ども……浮舟の異父兄弟。
 かうぶり……は元服の意。
 わが御つかさ……自分のお役所。右近衛府をさす。
 童なるが……まだ元服せぬ中できれいな子（小君と呼ぶ）を。
 後の宮に……一薫が明石中宮の御許に。
 あやしき山里……邊鄙な宇治。
 人の誇り侍りしも……人が輕卒と非難しましたが、これもかうした宿縁だらう、誰にしても心牽かれる女などに就いては同様なものだといふ氣になり、矢張時々通つて居りました。
 所……のさがにやと……大君も浮舟も亡くなつたのは場處が不吉なかと。
 物の便に……事の序に宇治に参りまして。法事の折をいふ。
 かの事思し出でて……明石中宮は僧都の噂した浮舟らしく思はれる女の事をお思出しになつて。
 そこには……宇治には。
 かの人は……浮舟は。
 うち續きたるを……大君と浮舟と打續いて二人も死んだ事を怪しく思召すのかと、薫は思つて。
 さも侍らむ……或はさうかも知れません。

物し給ひき。この月頃亡せやし給ひぬらむ」とて、涙のおつるを紛らはして、「なかく思ひ出づるにつけてうたて侍ればこそ、え聞え出でね。隔は何事にか残し侍らむ」と、言少なに宣ひなしつ。
 大將は、この果の業などせさせ給ひて、はかなくとも止みぬるかなと、あはれに思す。かの常陸の子どもは、かうぶりしたりしは藏人になし、わが御つかさの將監になしなど、勞り給ひけり。童なるが中に清げなるをば、近く使ひ馴らさむとぞ思したりける。雨など降りてしめやかなる夜、後の宮にまゐり給へり。御前のどかなる折にて、御物語など聞え給ふ序に、あやしき山里に、年頃まかり通ひ見給へしを、人の誇り侍りしも、さるべきにこそあらめ。誰も心のよる方の事は、さなむあると思ひ給へなしつゝ、なほ時々見給へしを、所のさがにやと、心憂く思う給へなりし後は、道も遙けき心地し侍りて、久しく物し侍らぬを、さいつ頃、物の便にまかりて、はかなき世の有様とり重ねて思う給へしに、殊さら道心を起すべく、作り掟てたりける。聖の住處とな

手

習

猶かく忍ぶる……明石中宮は矢張薫があれ程秘密にしてある事をすつかり私が聞いてしまつたやうに思ひさうなのが氣の毒な感がなされ、又匂宮が何だか煩悶ばかりなされてあの頃病氣にまでなられた事實をお考合せなさるにつけても、方々に……どちらにしても浮舟の事は迂濶にいひ出せないと思召して御中止なされた。

大將の……薫が浮舟の事を。うち出でつべかりしかど……僧都の噂を話出す管であつたが、愈それと判然しても居らぬ事ゆゑに餘計な氣を揉ませるでもないと思召されて中止しました。

君ぞこと……お前こそ一々よく聞いた事です、工合の悪い所は隠して、かくの事があつたと、他の話の序に僧都のいつた事を薫に話すがよい。

御前にだに……中宮様すら御遠慮遊ばす事を。

様々なる……それは事と品によつて色々斟酌があります、又私が話すと氣の毒な譯があるのです。匂宮の横戀慕の事まで勢ひ口にせねばならぬとの意。

心得て……小宰相は中宮の仰しやる意味を了解して。

む覺え侍りし」と啓し給ふに、かの事思し出でて、いといとほしければ、^{中宮}そこには恐ろしきものや住むらむ。いかやうにてか、かの人は亡くなりにし」と問はせ給ふを、猶うち續きたるを思し寄るかと思ひて、^薫「さも侍らむ。さやうの人離れたる所には、よからぬものなむ、必ず棲みつき侍るなるを、失せ侍りにし様なむいと怪しく侍る」とて、委しくは聞え給はず。猶かく忍ぶる筋を聞き顯はしけりと思ひ給はむが、いとほしく思され、宮の物をのみ思して、その頃は病にもなり給ひしを思し合はするにも、流石に心苦しくて、方々に、口入れにくき人の上と、思しとゞめつ。小宰相に忍びて、^{中宮}大將の、かの人の事をいとあはれと思ひて宜ひしに、いとほしくて、うち出でつべかりしかど、それにもあらざらむもの故と、つゝましくてなむ。君ぞこと……聞き合はせける。片はならむ事は取り隠して、さる事なむありけると、大方の物語のついでに、僧都のいひしこと語れ」と宣はす。^{小宰相}「御前にだにつ、ませ給はむことを、まして他人はいかでか」と聞えさすれど、^{中宮}様々な

立ち寄りて……薫が小宰相の許にいひ出でたり。小宰相が僧都の噂を薫に話し出した。

宮の……明石中宮が浮舟の死について先日お尋ねになつたのも、などか宜はせ……何故すつかりお話し下さらぬのかと薫は恨めしいけれど、自分も亦初からの浮舟との關係を隠してお話申上げなかつたので、中宮が御遠慮遊ばしたのも尤であると思ふ。

なか／＼外には……却て他人には知れてゐるかも知れない、生きてゐる人々の秘密すら知れずにある世間だらうか、まして死者の事などは遠慮なく噂するだらうなどと。この人にも……小宰相に向つても浮舟との關係をかく／＼と打明けて仰しやる事は。

なほ怪しと……不思議と思つた浮舟の身の上にもどうもよく似た人の事情です。ねえ。

せさせざりしを……出家させなかつたのを。

正身の本意深き……本人が希望の深い處もかはらざり場處も同じ字治で、まことにそれと……尋ねてそれが本當に浮舟であつた時は、薫の心、おりに立ちて……熱心に没頭して。又かの宮も……又匂宮も浮舟の存命

る事にこそ。又まろはいとほしき事ぞあるや」と宣はするも、心得てをかしと見奉る。例の立ち寄りて物語などし給ふ序にいひ出でたり。^薫「珍かに怪しとは、いかでか驚かれ給はざらむ。宮の間はせ給ひしも、かゝる事をほの思し寄りてなりけり、などか宜はせ果つまじきとつられれど、我もまた初より有りし様のこと聞え初めざりしかばと思^薫す。聞きて後も、なほ嗚^薫濟がましき心地して、人にすべて洩らさぬを、なか／＼外には、聞ゆる事もあらむかし、現の人々の中に忍ぶる事だに、隠れある世の中かはなど思ひ入りて、この人にも、さなむありしなど、あかし給はむ事は、なほ口重き心地して、^薫「なほ怪しと思ひし人の事に似てもありける人の有様かな。さてその人は猶あらむや」と宣へば、^{小宰相}「かの僧都の山より出でし日なむ、尼になしつる。いみじう煩ひし程にも、皆人惜しみてせさせざりしを、正身の本意深きよしをいひてなりぬる、とこそ侍るなりしか」といふ。處もかはらず、その頃の有様など思ひ合はするに、違ふ節なければ、まことにそれと尋ね出でた

手

習

を聞出されたら、きつと思出して折角浮舟が決心して入つた道心を邪魔なさるだらう。さな宣ひそなど……匂宮が既に知つてゐて、そんな事薫へは仰しやると中宮に口どめでもして置かれ、中宮はそんな稀有な噂を聞かれながら私へは、かく／＼の事を聞いたと仰しやならなかつたのもあらうか。薫の心。宮もかゝづらひ……匂宮が猶浮舟に附纏はれるなら、私は浮舟を深く愛してはゐても全くあの時死んだものと観念してこの儘逢ふまい。をば歎辭。

現人になりて……自分はまじめの人となつて、未来には冥途黄泉のあたりだけに自然消息を通ずるどうかした機會もあらう。宣長説は、浮舟が生者になつて將來消息を通ずることもあらうの意をして、「失せにしもと思ひなして」とあるに依つて「末の世」といひ「黄なる泉」といひなしたと。

我が物に――再び自分の愛人として。なほ宣はずや……矢張明石中宮はお話なさるまいと薫は思ふけれど、そのお心持が知りたいので。

大宮に――中宮に……異様な有様で行淺ましうて失ひ……

らむいと淺ましき心地もすべきかないかではたしかに聞くべき、おり立ちて尋ねありかむも、頑しとや人のいひなきむ、又かの宮も聞きつけ給へらむには、必ず思し出でて、思ひ入りにけむ道も妨げ給ひてむかし、さて、さな宣ひそなど聞え置き給ひければにや、我にはさる事なむ聞きしと、さる珍しき事を聞し召しながら、宣はせぬにやありけむ、宮もかゝづらひ給ふにては、いみじうあはれと思ひながらも、更にやがて失せにしものと思ひなしてを止みなむ、現人になりて、末の世には、黄なる泉のほとりばかりを、自ら語らひ寄る風の紛れもありなむ、我が物に取り返し見むの心は、また使はじなど思ひ亂れて、なほ宣はずやあらむと覺ゆれど、御氣色のゆかしければ、大宮に、さるべきついで作り出でてぞ啓し給ふ。淺ましうて失ひ侍りぬと思ふ給へし人、世に落ちあふれてあるやうに、人のまねび侍りしかな。いかでかさる事は侍らむと思ひ給へれど、心とおどろ／＼しうもて離るる事は侍らずやと、思ひわたり侍る人の有様に侍れば、人の語り侍り

方知れずにしたと思つて居りました浮舟が、まだ存命で世に漂泊してゐるやうに人が噂しましたわ。心とおどろ／＼しう……自分から恐しい入水などを考へて世を見捨てる事はあるまいと、私は思ひ續けてゐる浮舟の氣質ゆゑ、人の噂の様子では成程鬼に取られたといふやうな事もありませうかと。今少し……稍委しく話し出された。宮の御事……匂宮と浮舟との事を。かの事又……浮舟を又かく／＼で私が捜し出したと匂宮がお聞きになつたら、私を未練に好色がましくも思召しませう、それ故全く浮舟が生きてゐるとは知らぬやうな顔して過しませう。

耳もとゞめざりし……よく注意してもお聞かになつた事です、匂宮は何のお聞きになりませう。

聞えむ方……聞いて見ると、申上げやうもない匂宮の不都合なお心だと思ひますので、まして又々浮舟の生きてゐる噂を匂宮が聞かれたら誠に困つたものでせう。

かゝる筋につけて――匂宮はいつも女かゝる事について、中宮は重々しい御性と重き御心……中宮は打解けない世間話などにでも、人が秘密に申上

しやうにては、さるやうもや侍らむと、似つかはしく思ふ給へらるゝとて、今少し聞え出で給ふ。宮の御事をいと恥かしげに、流石に恨みたる様にはいひなし給はで、かの事、又さなむと聞きつけ給へらば、頑にすき／＼しくも思されぬべし。更にさてありけりとも知らず顔にて、過し侍りなむ」と啓し給へば、僧都の語りしに、いと物恐ろしかりし夜の事にて、耳もとゞめざりし事にこそ。宮はいかでか聞き給はむ。聞えむ方なかりける御心の程かなと聞くに、まして聞きつけ給はむこそ、いと苦しかるべけれ。かゝる筋につけて、いと軽く憂きものにのみ、世に知られ給ひぬめれば、心憂くなむ」と宣はず。いと重き御心なれば、必ずしもうち解けぬ世語りにも、人の忍びて啓しけむ事を漏らさせ給はじなど思ふ。住むらむ山里はいづこにかあらむ、いかにして様悪しからず尋ね寄らむ、僧都に逢ひてこそは、確なる有様も聞き合はせなどして、ともかくも訪ふべかゝめれなど、只この事を起き臥し思ふ。

げた事をお漏しなされることは必ずあるまいと。
 住むらむ山里は浮舟の居る處は。八日薬師如來の緣日。たふとき業……薰は佛事をお誓みになるので。御寄進なさる爲に寄せ奉るに……御寄進なさる爲に中堂比叡山の根本中堂。それよりやがて中堂から直に。兄人の童浮舟の弟小君。せうとは普通は兄をいふが、順序に構はず單に男兄弟の意でも用ゐる。その人々には……浮舟の母などには早まつて知らすまい、時と場合に随つての事にしようと思召すが、夢のやうな再會の折の心持にも一入の哀を添へようとして、小君を伴はれたのであらう。その人とは……浮舟とは突留めながら、目馴れぬ有様をした尼達の中にあつて、若し通うて来る男でもあるやうな話を聞いたら随分悲しい事だらうと。

月ごとの八日には、必ずたふとき業せさせ給へば、薬師佛に寄せ奉るにもてなし給へる便に、中堂に時々まゐり給ひけり。それよりやがて横川におはせむと思して、かの兄人の童なる率ておはす。その人々には、とみに知らせじ、有様にぞ隨はむと思せど、うち見む夢の心地にも、あはれをも加へむとにやありけむ。流石にその人とは見つけながら、怪しき様に形異なる人の中にて、憂き事を聞き付けたらむこそいみじかるべけれど、よろづに道すがら思し亂れけるとや。

夢の浮橋(一名、法の師)

この巻は薰二十八歳の五月の事。薰は横川の僧都の話で小野にゐるのが愈浮舟と知つた。僧都は薰の愛人を尼にした輕卒を後悔した。薰は僧都に案内を頼んだが、一旦世を捨てた女の許へ昔の戀人を導くことは佛罰も恐しく、流石に僧都は躊躇した。薰は僧都に手紙を書いて貰ひ、豫て召使ふ浮舟の異父の弟小君に持たせて小野へ遣つた。僧都からも妹尼に事情を申送つた。浮舟は困つたが流石に類には紅の色がのぼつた。簾の下から手紙を差入れる弟を見ては母の事も問ひたく、浮舟の思は千々に亂れたが、心強く思ひ定めて手紙は手に取らうとせぬ。終に顔を入れて泣くのみであつた。小君は懐かしい姉にも逢へず、打萎れて歸つた。薰は小君の復命を聞き、遺瀨もなく悲しく、情に動き易い浮舟ゆゑ、或は又他に戀人が出来て自分に冷淡なのではないかと考へた。卷の名は詞にも歌にも「夢の浮橋」と續けた所は一箇所も見えぬが、世を夢幻泡沫と觀じ、この長い物語の事件も畢竟は夢幻と見てかく附けたものか。古歌に、「世の中は夢のわたりの浮橋かうち渡しつゝ物をこそ思へ」とあるを聯想したものであらう。一名は薰の歌「法の師と尋ねる道をしるべにて思はぬ山に踏みまどふかな」による。

山におはしまして……薰君は比叡山延曆寺の中堂に參詣なされて。横川一叡山三塔の一。僧都の居處。畏まり聞え給ふ……恐縮を申上げる。

山におはしまして、例せさせ給ふやうに、經佛など供養せさせ給ふ。またの日は横川におはしたれば、僧都驚き、畏まり聞え給ふ。年頃も

一品の宮の御心地の……女一の宮様の御病氣の間に御祈禱に参上したのに。
 深き契くはへ……薫は一段と深い師檀の契約を僧都に頼まれたので。重々しうおはする殿……薫のこと。御湯漬など……僧都よりのもてなしの湯漬飯など召上がる。小野のわたりには……小野邊にお知合の家がありますかと、薫は僧都に尋ねると。
 異様なる所……見苦しい所です。某が母なる朽尼の……私の母親の老ぼけた尼が居りますのを。かくて籠り侍る間は……手前がかうやつて山籠をしてゐる間は、何時が何時でも早速に見舞ひませうと存じて、手近な小野に置いてあります。岡かにこそ……さびれてゆくやうで近う居寄りて……僧都のそばに摺り寄つて。
 いと浮きたる心地も……申上げるこの話は、甚だ取留めのない氣も致します。尋ね聞えむに……私がお伺ひ致すにつけては、どうした譯があつてかかと思議に思召さうから。かの山里に……小野の老尼の庵に。

御祈などにつけ語らひ給ひけれど、殊にいと親しき事はなかりけるを、この度一品の宮の御心地の程に侍ひ給へるに、優れ給へる驗物し給ひけりと見給ひてより、こよなう尊び給ひて、今少し深き契くはへ給ひてければ、重々しうおはする殿の、かくわざとおはしたる事と、もて騒ぎ聞え給ふ。御物語などこまやかにしておはすれば、御湯漬など参り給ふ。少し人々静まりぬるに、小野のわたり知り給へる宿や侍る」と問ひ給へば、しか侍り。いと異様なる所になむ、某が母なる朽尼の侍るを、京にはかくしき住處も侍らぬうちに、かくて籠り侍る間は、夜中、曉にもあひ訪らはむと思ひ給へおきて侍る」など申し給ふ。そのわたりには、只近き頃ほひまで人多う住み侍りけるを、今はいと幽かにこそなりゆくめれ」など宣ひて、今少し近う居寄りて、忍びやかに、いと浮きたる心地もし侍り。また尋ね聞えむにつけては、いかなりける事にかと、心得す思されぬべきに、方々憚られ侍れど、かの山里に、知るべき人の隠るへて侍るやうに聞き侍りしを、たしか

知るべき人……浮舟をさす。たしかにてこそは……それが確かならこそ、どんな様子でなとも口を切つてお尋ねが出来ませう、さもなくてはどうかと考へて居りますうちに。
 御弟子になりて……その者が貴僧の弟子になつて、貴僧が戒をお授けなされたと。
 こゝに失ひたる……私が行方不明にしたやうに悪言をいひかける人がありますよ。をばは歎辭。
 只人と見えざりし……平人とは見えなかつた浮舟の様子だつたよ。忽ちに形を……咄嗟に浮舟の飾をおろして尼にしたことよ。
 答へ聞えむやう……どう御返事したらと勤考された。
 かばかり心得給ひて……これ程浮舟が忍んでゐることを承知されて尋ね探されようなら。
 中々あらがひ隠さむに……却て抗辯して隠さうなら具合が悪からう。
 とばかり……ちやつと。
 内々に怪しみ思ひ……私が密かに不思議に思つてゐましたあの方の事でせうか、お尋ねの人はと。
 彼處に侍る尼ども……小野に居ります母老尼や妹尼達。
 勞氣……所勞、いたづき。

にてこそは、いかなる様にてなども漏らし聞えぬ、など思ひ給ふる程に、御弟子になりて、忌む事など受け給ひてけりと聞き侍るはまことか。また年も若く、親などもありし人なれば、こゝに失ひたるやうに、卿言かくる人なむ侍るを」など宣ふ。
 僧都、さればよ、只人と見えざりし人の様ぞかし、かくまで宣ふは、輕しく思されざりける人にこそあめれと思ふに、法師といひながら、心もなく忽ちに形を寢しけること、胸潰れて、答へ聞えむやう思ひまはさる。たしかに聞き給へるにこそあめれ、かばかり心得給ひて、窺ひ尋ね給はむに、隠れあるべきことにもあらず、中々あらがひ隠さむにあいなかるべしなど、とばかり思ひえて、いかなりける事にか侍りけむと、この月頃内々に怪しみ思ひ給ふる人の御事にや」とて、彼處に侍る尼どもの、長谷に願侍りて詣でて歸りける道に、宇治の院といふ所にとゞまりて侍りけるに、「母の尼の、勞氣俄におこりて、痛くなむ煩ふ」と、告げに人のまうで來たりしかば、まかり向ひたりしに、

まかり向ひたりしに一向ふへ行つた處が。まづ怪しき事なむ……取敢はず變な事に出合ひました。浮舟を發見した願末をさす。死にかへるゝ死に迫ること。この人も母老尼ばかりか、この浮舟も。魂殿に置きたりけむ人……古小説に魂殿に置いた死人が動き出した話でもあつたと見える。魂殿は埋葬前に一時假に棺を置く處。驗ある者どもを……祈禱の利き目のある僧達を横川から呼寄せて代る代る祈禱をさせなど。某は惜しむべき齡……母尼は高齡で惜しい程の年でもないが、私はその旅先での重病をどうか助けて臨終の念佛をも正念に勤めさせたいと、一圖に佛にお頼り申してゐたうちに、浮舟の容體は委しく見ませんでした。事の心事情を。欺き率て奉り……浮舟をたぶらかしお連れ出し申したのだらうかと伺ひました。助けて……浮舟を。三月ばかりは……四五六の三箇月ほどは。

「まづ怪しき事なむ」とさゝめきて、親の死にかへるをばさし置きて、もて扱ひ歎きてなむ侍りし。この人も亡くなり給へる様ながら、流石に息は通ひておはしければ、昔物語に、魂殿に置きたりけむ人のたとひを思ひ出でて、さやうなる事にやと珍しがり侍りて、弟子ばらの中に驗ある者どもを呼び寄せつゝ、代りくゝに加持させせなどなむし侍りける。某は、惜しむべき齡ならねど、母の旅の空にて病おもきを助けて、念佛をも心亂れさせせむと、佛を念じ奉り思う給へし程に、その人の有様、委しくも見給へずなむ侍りし。事の心推し量り思ひ給ふるに、天狗木靈などやうのものゝ、欺き率て奉りたりけるにや、となむ承はりし。助けて京にゐて奉りて後も、三月ばかりは、亡き人のやうにてなむ物し給ひけるを、某が妹、故衛門の督の北の方にて侍りしが、尼になりて侍るなむ、一人もちて侍りし女子を失ひて後、月日は多く隔て侍りしかど、かなしびに堪へず、歎き思ひ給へ侍るに、同じ年の程と見ゆる人の、かく容貌いとうるはしく清らなるを見出で

同じ年の程と見ゆる人の、同年配と思はれる浮舟が。觀音の賜へると……初瀬の觀音様が死んだ娘の代りに下されたものと。この人いたづらに……この浮舟を死なせまいと。いみじき事どもを……えらい事などを頼み込まれたので。坂本に自ら……西坂本の小野に私自身下山して息災の加持など致しましたので。人となり……正氣の人となり。猶この領じたりける……矢張あの取憑いた物怪が體から離れない氣がする。この悪しき物の妨……この悪い物怪の邪魔から逃れて後生の安樂をも願ひたい。即ち出家してこれらの功德を得たいとの意。まことに出家……授戒だけでなく、本當に尼にしたのであります。いかでか空に……どうして當り無しに氣が付きませうかい。世語りにも……世間話の種にもしてよささうでしたが、評判が立つて面倒の起る事があるかも知れぬと。さてこそあなれ……薫は浮舟がさうして生きてゐると聞きはすつて、か程まで穿鑿し出された事だけ

奉りて、觀音の賜へると喜び思ひて、この人いたづらになし奉らじと感ひ苛られて、泣く泣くいみじき事どもを申されしかば、後になむかの坂本に自ら下り侍りて、護身など仕うまつりしに、やうく息出でて人となり給へりけれど、猶この領じたりける物の、身に離れぬ心地なむする。この悪しき物の妨げを逃れて、後の世をも思はむなど、悲しげに宜ふ事どもの侍りしかば、法師にては勧めも申しつべき事にごそはとて、まことに出家せしめ奉りてしに侍り、更に知しめすべき事とは、いかでか空にさとり侍らむ。珍しき事の様にもあるを、世語りにもし侍りぬべかりしかど、聞ありて煩はしかるべき事にもこそと、この老人共のとかく申して、この月頃音無くて侍りつるになむと申し給へば、さてこそあなれとほの聞きて、かくまでも問ひ出で給へることなれど、むげに亡き人と思ひはてにし人を、さは實にあるにこそはと思すほど、夢の心地して淺ましければ、つゝみもあへず涙ぐまれ給ひぬるを、猶僧都の恥かしげなるに、かくまで見ゆべき事かはと

かくまで見ゆべき……から女々しい程にまで見られてはならぬと、薫は平氣な風を作るけれど、薫かく思しける事を……薫が浮舟をこんなに深く思つてゐたのを、現世では死人も同様な尼にしたことよと、僧都は失策した氣がして、さるべき前の世の……さうした前世の約束事です。思ふにたかき家の……浮舟は多分身分あるお家の子でおありでせう。はふれ給ひ……流浪なされたのでせうか。

なま王家流……一寸した貴族方の系統といはれる筋目でしたらう。わかんは王家(ワカ)の音便。流(トホリ)は血統。

こゝにも元より……私も元來特別に愛した譯でもありません。物はかなくて……一寸した事で逢初めたのではあります。零ちあふるべき際と……流浪しても構はぬ程の者とは思ひませんでしたのを。

罪かろめて物す……出家は當人の罪を軽くする事です。大層よい事と、安心に私は存じます。母なる人……浮舟の實母中將の君。月頃隠させ給ひける……このちう秘密にして置かれた小野の尼君の本

思ひ返して、つれなくもてなし給へど、かく思しける事を、この世に亡き人と同じやうになしたる事と、過ちしたる心地して、罪深ければ、悪しきものに領せられ給ひけむも、さるべき前の世の契なり。思ふにたかき家の子にこそ物し給ひけめ。いかなる過ちにて、かくまではふれ給ひけむにか」と問ひ申し給へば、なま王家流といふべき筋にやありけむ。こゝにも元よりわざと思ひし事にも侍らず、物はかなく見付けそめては侍りしかど、又いとかくまで零ちあふるべき際とは思ひ給へざりしを、珍かに跡もなく消え失せにしかば、身を投げたるにやなど、様々に疑多くて、たしかなる事はえ聞き侍らざりつるになむ。罪かろめて物すなれば、いとよしと心安くなむ、自らは思ひ給へなりぬるを、母なる人なむ、いみじく戀ひ悲しぶなるを、かくなむ聞き出でたりと、告げ知らせまほしく侍れど、月頃隠させ給ひける本意違ふやうに、物騒がしくや侍らむ。親子の中の思絶えず、悲しびに堪へで、訪らひ物しなどし侍りなむかし」など宣ひて、さていと便なき

意が通らぬやうに、さぞ騒動致しますでせう。

訪らひ物し……實母が浮舟を見舞に來などしませうわ。

いと便なきしるべ……甚だ厄介な手引だとはお考へでも、あの西坂本の小野に下山して下さい。

かばかり聞きて……これだけ聞込んでそれでよいわと等閑に抛つては置かれぬ人です。今だに語り合はせむ。浮舟とせめて只今でも話し合つて見たい。形を變へ……浮舟は姿を尼に變へ世を捨てましたとは思はれるが、あやしき心。色慾の心。

いとほしう罪得ぬべき……薫の執心に絆されて浮舟が色めいた心でも起すことであらうわと。

心亂れぬ……僧都が。

まかり下りむこと……下山致しますこととは。

月立ちての程に……月がかはつた時分に御案内を申上げませう。

心もとなけれど……待遠ではあるが、直々とうちつけに……一圖にと早速にせかれようのも。

かの兄人の童……浮舟の弟小君。兄人はこゝでは兄弟の意。

その人の近きゆかり……浮舟の近い

しるべとは思すとも、かの坂本におり給へ。かばかり聞きて、なのおに思ひ過すべくは侍らざりし人なるを、夢のやうなる事どもも、今だに語り合はせむとなむ思ひ給ふる」と宣ふ氣色、いとあはれと思ひ給へれば、形を變へ世を背きにきと覺えたれど、髮鬚を剃りたる法師だに、あやしき心は失せぬもあなり、まして女の御身はいかゝあらむ、いとほしう罪得ぬべき業にもあるべきかなと、あぢきなく心亂れぬ。

「まかり下りむこと、今日明日はさほり侍り。月立ちての程に、御消息を申させ侍らむ」と申し給ふ。いと心もとなけれど、直々とうちつけに苛られむも、様悪しければ、さらばとて歸り給ふ。

かの兄人の童、御供にゐておはしたりけり。異兄弟どもよりは容貌も清げなるを、呼び出で給ひて、これなむその人の近きゆかりなるを、これをつつ物せむ。御文一くだり賜へ。その人とはなくて、只尋ね聞ゆる人なむある、とばかりの心を知らせ給へ」と宣へば、某、このしるべにて、必ず罪得侍りなむ。事の有様は委しく取り申しつ。今は只

縁者であるのでこの者を浮舟の處へ一寸使に遣りませう、貴僧の添手紙を一本下さいませ。その人とはなくて……誰ともなしに只尋ねる人があるとだけの趣を、浮舟に知らせして下さい。某のしるべにて……私はこの一件の手引で陀度破戒の罪を得ることです、既に浮舟に就いての事情は委しくお話し申しました、もうこれからは御自身小野の庵にお立寄なされて、然るべきやうなされるのに何の差支がございませう。罪得ぬべき……貴僧が破戒の罪を得る手引をしたとお考へになるのが、私に取つては極りが悪いのです。こゝには俗の形にて……手前は在俗の姿で只今まで暮して居ますのが、頗る不思議な位です。思ふ志……出家の志。三條の宮……母女三の宮。頼もしげなき……頼みがひもない私の身一つを力に思召されるのが切難しに……思召されて、世事に關はつてゐますうちに。身の掬も……自身の處置も思ひ通りにはなりかねなどして。思ひながら……出家を思立ちながら。え去らぬ事……據ない事。さも侍らぬ……佛道に疎い形でもあり

御自ら立ち寄らせ給ひて、あるべからむ事は物せさせ給はむに、何の咎か侍らむと申し給へば、うち笑ひ給ひて、「罪得ぬべきしるべと思ひなし給ふらむこそ恥かしけれ。こゝには俗の形にて今まで過すなむいとあやしき。いはけなかりしより、思ふ志深く侍るを、三條の宮の心細げにて、頼もしげなき身一つをよすがに思したるが、去りがたき絆に覺え侍りて、かゝづらひ侍りつる程に、自ら位などいふ事も高くなり、身の掬も心になひ難くなどして、思ひながら過ぎ侍るには、又え去らぬ事ども數のみ添ひつゝ、過せど、公私に遁れがたき事につけてこそさも侍らぬ。さらでは佛の制し給ふ方のことを、僅にも聞き及ばむことは、いかであやまたじと慎みて、心のうちは聖に劣り侍らぬものを、ましていとほかなき事につけてしも、重き罪得べき事は、などてか思ひ給へむ。更にあるまじき事に侍り、疑ひ思すまじ。只いとほしき親の思などを、聞き明らかめ侍らむばかりなむ、嬉しう心安かるべき」など、昔より深かりし方の心掬語り給ふ。僧都もげにとうな

ませう。佛の制し給ふ方の……佛が戒められた筋の事は、少しでも開きはすつた點は決して犯すまいと。聖……淨行の清僧。いとほかなき事に……ごく詰らぬ事に就いても重き佛罰を受けさうな事は何で考へませう。浮舟の尼を墮落させるやうな事はせぬの意。只いとほしき親の……只氣の毒な浮舟の母親の歎などを、浮舟の存否を問ひ質して晴して遣らうといふだけの事で、私は嬉しく満足するのです。いと尊き事……有難い佛道の事。中宿もいと……僧都の坊に一泊するうはの好都合だけれど。うはの空にて……どちら付かずの心持で泊るのでは、矢張具合が悪からう。これにつけて……僧都がこの子を譽められた詞の尾につけて薫が、但この句薫の詞と見て下に續け、この子に話しての意とも解される。まづほのめかし給へ……取敢へず浮舟にお手紙を遣つて下さい。文書きて……僧都が。時々は山に……折々はこの横川に来てお遊ばなさい、何の所縁もないやうにはお考のならぬ理由もあり

づきて、いと尊き事など聞え給ふ程に、日も暮れぬれば、中宿もいとよかりぬべけれど、うはの空にて物したらむこそ、なほ便なかるべれと、思ひ煩ひて歸り給ふに、この兄人の童を、僧都目とめて褒め給ふ。これにつけて、まづほのめかし給へ」と聞え給へば、文書きて取らせ給ふ。時々は山におはして遊び給へよ。すぐろなるやうには思すまじき故もありけり」とうち語らひ給ふ。この子は心も得ねど、文取りて御供に出づ。坂本になれば、御前の人々すこし立ちあがれて、忍びやかにを」と宣ふ。小野には、いと深く繁りたる青葉の山に向ひて、紛るゝことなく、遺水の螢ばかりを、昔おぼゆる慰めに、ながめ居給へるに、例の遙に見やらるゝ谷の軒端より、前驅心ことに追ひて、いと多うともしたる火の、のどかならぬ光を見ると、尼君達も端に出で居たり。「誰がおはしますにかあらむ。御前などいと多くこそ見ゆれ。晝彼方にひきぼし奉れたりつる返事に、大將殿おはしまして、御饗應の事俄にするを、

ますわい。僧都が小君に、暗に姉の浮舟をわが弟子にした縁を仄めかした。
立ちあがれ引別れ。
忍びやかにを―ををは歎辭。
紛ることなく…浮舟は氣の紛れる事もなく。
昔おぼゆる慰め…もと宇治で見た網代の篝火がはりの慰めとして、浮舟は詠めてゐたのに。
多うともしたる火の……澤山燃した松明の入亂れた光を。
誰がおはします……どなたがお通りなさるのか知らん。
御前―先供。
彼方にひきぼし……僧都の處にひきぼしを上げた御返事に。ひきぼしは海藻の干した物で食料にする。大將殿―薫。
いとよき折……ひきぼしを頂いたの御をとこ―夫。
この世遠く―浮世離れがして。實にさにやあらむ―本當に薫かも知れぬ。
時々かゝる山路……薫が折々こんな様な山路を分けて宇治の邸に來られた時、ひどく耳についたお供の隨身の聲もひたと混つて聞える。今は何にすべき……今となつては何

いとよき折」とこそありつれ。大將殿とは、この女二の宮の御をとこにやおはしつらむなどいふも、いとこの世遠く田舎びにたりや。實にさにやあらむ、時々かゝる山路分けおはせし時、いと著かりし隨身の聲も、うちつけに混りて聞ゆ。月日の過ぎ行くまゝに、昔の事かく思ひ忘れぬも、今は何にすべき事ぞと心愛ければ、阿彌陀佛に思ひ紛らはして、いとゞ物もいはで居たり。横川に通ふ人のみなむ、このわたりには近き便なりける。かの殿は、この子をやがて遣らむと思しけれど、人目多くて便なければ、殿に歸り給ひて、又の日殊更にぞ出だし立て給ふ。睦ましく思す人の、事々しからぬ二三人ばかり送りにて、昔も常に遣はし、隨身添へ給へり。人聞かぬまに呼び寄せ給ひて、あこが失せにし妹の顔は覺ゆや。今は世になき人と思ひ果てにしを、いとたしかにこそ物し給ふなれ。疎き人には聞かせじと思ふを、いきて尋ねよ。母にはまだしきにいふな、中々驚き騒がむ程に、知るまじき人も知りなむ。その親の御思のいとほしきにこそ、かくも尋ぬれ」と、ま

の役に立つことかと、浮舟は情けないので。
阿彌陀佛に思ひ……念佛に氣を紛らして。
横川に通ふ……横川へ通る人だけが、この小野には一番近い浮世便りであつた。
かの殿―薫。
この子をやがて……この小君を途中からすぐに小野に遣らうと。
又の日殊更にぞ―翌日悪々。
出だし立て……小君を。
送りにて―見送り役にして。
昔も常に……以前も浮舟の許に何時も使にやつた。
人聞かぬまに……人の氣付かぬ暇に薫は小君を呼寄せて。
あこが失せにし……行方不明になつたお前の兄弟(浮舟)の顔はわかるか。實は姉だけれども兄弟の意で妹といつた。
いとたしかにこそ……現に間違もななく生きて居られるのだ。
まだしきにいふな―早まつて話すな。中々驚き騒がむ……話すと母は驚いて騒ぎ立てるので、却て餘計な人も知るだらう。
その親の御思の……その實母の歎きが氣の毒さにき、かうまでして尋ね捜すのだよ。



この君一浮舟。かく宣へば一薫がこんな深切に仰しやつて下さるので。彼處には一小野の庵には。あぢきなく却りて……浮舟を出家させた事が、功德の事ながら却て埒もなく気が引けましてねえ。姫君一浮舟。自ら聞えさすべき事も一自身直接に申上ぐべき事も。此方へもて渡り……妹尼は浮舟の部屋に僧都の手紙をもつてきて浮舟にお見せ申すと。物の聞えあるにやと一自分の事が世間に知れたのかと。恨みられむを……妹尼に不足をいはれることを浮舟は考へるので。なほ宣はせよ一矢張本當の事を仰つしやい。山より僧都の……横川から僧都様の案内で参つた方がある。さはたしかなる……それは間違もない薫からの手紙だらう。此方にと……こちらにお遣入り下さいと取次にはせると。圓座さし出で……簾の内からお客の敷物を出したので、うわらふだ一は葦蓋の義、その形によつて圓座と書く。

だきにいと口固め給ふを、幼き心地にも、兄弟は多かれど、この君の容貌をば似るものなしと思ひ沁みたりしに、亡せ給ひにけりと聞き、いと悲しと思ひ渡るに、かく宣へば、いと嬉しきにも涙の落つるを、恥かしと思ひて、紛らはしに、小君を、と荒らかに聞え居たり。彼處にはまだつとめて、僧都の御許より、僧都ノ文夜べ大將殿の御使にて、小君やまうで給へりし、事のこゝろ承はりしに、あぢきなく却りて臆し侍りてなむ」と、姫君に聞え給へ。自ら聞えさすべき事も多かれど、今日明日過して侍ふべし」と書き給へり。これは何事ぞと尼君驚きて、此方へもて渡りて見せ奉り給へば、面うち赤みて、物の聞えあるにやと苦しう、物隠ししけると恨みられむを思ひ續くるに、答へむ方なくて居給へるに、尼君なほ宣はせよ。心憂く思し隔つること」と、いみじく恨みて、事の心を知らねば、あわたゞしきまで思ひ居たる程に、特女山より僧都の御消息にて参りたる人なむある」といひ入れたり。怪しけれど、これこそは、さはたしかなる御消息ならめとて、「此方に」といはせた

かやうにては侍ふまじく……こんな、他人行儀の取扱で置かれぬ筈に、僧都は仰しやいましたつけ。名書き給へり一僧都が署名してある。あらじなど……入道の姫君など確かに自分の素性を認めて敬意を表した書方だから、浮舟はいえ違ひますなどいひ争ひやうもない。誇りかならず一出過ぎない。いとうたて……さう引込んでいらつしやるのは甚だいやな。御文見れば……妹尼が。今朝こゝに……今朝この横川に薫が入らしたつて。この文は昨日僧都が小君に書いて遣つたものゆゑ、今朝とある。却りては佛の責……功德の爲の出家が却て人情に背いて佛罰を蒙ることとなるのを。もとの御契……昔の縁を遣へず、薫と夫婦の語ひして、その愛着の念を満足させて。一日の出家の……僅一日の出家でも功德は無量だから、矢張それを力になさい。ことごとくには一委細は。紛ふべくも……僧都の手紙には間違へやうもなく薫の愛人といふことを明らかに書かれたが。この君は一この使の小君は。

れば、いと清げにしめやかなる童の、えならずさうぞきたるぞ歩み來たる。圓座さし出でたれば、すだれ簾のもとについ居て、かやうにては侍ふまじくこそは、僧都は宣ひしか」といへば、尼君ぞ答へなどし給ふ。文取り入れて見れば、「入道の姫君の御方に、山より」とて、名書き給へり。「あらじ」などあらがふべきやうもなし。いとほしたなく覺えて、いよいよ奥の方に引き入られて、人に顔も見合はせ給はず。常も誇りかならず物し給ふ人柄なれど、尼いとうたて心憂し」などいひて、僧都の御文見れば、「今朝こゝに大將殿の物し給ひて、御有様尋ね問ひ給ふに、初よりありしやう委しく聞え侍りぬ。御志深かりける御中を背き給ひて、あやしき山賤のなかに出家し給へること、却りては佛の責添ふべき事なるをなむ、承はり驚き侍る。いかゞはせむ。もとの御契あやまち給はで、愛執の罪をはるかし聞え給ひて、一日の出家の功德は量なきものなれば、猶頼ませ給へとなむ。ことごとくには自ら侍ひて申し侍らむ。かつくこの小君聞え給ひてむ」と書いたり。

外様に向きて……浮舟が。今はと世を……今が最期と死を思つた夕暮。おなじ所にて……同じ家に住んで暮した時は。いとさがなく……ひどく根性がわるく、いやに高ぶつて。母のいと……母親が大層可愛がつて。少しおよずけし……少し大きくなつたにつけて、互に抱いてゐた子供心を思出すにも。これを見るに……小君を見るにつけ。少しうち覺え給へる……浮舟と使の童との顔が多少似て居る氣もするの、妹尼は。世にある者……この世に生きてゐる者。あやしき様に面變り……變な風に顔變りがして、ひよつと面會するの、もきまりが恐いと浮舟は思ふので。尼になつた故。とばかり……暫時。思しなすらむ……小君のお考へなさるの。げに隔ありとも……以下浮舟が妹尼に向つての詞。淺ましかりけむ有様は……物怪にけ取られたあの膽の潰れた有様は。現心……正氣。紀の守とか……紀伊守とかいつた人が世間話をした中に。

紛ふべくもあらず書き明らめ給へれど、異人は心も得ず。この君は誰にかおはすらむ。猶いと心憂し。今さへかくあながちに隔てさせ給ふ」と責められて、少し外様に向きて見給へば、この子は、今はと世を思ひなりし夕暮にも、いと戀しく思ひし人なりけり。おなじ所にて見し程は、いとさがなくあやにくに傲りて、憎かりしかど、母のいとかなしくして、宇治にも時々率ておはせしかば、少しおよずけしまゝに、かたみに思へりし童心を思ひ出づるにも、夢のやうなり。まづ母の有様はと問はまほしく、異人々の上は、自らやうく聞けど、親のおはすらむ様は、ほのかにもえ聞かずかした、中々これを見るにいと悲しくて、ほろ／＼と泣かれぬ。いとをかしげにて、少しうち覺え給へる心地もすれば、御兄弟にこそおはすめれ。聞えまほしく思す事もあらむ、内に入れ奉らむ」といふを、何か、今は世にある者とは思はざらむに、あやしき様に面變りして、ふと見えむも恥かした思へば、とばかりためらひて、げに隔ありとも思しなすらむが苦しさに、物もいはれ

見しあたり……自分の知つてゐるあたり。只一人物し給ひし人……母親のこと。いかでと……何卒逢ひたいと一方ならず思つてゐたのを。童の顔は……その使の童の顔は小さい折見た氣がするにつけ。かの人……母親。僧都の宣へる人……薫のこと。構へて僻事なり……どうなりともして、私の生きてゐたといふことは間違だつたといひ觸して。聖といふ中にも……清僧の聖さんの中でも餘り真正直でお出なさるから、屹度醜味にはお話はなされようことかい。なのめに輕々しき……薰大將はい、加減な輕い御身分でもおありなからず、とても嘘で隠すことは出来なひなど妹尼はがや、いつて。皆いひ合はせて……皆が相談して。入れたり……御使の小君を。さは聞きつれど……浮舟のゐるとは聞いたが。まだ侍る御文……僧都の、外に別にまだあります手紙を是非にお目に懸けませう。これは薫の手紙。僧都の御しるべ……僧都様の御案内では、此處に姉浮舟のゐることは確かなのを、かう餘所……しいの

でなむ。淺ましかりけむ有様は、珍かなる事と見給ひてけむを、さて現心も失せ、魂などいふらむ物も、あらぬ様になりけるにやあらむ、いかにもいかに、過ぎにし方の事を、我ながら更にえ思ひ出でぬに、紀の守とかありし人の、世の物語すめりし中になむ、見しあたりの事にやと、ほのかに思ひ出でらるゝ事ある心地せし。その後、とざまかうざまに思ひ續くれど、更にはかくしくも覺えぬに、只一人物し給ひし人の、いかでと疎ならず思ひたしめりしを、まだや世におはすらむと、そればかりなむ、心に離れず悲しき折々侍るに、今日見れば、童の顔は、小さくて見し心地するにも、いと忍び難けれど、今更にかゝる人にも、ありとは知られで止みなむとなむ思ひ侍る。かの人もし世に物し給はば、それ一人になむ對面せまほしく思ひ侍る。この僧都の宣へる人などには、更にありと知られ奉らじとこそ思ひ侍れ。構へて僻事なりけりと聞えなして、もて隠し給へ」と宣へば、いと難いことかな。僧都の御心は、聖といふ中にも、あまり限なく物し給へ

が心外です。そ、や、お、それよ。御文御覽すべき人、薫のお手紙を拜見すべき人、浮舟をさす。顯證の人なむ……門外漢には何の事か合點がゆきませんから、その事情を矢張お話し下さい。かゝる御しるべに頼み……こんな手引にお頼みなさるだけの譯もありませう。

思し隔て……浮舟が私に心を置いて、はつきりとせぬお取扱では。この御文を……薫様がこの手紙を浮舟におかき手渡して上げいと仰しやつたのを、どうぞして差上げたものです。

いと道理なり……小君の怒も尤だ。流石にむくつけき……出家したとはいへ、流石に情合のない嫌なお心ですと、妹尼は浮舟を説得して、おし寄せ……浮舟を。あれ、我れの古言。

他人には似ぬ……やはり浮舟と思はれるので。ありしながらの御手……昔の通りの薫の筆蹟で。

世づかぬまで……世間並でない程。例の物めで……何時もの珍しがり屋の出過ぎ者は、誰をさすともない。

ば、まさに残いては聞え給ひてむや。後に隠れあらじ。なのめに輕々しき御程にもおはしませす。などいひ騒ぎて、「世に知らず心強くおはしますこと」など、皆いひ合はせて、母屋のきはに几帳立て、入れたり。この子もさは聞きつれど、幼ければ、ふといひ寄らむも慎ましけれど、小君「まだ侍る御文いかで奉らむ。僧都の御しるべにはたしかなるを、かく覺束なく侍るこそ」と、伏目にていへば、尼君「そ、や、あなうつくし」などいひて、「御文御覽すべき人は、こゝに物せさせ給ふめり。顯證の人なむ、いかなることにかと心得がたく侍るを、なほ宜はせよ。幼き御程なれど、かゝる御しるべに頼み聞え給ふやうもあらむ」などいへど、小君「思し隔て、おぼくしくもてなさせ給ふには、何事をか聞え侍らむ。疎く思しなりにければ、聞ゆべき事も侍らず。只この御文を、人傳ならで奉れ」とて侍りつる、いかで奉らむ」といへば、いと道理なり。猶いとかくうたてなおはせそ。流石にむくつけき御心にこそ」と聞え動かして、几帳のもとにおし寄せ奉りたれば、あれにもあらで

更に聞えむ方なく……一向いひやうもない貴女の不都合なお心をば僧都様に免じて、今はどうぞあの歎かはずかつた頃の昔話をなりともしたいと急がれる私の心が、我ながら非難されるのです、まして他人の目には苦々しい事です。

法の師と……横川の僧都を佛道の師として、分け入る山道を心當りにして、思ひもかけぬ小野の山に踏迷ふことよとの意。佛の教を尋ねて悟もせず、却てとんでもない戀の道に迷ふの意を含めた。

この人……小君。こゝには行方なき……手前の處では失踪した貴女の形見として。その人にもあらぬ様を……以前の人も見えない自分の尼姿を、思はず小君に見付けられ噂にされよう時のさま悪きなどを。

世づかぬ御有様……世馴れない御態度よと、妹尼は介抱しかねた。ためらひて休養して。少し静まりてや……少し気が落着いてから、この薫様のお手紙の趣なども了解のいく時もありせう。なほ持て参り給ひね、この手紙は矢張このまゝ持つてお歸りなさい。所違へにも……身に覺えの薄いことだから、もしお門違ひのお手紙で

居給へるけはひ、他人には似ぬ心地すれば、そこ許に寄りて奉りつ。小君「御返り疾く賜はりて参りなむ」と、かく疎々しきを心愛しと思ひて急ぐ。尼君御文ひき解きて見せ奉る。ありしながらの御手にて、紙の香など、例の世づかぬまで沁みたり。ほのかに見て、例の物めでのさし過ぎ人、いとあり難くをかしと思ふべし。薫ノ文「更に聞えむ方なく、様々に罪おもき御心をば、僧都に思ひ宥し聞えて、今はいかで淺ましかりし世の夢語りをだにと急がる、心の、我ながらもどかしきになむ。まして人目はいかに」と、書きも遣り給はず。

薫「法の師とたづぬる道をしるべにて
おもはぬ山にふみ惑ふかな

この人は見や忘れ給ひぬらむ。こゝには行方なき御形見に見るものにてなむ」などと細やかなり。かくつぶくと書き給へる様の、紛らはさむ方なきに、さりとてその人にもあらぬ様を、思ひの外に見付けられ聞えたらむ程の、はしたなさなどを思ひ亂れて、いと晴れ

でもあると。餘りけしからぬは……餘り無茶な
はお世話する人達が申譯がありま
せん。顔も引き入れて一浮舟は顔も衾に引
込めて。
あるじ一妹尼。
この君一小君。
物の氣にて……物怪に病んで入らつ
しやるのでせう。尼姿になつてゐ
るのをいふ。
歎き侍りしも著く一歎いた通り果し
て。
心苦しき御事……お氣の毒な事など
のあつたのを、さし當つて薫様
對して甚だ勿體なく思ひます。
うちはへー長引いて。
いと々かゝる事どもにーいよーあ
んな色々な出来事の爲に。
と聞ゆーと小君に話す。
所につけて……小野の山家相應の興
ある馳走などしたが。
幼き心地は一幼い小君の心持は。
そこはかとなく……何がなしに落着
かない氣がして。
わざと奉れさせ……薫様が特別に私
を便に遣はされたしるしとして、
歸つて何を申上げるべきでせうか
その土産になる事がありませぬ。

しからぬ心は、いひ遣るべき方もなし。流石にうち泣きてひれ伏し給
へれば、いと世づかぬ御有様かなと見頼ひぬ。いかに聞えむなど責め
られて、心地のかき亂るやうにし侍る程ためらひて、今聞えむ。昔の
事思ひ出づれど、更に覺ゆる事なく、怪しういかなりける夢にかとの
み、心も得ずなむ。少し靜まりてや、この御文なども見知らるゝ事もあ
らむ。今日はなほ持て参り給ひね。所違へにもあらむに、いとかたは
ら痛かるべし」とて、廣げながら、尼君にさし遣り給へれば、いと見苦
しき御事かな。餘りけしからぬは、見奉る人々罪さり所なかるべし
などいひ騒ぐも、いとうたて聞きにくゝ覺ゆれば、顔も引き入れて臥
し給へり。
あるじぞ、この君に物語すこし聞えて、物の氣にておはすらむ。例の
様に見え給ふ折なく惱みわたり給ひて、御形も異になり給へるを、尋
ね聞え給ふ人あらば、いと煩はしかるべき御事と、見奉り歎き侍りし
も著く、かくいとあはれに心苦しき御事どもの侍りけるを、今なむ

只一言でよいから姉様は仰しやつ
て下さい。
移し語れども一取次いでいふけれど。
只かく覺束なき……仕方がないから
只かう浮舟様の煮え切らない御意
度を申上げたらいでせう。
雲の遙に……さう大した遠方といふ
程でもありませんから、よし嵐が
吹くとしましても又是非こゝにお
立寄り下さい。「雲の遙に」は雲は
空遙にあるもの故諭へていつた。
居暮さむも一長居しようのもの。
人知れずゆかしき……心の中にゆか
しく思つた姉の有様をも、何
いっしかと待ち……薫は小君を、何
時歸ることかと待遠にしてみられ
たが。
たど／＼しくて一話がしつかり届か
ないで。
すさまじく中々なりと一面白からず
生中便りしなければよかつたと。
人の隠しすゑたる……或は誰か浮
舟を小野に隠して置いたのではあ
るまいかと。
わが御心の……薫自身のお推察が行
渡らぬ處もなく。
おとし置き給へりし……昔て浮舟を
宇治の山莊に暫く捨て、置いた經
験から、そんな様な廻り氣な推量
をなされたとき。

いと辱なく思ひ侍る。口頃も心地うちへ惱ませ給ふめるを、いと々
かゝる事どもに思し亂るゝにや、常よりも物覚えさせ給はぬ様にて
なむ」と聞ゆ。所につけてをかしき響などしたれど、幼き心地は、そこ
はかとなくあわてたる心地して、「わざと奉れさせ給へるしるしに、何
事をか聞えさせむとすらむ。只一言を宣はせよかし」などいへば、
「げに」などいひて、かくなむと移し語れども、物も宣はねばかひなく
て、「只かく覺束なき御有様を聞えさせ給ふべきな」めり。雲の遙に
隔たらぬ程にも侍るめるを、山風吹くとも、又も必ず立ち寄せ給ひ
なむかし」といへば、すゝろに居暮さむも怪しかるべければ、歸りなむ
とす。人知れずゆかしき御有様をも、え見すなりぬるを、おぼつか
なく口惜しくて、心ゆかすながら参りぬ。いっしかと待ちおはするに、
かくたど／＼しくて歸り來たれば、すさまじく中々なりと、思すこと
様々にて、人の隠しすゑたるにやあらむと、わが御心の思ひ寄らぬ限
なく、おとし置き給へりし習ひにとぞ。

定本源氏物語新解 大尾

手

枕

本居宣長作

山路の露

傳世尊寺伊行作

△手枕は、六條御息所へ源氏の君の通ふ場面を主として書いたもので、空蟬の巻と夕顔の巻との間を補うたものである。蓋し本文ではこの兩者の關係の成立に就いての記載が缺けてゐる。作者は本居宣長で、寶曆十三年に脱稿、寛政三年に刊行したものである。

△山路の露は、夢の浮橋の奥を書き繼いだもの、専ら薫君及び母北方と浮舟との交渉を主として書いてある。作者は世尊寺伊行といひ傳へてある。伊行は鎌倉初期のこの物語の研究者で、「奥入」といふ小註の著者である。山路の露は繪入源氏その他の古刊本に附刻されてある。

手 枕

前坊と聞えしは上の御兄弟におはしまし、を、御世の初より坊に居給、大方の御覺はさるものにて、うちの御有様はた、いとあはれにやむごとなく思ほしかはし給ひ、世の人もいとかしこき儲の君とたのみ所に仰ぎ聞えさせつ、行末めでたく飽かぬ事なき御身を、いかなる御心にか物し給ひむ、世をあぢきなきものに思ほし取りて、常はいかでかう苦しく所狭き身ならで、生ける世の限り、心やすくのどやかに、思ふこと残さず心のゆく業して明し暮す業もがな、とのみ思し渡りける程に、遂に御本意のごと春宮をも辭し聞えさせ給ひて、六條京極わたりになむ住み給ひける。大方宮の造りざまは更にもいはず、前裁など心ばへある様に木ぶかく植ゑ渡し、池の心廣く水いさぎよく遣りなしなど、よろづ心に、さる方にをかしく今めかしき宮の有様になむありける。

坊におはしまし時、その頃の大い大臣の嫡妻腹に、いと二なくかしづき立て給ひし御女、本意ありて参り給ひける、御志淺からず、あはれなる御中らひにて、一筋にまめやかなる御契深かりし程に、いと清らに美しけなる女宮をなむ生み奉り給ひける。二所、限なくあはれなるものに思ひ聞えさせ給ひつ、明暮の御かしづき種に

て、月日を過し給ひける程に、この宮の四つになり給ひし年の秋、はかなき御心地のやうにて、父宮俄に薨れさせ給ひぬ。まだ盛の御齡にて、かう俄にあへなき御事を、おほやけにもいみじうあたらしう思し召し歎き、世の中の人も惜しみ聞えさせぬなし。まいて御息所の御心惑ひ、只何事も思ほし召されず、來し方行く先かきくれて、淺ましう思し惑ふも道理なり。年頃二つなき御契をかたみに又なく頼みかはし給ひつゝ、片時にても後れ奉りては、世にあらむものとも思さゝりしかど、限ある道は御心にも叶はぬ業にて、え慕ひ聞えさせ給はぬぞ、口惜しういふかひなきや。いはけなき人は何心もなくされありき給ふを見給ふも、いとゞしき御心の催しにて、なか／＼の忍び草なめり。およすけもておはする月日に添へても、乾る世なく思しなけく程に、うち續き父大臣さへ失せ給ひぬれば、いとゞたづきなく物心細くのみ思すにも、わが身一つは今とはともかくてもありなむ、惜しけなき容貌を變して、世離れたる山里にゆき隠れても自らあり經むと思し取るにも、只この若宮の御行末後めたう、かく頼もしき人々に後れ聞えさせ給ひて、はか／＼しき御後見などもなかななるに、我さへ見奉りすてなば、いかにしてかは人並々にも生ひ出で給はむとすらむと、いみじう心苦しき御絆にて、すがすがしくもえ思し立たれず、見譲る人なくて残しとゞめ奉らむことをのみ、いみじう思ほしたゆたひつゝ、年月も重なり行くに、ある限の女房達なども、この御心ばへのあり難く哀れなるにかけとゞめられ奉りて、をさをさまかんで散るもなく、大方の有様は昔に變ることもなけれど、自ら事に觸れては心細く、寄るべなき心

地し給ひて、あはれなる事も多かりけり。折節の花紅葉を見給ふにつけても、色をも香をもおなじ心に見はやし給ひし昔の事のみ、盡きせず思し出でらるゝにも、姫宮の御様容貌のなごめに飽かぬ事なく美しうあらまほしうなりまさり給ふを、憂き世の御慰めにて明し暮させ給ふ。御心に入れて御手習させ奉り、御琴教へ聞え給ひなどしつゝ、いかで何事もいふかひなからす生ふし立ててむと、心殊に思ほし掬て給へれば、侍ふ人々も心遣ひいたくして、よろづ心にくき宮の内なりけり。内裏にも故宮の御事を忘れさせ給はず、あはれに思し召し出でつゝ、折々の御訪らひ絶えずぞありける。源氏の君にも、一前坊の御息所のあはれに詠め給ふらむを、折は訪らひ物せよかし」など宣ひつけしかば、けに心に、由ある人と、前々も聞きおき給ひしあたりの事なれば、且はゆかしく思されて、一日内裏よりまかんで給ふとて、夕つけておはしけり。程遠ければ暮れはて、ぞおはしつきぬる。御門のもとに御車立てさせて、御隨身入れて案内せさせ給ふ程、少しさし出でて見入れ給へば、木立いと物古りて、小暗く見え渡るけはひ、しめやかに、心に、思ひ遣られ給ふに、その事とも聞え分かれぬ程の物の音、松風に響きあひて、絶え／＼聞えくるもあはれになまめかしく、並々ならぬ爪音と聞きなし給ふにも、御心ときめきして、何事も世に名高く物し給へば、違ふべくもあらぬ御息所の御琴の音と、御耳とゞめて聞きおはします。内には俄なる程の御訪らひに、人々そゝやと慌てつゝ、さゝめき騒ぐ程に、御琴は弾きさし給ひつゝ、なか／＼なる程をと、君は口惜しう思す。隨身出でぬれば、御車よりおり給ひて、いたう

心懸想しつゝ、引き繕ひうちふるまひて歩み入り給ふ御様、似るものなくめでたく、あてになまめかしう匂ひ満ちたるに、いと輝かしう恥かしくて、とみに出で来る人もなければ、階の下に佇みてうち詠めおはさうす。いと久しくして、中將の君といふ出でて、「思ひ給へかけぬ程の御訪らひにて、何事もいとかたはら痛く辱なき業になむ」とて、御褥さし出づる業などいたう馴れたり。いでや前々も参り侍りて、御有様も承はらまほしうは思ひ給へ立ちながら、よろづ思ひ給へつゝ、みてなむ、志の程をも今まで、え御覽せさせ侍らざりし。上も常に故宮の御事をのみ、明暮忘れさせ給はず、この御有様の心苦しうあはれなること、宣ひ出でつゝ、姫宮のいかに美しう生ひ出で給ひぬらむなど、御志淺からぬ様など、大方の御訪らひいとこまやかにて、かく参りそめ侍りぬれば、又のどかにを」とて、その夜はすくよかにて出で給ひぬ。

かくふりはへ渡らせ給ふ御志を、いかゞは淺く思し召されむ。かくて後は折々の御消息絶えず、又御自らもまうで給ひなどする程に、よろづ見勝りのみせられて、飽くまで故々しく、重りかによしある御けはひに、いとど御心のみとまりて、年頃よそに思ひ遣りつゝ、聞えて過ぎぬる事さへ悔しくぞ思されける。折々はをかしきなほざり言などうち出でさればみ、御文にも氣色ばましき事もうち交りゆくに、あはれなる御志の程は嬉しく思さるゝ物から、かううるさき御心のうち添ひぬる事を、いと心づきなく疎ましく思されて、御返りもをさをさなきに、いよく御心苛られて、御消息うち頻り、惟光など下りたち参り通ひつゝ、まめやかなる様にも心

寄せ仕うまつり給ふこと二年ばかりにもなりぬれば、女君の御心にも、さこそいへ、やう／＼よろづ思ひ知られ給ひつゝ、いと氣疎けにはあらず、折節のあはればかりは過ぎず、懐かしう聞え通ひ給ふ。なけの御筆づかひ言の葉も、いひ知らずなまめかしう、御手などあてに氣高く、見所ありて書き流し給へるを、稀々見給ふにも、あり難くうち置き難く思されつゝ、はかなき木草につけても、あはれと御心とまりぬべき折を過ぎず、心ふかき様を見え聞え給へど、女君は懐かしからむ情もいとゞあひなく思されて、人傳の御答はしたなからぬ程にてやみなむと思し取りつる御心は、更にゆるぐべうもあらざりけり。年返りて春たつ風にも、人の御心はうち解けがたく、情なさのみまさり行く。人の御程を思すにも、いと辱なくいとほしくて、え強ひても聞えおもむけ給はず、とざまかうさまに思ほし亂れつゝ、いとゞこの頃は、大殿には夜離のみおきつゝ、騒がれ給ふ。内わたりのどやかなる春の徒然に、雨さへ降り暮して日もいと永きに、いとゞ思ひわび給ひては、「春のものとして」などうちうめかれて、

「うき人に見せばや袖のなみだ川」

今日のながめにまさる深さを」

今宵も大殿には待ち聞え給ふを、引きよぎて彼處にぞ渡り給ふ。いたく忍び給へば、御前驅なども殊になく、うち寢してぞおはしける。例の中將出でて御消息きこえ傳ふ。いとかう度々辱なく渡らせ給ふこと、年頃あ

り難き御志の程は、あさましきまで思ひ給へ知りぬれど、今宵は亂り心地の堪へがたうて、端近うもえ身じろぎ侍らねば、自らはえ聞えさせぬを、少しよろしき折も侍らば、年頃の畏まりものどかに聞えさせ侍らむ」と聞え出だし給ひて、對面し給はむ事はいとあるまじう思したり。「心憂くも」と聞え給ひて、この御簾の前にのみかくて侍ふこそ、いと辛き業なりけれ。數ならねど淺からぬ志も、年頃といふばかりなりにて侍れば、さりとて御覽じ知るらむを、その程の勞數へさせ給はば、かう物遠うのみもてなさせ給ふべき事にやは。人傳ならで只「あはれ」とばかり宣はせばなむ、深き憂へも慰み侍りぬべきを、はしたなくか、る事は、まだ習はずこそ侍れ。心苦しく承はる御心地の御訪らひも、人傳ならず聞えさせむを」とて、御簾ひき着て半ら入り給ふ。人けに簀子はかたはら痛うもと思ひ扱ひて、入れ奉りぬ。女君は端近うまだ御格子も參らで、雨雲の晴れ間の月のあはれにうち霞みて艶なる空を、詠め出だしておはする程なりけり。とかうか、づらひ入りつ、障子の許に忍び寄り給ひて、いとかうしめやかなる夜の様に、思ふこともうち出でば、人もよもあはれと思しぬべき折かなと思すに、立ち歸らむ心地もし給はず、

「今宵だにあはれはかけよ明日はよも

長らふべくもあらぬ玉の緒

戀ひ死なば永くや人を」と、獨言のやうに宣ふけはひのいと氣近きに、女君はむくつけうなりぬれど、流石に

よそながらも年頃聞え馴れ給ひぬれば、むけに知らぬ人の入り來たらむやうに、氣疎くすゝろはしくなどはあらねばにや、

「我にしもあやななかけそ絶えぬべき

みだれやよそのあだの玉の緒

かごとがましや」と、忍びやかに宣ふともなきも、いかにいひつるぞとかたはら痛くて、やをらづつ引き入り給ふけはひなれば、障子をやをらおし開けてるざり寄りつ、御衣の裾をひきとめて、辱なけれど御耳馴れぬる年月も重なりぬらむを、などかう疎々しく餘所にはもて離れ給はむ。自ら聞し召し合はするやうも侍りなむ、世の常のうちつけに心淺くすきくしき筋は、更に思ひかけ侍らず。御許されなからむ程は、これよりおほけなき心は、更にく使ひ侍らじ。只かくながら徒らに朽ちはてなむ歎の程を、片端聞えさせむとばかりになむ」とて、いとどのどやかに様よくもて靜めて、こゝら思ふ心の忍び難くなりぬる様を、いとよう聞え知らせ給ふ御けはひの、いひ知らず懐かしうあてになまめかしきに、女もあはれと思し知る節々なきにしもはたあらぬを、かうあやにくなる御氣色に、え心強うもてなし給はず。風冷やかにうち吹きて夜いたう更けゆく程、御格子もさながらにて、晴れゆく月影もはしたなきやうなれば、御傍なる短き几帳をさし隔て、假初なるやうにて添ひ臥し給へり。人々はかうなりけりと氣色とりて、皆さし退きて還う臥しぬ。いとかく遁れがたき宿

世の程を、女君はいみじう心憂く口惜しう思し沁みて、あり／＼て今更に若々しく似氣なき事を、侍ふ人々の思ふらむ程も、死ぬばかりわりなく恥かしう、且は人の物いひも隠れなき世に、淡つけく軽々しき名や洩り出でむと、とかく思し亂れつゝ、只猛き事とは、御涙にくれ惑ひてうち解けぬ御氣色を、心苦しう見給ひて、疎ならず契り慰め給ふこと多かるべし。いとゞしき春の夜のならひ、いとほかなくて明方近くなりぬるに、入方の月いと心ほそく霞みたり。

「かはずまもはかなき夢の手枕に

なごりかすめる春の夜の月

いかゞ御覽する」と聞え給へば、

「おほろけの身のうさならば春の夜の

かすめる月もともに見ましを」

とて、御衣ひき被きて見も遣り給はぬを、こまやかに懐かしう語らひおきて、出で給ふとて、なほ御容貌もゆかしければ、「あはれなる程の空の氣色も、おなじ心に御覽せばなむ、いみじき心惑ひも、少しは思ひのどむるやうも侍らましを、あまり埋もれいたき業になむ」とて、せちに端近くいざなひ聞え給ふも、いとわりなく恥かしけれど、少しるざり出で給ふに、明けゆく空もあやしくはしたなくて、とかく紛らはし給へる御もてなし

など、飽くまで用意あり、あてにらうたけなり。心にくき程の明方の月影に、御髪のごほれかゝりたる傍目など、いはむ方なく、あなめでたと見ゆるにも、いとゞ御心とまりて、なほ出でがてにやすらひ給ふ程、御供の人々聲つくり立ち騒ぎて、「明けはて侍りぬ」とそゝのかし立つるも心あわたゞしく、憎くさへ思さるれど、あながちにつゝ、ましく思し沁みにし御心の程もいとほしく、且はわが御爲にもかたはならむと思し返して、あらはならぬ程の明けぐれの空の霞の紛れに、立ち隠れて出で給ふとぞ。

山路の露

これはかの光源氏の御末の、薰大将と聞えし御あたりの事なれば、その續きめいたるこそ、いとかたはら痛うつゝましけれど、ゆめくさには侍らす。只かの小野の里人に尋ね逢ひたりし有様、此方彼方の御氣色くはしう見ける人の、夢のやうなる御中のあはれに忍びがたく覺えけるまゝに、何となく筆のすさみに書き置き侍る、その人、心にもさこそ人にはもらさゞりけむを、假初なる旅の空にて、主さへはかなくなりければ、あだなる人のその行末を弔らはむとて、藻鹽草かき集めける漫ろ言ども、皆えり出でて、經の紙に漉かせけるついでにこれを見つけ、何の聞所ある節もなければども、果いかならむと思ひ渡る人の行方なりけると見るばかりの、せめてをかしさに、残し置きけるにやあらむ。

かのはかなかりし蜻蛉の行方、ほのかに聞きつけ給ひてし後は、いかなりし事ごと、御心にかゝらぬ折なくて、ありし兄人の童をば、その後も度々遣はしき。されど只おなじ様に、初々しくてのみ歸り参れば、なか／＼御心の亂れにて、昔今様々に書き連ね思し續くるに、いと物あはれなり。故大君をなめならず深く思ひしめ聞えて、折々忍び難うなり行きしを、さりと人もうちゆるび給ふ隙ありなむと、のどかに待ち渡りしに、あへな

く見なし聞えてし悲しさは、世を換へても忘れ難き慰めに、人の國にありけむ香の煙だに得まほしきに、いみじう思ひよそへられて、懐かしかりし容貌有様、只それかと見ゆる折々のありしなど、いと戀しう思し出でらるゝにも、なぞ怪しの心や、今しもなど苦しきまで覺ゆらむと、わが心ながらあやにくに、思ひ知られ給ふ。と様かう様に思し靜むれど、猶いかなるにか、ひたすらなきになしつる年月は、いふかひなき方にてさてもあられつるを、かく聞きつけては夢か現かとも聞え合はせざらむは、いと胸痛う心にかゝり給へば、自ら忍びておはせむ事を思す。今日は内裏の御物忌あく日にて参り給ふとて、いと清らにさうぞきて、女宮の御方に渡り給へれば、萩の御衣に紫苑色の小桂など、なまめかしう著なし給ひて、添ひ臥し給へる御様いとめでたう、御髮の透ふ筋なく靡きかゝりたる末端のそぎ目など、美しく見え給ふにも、かのはかなかりし人は、け近く愛敬づきたる方は、勝りてさへ思ひ出でられ給ふ。髪など盛りに美しかりしも、削ぎやしつらむ様よなど、只その頃はこれのみ心にかゝり給へば、我ながら憂しと思ひし方はいかになりにつむと怪しければ、元より淺くはあらざりし御思の、思はずなりし一節にこそ、いかにぞや心置きぬべう思ひなり給ひしか、あやなく消え失せ給ひしあはれは、なのめに思ひ醒まし難きを、流石様々につけて人を見給ふにも、昔より思ひ沁みにし心のねぢけがましさにや、一つゆかりのみあり難く思し給ふ。宮のうへはなほ様殊なる睦にて、彼も頼めかはし給へれども、年月の添ふまゝに、かたみに重々しくなり勝り給へば、さのみ昔語に夜更し給ふ事は、ありしばかりだに

あらず、けざやかなり。いと憂む方なく、昔を忘れ給はぬまゝに、自らかよへる面影も、などかなからむと、猶懲りすまに心にききあたりをば、さりけなくて氣色ばみ給ふ折々あれど、姥捨山にのみ覺え給ひつゝ、この人ばかり似けなからぬ形代も、あり難き世なりけりと思すに、かうあやにくなるにや、片へは又過ぎにし方悔しき御辭添ふこともあらむかし。

小野には猶たゆみなく行に心入れて、年経たる尼君達にも稍立ち勝りて、深き方の心後れをも悟り給へれば、猶さるべき御事にこそと、尼君もいとあはれに見きこえて、僧都の下り給へるに、かくなど宣へば、とばかりうち領きて、いとあり難う物し給ふ事にこそ。大將殿の御有様は、つきなき法師ばらなどだに、馴れ聞えまほしう見奉るに、さばかり淺からぬ御志に尋ね思したるに、女の御身には、悔い思す御心必ず出できなむと、あいなう思ひ給へ歎かれ侍るに、御心亂れ給はざる、いとめでたき御事なり。三世の諸佛もいかに憐み給ふらむなど、事々しく宣ひなすに、いと恥かしう、奥に向ひ居給へる御様、若くをかしけにて、猶かゝる方に寔し給ふべき御身かとはと、尼君などは實の親めいて、引き隠し涙ぐまれ給ふ。今は初つ方のやうに、さのみも結ほはれ給はず、過ぎにし夢の浮橋などの風に絶えはてて、衣の裏の珠顯れむのみ涼しう覺え給ふにも、今はた里の知るべとも思ひ知られ給ふ。秋深くなり行くまゝに、風の音月の光にも、いとしくあはれ添ひつゝ、長き夜はさらでだに寢覺がちなるを、まして柴の戸叩く嵐の音、妻戀ひ渡る鹿の音に、夢を結ばむ方だになき

まゝに、流石思ひ出で給ふこと多かる中にも、朝夕いかで人並々にもと思ひ給へりし親にも、そのかひなう物をのみ明暮思はせ聞えて、自ら心ゆきぬべかりし刻にしも、あとはかなくなりしよ、いかに思ひ給ひけむと、猶盡きせず悲しう覺ゆ。かくてこそありけれと、風の傳にも聞かれ奉らむは、いと淺ましう憂かるべう、思ひし人にさへ、残なく聞かれ奉りぬるを、せめて身の憂さのあふべきならむといと口惜しう、さらば永かりける命のしるしに、母君に今一度逢ひ見まほしう覺えながら、猶この山道分くる御使にも、さし出で見えむことはつつましうて、言傳てやらむ言の葉も覺えず、結ほほれてのみ過し給ふ。さるは初めより、この子は事の心知りためるを、などか母君には聞えざらむなど、怪しく覺束なし。大將の君日頃すこし煩ひ給ひけるを、母宮など思し騒ぎて、いと物騒がしかりける紛れに、彼處の事もおほつかなくて、日頃になりぬ。よろづこちたき御祈の驗にや、異なる事なくおこたり給ひぬれど、なほ名殘惱ましき様にことつけ給ひて、いづくにも御ありきなどはし給はず。のどやかなる晝つ方、わが御方に詠め臥し給へるに、かのゆかりの童參れり。近く召し寄せて、惱ましうしつる程は、人目繁うむつかしうて、この行方知らねばいといふせきにも、只今これよりすぐに行けよ。この度だにも初々しく返り來なば、いみじういふかひなからむ」とて、御文給はり、駒うち早めて急ぎけれども、日開けて出でたりければ、山陰暗うなる程にぞ行き著きぬる。彼處には例の紛る、方なく詠め給ふ程なるに、彼方より人來て、尼君にかくなどさゝめき聞ゆれば、思ひがけぬ程にもと驚き給ひて、尼君自ら

ら聞え給へ。事々しかるべき人にもおはせざるを、さのみ出だし放ち聞え給ひて、いかに物しと思すらむ」といとはしがりて、「淺ましう見る目に飽かぬ御つれなさなりや」と、口々にいふもいと苦しと思したり。まことには例の「此方に」といはせられたれば、あゆみ出でて、簀子の端つ方についるたり。尼君るざり出でて、尼君たびたびかう山道わけ給ふ御しるしなくてやと、古めかしきさし過ぎ心、とりくかたはら痛く思ひ聞え侍る。いかなるにか、誰にも見え知られ給はむ事を煩はしう覺えたれば、見奉り煩ひ侍る」と宣へば、小君この度定かなる御返りなくては、歸り參るまじうなむ承はり侍りつる」といふ様も、いとらうたけなり。尼君まめやかに聞え知らせて、しどけなげなるを引き直しなどし給ふ。猶いとつ、ましけれど、我が心にもけにかうまで尋ね給ふ程にては、遂に隠れなくて、母君など聞き給ひなば、我にかばかり隔てけりと思ひ給はむもいと苦しきに、さながらむ先にほのめかしてばやと思ふ折々あれば、只我にもあらで居給へり。さらば宮にもとて、少將の尼導き入れて、人々はすべり隠れぬれば、いと嬉しうて、まづ御文さし置きて見聞ゆ。いとさゝやかにをかしける様昔ながらの面影つゆばかり違はぬものから、御髪などのありしにもあらぬを見るに、夢か何ぞと悲しくて、よよと泣き居たり、姫君もうち忘れつる昔の事ども、今更思し出でられて、まづ母君の行方問はまほしけれど、うち出で給ふべき言の葉も覺えず。とばかりためらひ給ひて、母君さても世になきものとなりしを、誰もくこそは思ひ給ひけめ。せめて憂き身の契にや、思ひの外に承へて、あらぬ世の心地してこそ明し暮しつれ。

自ら心地も静まるに添へて、まづ母君の御事なむ覺束なう悲しき」と宣ひもやらぬに、いと悲しくて、「おはしまさすなりにし後は、その御敷に心も違ひ、あやふく見え給ひしを、大將殿より様々慰め給ひて、北方まろなどまでもいとほしうせさせ給ふ御志の辱なさに慰めて、かけとめてたり」とこそ常に宣ふめれ。されど猶ほけて、ありし人にもあらず見え給ふ。かう聞き奉りし折、やがても聞えまほしう覺えしを、大將殿、「暫しは人に洩らすな」と、返すく宣ひしかば、え聞え侍らぬ」など、幼げにいひ居たり。「それなむいと口惜しき。かけても知られ奉らじと思ふを、いかにして聞き給ひけるにかと心憂きに、あらざりける様にも聞えなしてよ」と宣へば、いと難しと思へり。「只かく憂き様にても、母君に今一度逢ひ見奉らむと思ふ。これを忍びて傳へてよ」とて、几帳の側より文を取り出でてさし置き給へば、懐に引き入れて、「ありつる御返りなくては、いかに宣はせむ。只一くだりにても給はりて歸り侍らむ」といへば、「いととうたて、年月の程に思ひかはり給ひにけり。かくばかり憂き名を、あらぬ様にいひなして、もて隠さむとは思ひ給はずや」と恨みられて、強ひてもえいはず、伏し目なり。さしも言少なに心許なき御本性なれど、幼くより取りわき一つにてありし名残睦ましきにや、これにだに思ふこと少し續け給へる、いと哀なり。「今宵いかにして歸り給はむ」など、例のさし過ぎ人もいとほしがれば、尼君も「けにいかで、通ひ馴れぬる人だにも、猶踏み迷ひぬべき山道のかげ路に侍るめるを、今宵ばかりは旅寢し給へかし」といひ出だし給へれど、「急ぎ參るべく宣ひつるに、いかゞ泊りは侍るべき。月の光にも道

たどくしかるまじくなむ」とて立つを、さもおよすけてとうつくしみあへり。夜更けぬべき心設に、弓矢負ひたる者どももありければ、いと頼もしけなり。

夜中うち過ぐる程に參り著きたれば、御門も皆鎖されにけり。今宵はさらば出でなむと思へども、いづくへ行きたりけるぞなど尋ねられむもむつかし、この御言傳に、かくなど聞えてこそ、母君にもいはめと、らうくしき心にて、門叩かむも事あり顔なり、いかにせましと思ひ煩ひて、とばかり立ちたるに、人々の聲數多して、いみじう慌ただしけなるを、何事ならむと思ふ程もなく、火燃え出でて煙も滿ちくたり。只この町のまはりと見えて、いと近ければ淺ましくて、荒らかに叩かせたるに、宿直に侍ふ者ども、今ぞ見つけて騒ぎつゝ、急ぎ開けたるに、「小君なごは鎖されたる」といへば、「御物忌なりけるを思し忘れて、俄になむ固められ侍りつ」と答ふ。されどそのかひなし。侍所なりける男ども、皆起き出でて、「ゆゝしく疾く參り給へるものかな」といふも、いとをかしと思へり。この殿近しと聞きつけて、參り給ふ人々の馬車の音繁う、騒ぎ滿ちたり。火燃えまさりて怪しかりけれども、俄にあらぬ方へ風吹き追ひて、この殿をばよけたれば、おのく、「珍かなる事」と宣ひて片へはまかで給ひなす。いみじかりつれども程なく燃えとまりて、世の中静まりて、皆まかで散りなどして、名残なくしめやかなるに、君は明けゆく空をかしきに、渡殿に立ち出で見給ふとて、かの童召し寄せたり。「夜べは更くるまでこそ待ちしか。いつ程に物しつるぞと宣へば、小君ありつる紛れに參りつる」と聞ゆ。「い

かにぞ。例の同じいふせさならむと思ふこそかひなければ」と宣ふにも、「さしもあらぬ様に聞えなしてよ」とて、眞に憂しと思ひ給へりつる人の御面影、あはれに心苦しう思ひ出でられて、暫しためらばるれば、遂に隠れなからむもの故、事違ひては悪しかりなむと思ひて、ありつる様こまかに聞ゆ。日頃もさぞたしかに聞き給ひし事なれど、猶現とは思ひ給はぬに、けにとさて思ほすらむ、珍かに淺ましう思す。「あらぬ様にさへなり給ひにければ、その人ともなく面がはりして」と申せば、「疎ましけにやなり給ひし」と問ひ給へるに、只「ありしながら」などいふまゝに、涙の落つるを紛らはして俯伏したるを、いとあはれに見給ふ。さて、「その傳へよとあるらむ文は」と宣へば、取り出でたり。青鈍の紙いとさゝやかにおし巻きたるうはべより、あやしう物あはれなり。まして物の心ゆかしければ、開けて見給ふとて、「よからぬ人のあらむやうにもあるかな。我ながらなどかく屈しけむ」とほ、笑み給ひて、只ありしながらの手なれども、筆の行方も迷ひける程しるく見えて、墨付かれがれにて、

「厭ひつゝ捨てし命の消えやらで

ふたゝびおなじ憂き世にぞふる

迷はせしころの闇を思ふにも

まことの道は今ぞうれしき

とあるを見給ふに、いみじう悲し。とばかりためらひ給へる御袖の雫、所狭きまでなむ。ほのくくと明け行く空の光に、いふ由なう清らにて、物を深くあはれと思ひ給へる御氣色、いみじうなまめかしく見え給ふを、この子もいとめでたしとうちまもり聞えつゝ、かばかり思したるに、かひなき様になり給へるを、惜しうあたらしと思へり。「なほ暫し思ふやうなむある。いま今日過ぎて傳へさすべき」と宣ひて持給へり。「いと輕々し。さやうなりとも今忍びて物せむと思ふを、その心設して夕つ方參れ」と宣へば、いかに思さむと苦しけれど、さもえ聞えさせず、承はりて出でぬ。

暮れぬれば、いみじう忍び棄したる女車の様にておはすべし。山道になりてぞ御馬には乗り移り給ひける。夕霧たち籠めて道いとたどくしけれども、深き心をしるべにて急ぎ渡り給ふも、かつは怪しく、今はそのかひあるまじきをとせども、在りし世の夢語りをだに語り合はせまほしう、行く先急がる、御心地になむ。浮雲拂ふ四方の嵐に、月名残なう澄み上りて、千里の外まで思ひやらるゝ心地するに、いとゞ思し残すことあらじかし。山深くなるまゝに、道いと繁う露深ければ、御隨身いと棄したれど、流石につきくしく御前の露拂ふ様をかしく見ゆ。彼處は山の麓にいとさゝやかなる所なりけり。まづかの童を入れて案内見給へば、「此方の門だつ方は鎖して侍るめり。竹の垣は爲渡したる所に、通ふ道の侍るめり。只入らせ給へ。人影もし侍らす」と聞ゆれば、「暫し音なくてを」と宣ひて、我一人入り給ふ。小柴といふ物はかなくしなしたるも、同じ事なれど

いと懐かしく、よしある様なり。妻戸も開きて、まだ人の起きたるにやと見ゆれば、繁りたる前栽のもとより傳ひ寄りて、軒近き常磐木の所狭くひろがりたる下に、立ち隠れて見給へば、此方は佛の御前なるべし、名香の香いとしみ深く薫り出でて、只この端つ方に行ふ人あるにや、經の巻き返さるゝ音も、忍びやかに懐かしく聞えて、しめんと物哀なるに、何となくやがて御涙進む心地して、つくくと見る給へるに、とばかりありて行果てぬるにや、「いみじの月の光や」と獨りごちて、簾の端少し上げつゝ、月の顔をつくとと詠めたる傍目、昔ながらの面影ふと思し出でられて、いみじうあはれなるに、見給へば月は残なくさし入りたるに、鈍色香染などにや、袖口懐かしう見えて、額髪のゆらくとそぎ懸けられたるまみのわたり、いみじうなまめかしうをかしけにて、いゝらしもこそらうたけさ勝りて、忍び難うまもり居給へるに、猶とばかり詠め入りて、

「里わかぬ雲居の月の影のみや」

見し世の秋にかはらざるらむ」

と忍びやかに獨りごちて、涙ぐみたる様いみじうあはれなるに、まめ人もさのみはえ静め給はずやありけむ、

「ふる里の月は涙にかきくれて」

その夜ながらの影は見ざりき」

とて、ふと寄り給へるに、いと覺えなく化物などいふらむ物にこそとむくつけくて、奥様にひき入り給ふ袖を

ひき寄せ給ふまゝに、せき止め難き御氣色を、流石それと見知られ給ふは、いと恥かしう口惜しく覺えつゝ、ひたすらむくつけき物ならばいかゞはせむ、世にある者とも聞かれ奉りぬるをこそは、憂き事に思ひつゝ、いかであらざりけりと聞き直され奉らむと、と様かう様にあらまされつるを、通れ難く見顯され奉りぬると、せむ方なくて、涙のみ流れ出でつゝ、我にもあらぬ様いと哀れなり。憂きもつらさも、いづくを始めと語り盡し給はむ。「只あへなく聞きなしつる心の中は、なか／＼いふべき方なかりしを、程經て後に、怪しき様にさへ聞く事ありしに、いと心も亂れ勝りて、定めなき世の道理に思ひなしゝを、一方の歎きばかりにて、朝の雨夕べの雲とも詠めしは、よそふる方の名残もありしに、今一しほの思ひ添へて、更に永らふまじき心地なむせしを、又夢のやうなる事をまねぶ人のありし後は、いかでさる事あらむと、と様かう様に夢より夢に惑ひつゝ、合はする折ありなむやとのみ歎き過しつる心のうちを、片はしもいかで思し知らざらむ。思ひかね、あくがれ出づる山道の露けさを、佛神も憐み給ひけるにや、思ひの外にかばかりも聞えぬるは、かひなき命の永らへけるも、今なむ嬉しき」など、すべてまねぶべくもあらず宣ひ續くるに、流石あはれと聞き給ふ節もあれど、いひ出でむ方なくて、只うち泣き給へる様、おほどかにらうたけなり。「さりや、いとかく思し棄てたるなむつらき。昔より思ひ知りにし身なれども、深き心の色は、かうしも人はあらざりけると、我のみ思ひ知らるゝに、嗚滯なる恨も添ふにやあらむ」と宣ふに、憂かりし筋のこと、すこしかすめ給ふを聞くがいみじう恥かしくて、い

とゞいふべき言の葉も覚えねども、餘り覺束なからむも怪しかりぬべければ、

「永らへてあるにもあらぬ理をば」

只そのまゝの夢になしてよ」

ほのかに紛らはしたるも、昔に變らず懐かし。よろづ思ひ知りたるしるしにや、ありしよりも、もてなし用意心にくゝ、ねび勝りにたる心地して、昔の人にも猶よう覺えたるかなと見給ふに、いとゞしき御心うちなりかし。過ぎにし方の迷だに悔しきを、かつ見て後も強ひて夢になさむ事こそあるまじけれとて、

「思ひ出でて思ふだにこそ悲しけれ」

またや憂かりし夢になすべき」

けにいと心深く思し入りて、おしのごひ紛らはし給へる御様は、少し物思ひ知らむ人は、あはれ見過すやうはあらかし。かの御心はた昔に變らぬ懐かしさの、忍びがたう哀なるにも、我ならざらむ人はいとかうしも、僧都の諫にも憚らじかしと思し續くれど、内へだに入り給はず、様よく守り給ひて、盡させぬ事も懐かしう語らひ給ひつゝ、「猶かゝる御様なむ罪得ぬべき。などが今一度變らぬ様に逢ひ見むとは思さゞりける」と、流石ひき動かし給ふも苦しとのみ聞き給ふ。只かのむかひに、峯の松風に鹿の音響き添へたる程、すぐく聞き渡されて物悲しきに、詠むる庭の草叢は露のみ玉かと磨きつゝ、澄みゆく月は秋を愁へ顔なる蟲の聲など、取り

集めあはれを盡したる所の様なるに、世の常の稀なる中の往きあひだにも、多くあはれも添ひぬべきを、この世にはいかで夢にだに定かには見難かりし面影を、只それながら相向ひ給へるあはれは、いかでなのめならむ。又かゝる例あらかしと、絶えずおしのごひ給へる御袖の匂、この世の物とも覺えず、限なき月の光に、所柄いとゞいふ由なくなまめかしく見え給ふ。女もさこそいへ、思ひ知り給ひければ、大方は懐かしく心深く語らひ給ひながら、さこそあれ、なま心穢き方うち交ぜなどもし給はぬを、人には殊にあり難く思ひ知られつゝ、少しあはれも勝りけむかし。例の色めいたるさし過ぎ人どもは、姫君のうち解けたりつる御様を、「いかに見聞え給ふらむ。かゝりける御事どもに實に給ひてし事こそ、今更口惜しけれ」などいひて、そなたの通りの御格子ほそめて覗きければ、妻戸の御簾ひき著ておはすめり。指貫の裾ばかりほのかに見ゆるを、「いみじう艶なる御様かな、今様の人はかうしもあらぬものを、思ひやり深き御氣色こそ」などめで感ふも心づきなし。吹き過ぐる御追風などは、まして「うたてこの世の外ほかの心地こそすれ、佛のとひ給へる梅檀うめだんの薫も、今こそ思ひやらるれ」など、心も空にて、夜もすがら格子のもとに忍び佇みつゝ、「まだそのまゝにてこそおはすべかめれ。淺ましき御色の深さなりや」など、口々さゞめくも、けしからぬ思ひやり心なりかし。やうく明方近き心地すれば、出で給ひなむとて、「いとかう心ゆかす思し結ほほれたるこそ、憂き身の咎とがに思ひなせども、猶恐たけれ。昔よりかゝる方に進みにし心なれば、今しもあはれ添ひて、様ことなる睦むつまでも覺束なからぬ程に聞えまほし

きに、かばかり世離れたらぬ所に移ろはせ聞えむ。昔の山里は宮のおはせし世より、あはれに思ひしを、憂かりし後は、里の名をさへ啣^{くは}ちてこそ、ありしよりけに荒し果てにしか。さてもこの曉の空ばかり心盡しなる事まだ身に知られざりつる。夜深き露にしをれむ袖よ、いかゞ思し分けむ」とて、

「思ひやれ山路の露にそほちきて

また分けかへるあかつきの袖」

と愁へ給へる哀れさも、なほざりならむや。

「浮舟 つゆの深き山路を分けぬ人だにも

秋はならひの袖ぞしをる、」

「さりや、淺はかにも宣はすかな。まめやかに聞えさせむ。御返りなど、今は覺束なうなどもてなし給ふな。うたてあらむ」など、返すく宣ひて、はしたなからぬ程に急ぎ出で給ふ。いたく寔したる狩の御よそひも、いみじうなまめかしくをかしけにて、露けき草叢^{くさむら}を分け出で給ふ御様は、流石あはれと見給ふらむかし。つとめては、人々佛の御前のうち解け様^{とよ}いかなりけむと、今更めぐりて、寄る給へりし所の移り香などをめで騒ぎつ、「袖觸れし藤袴、あらぬ匂にこそしみ薫りにけれ」など、うたて事々しくいひあへるも、なま憎けれど、郡の人だに猶いと盡きせず、珍かなることにてめで聞ゆる御様なれば、まして何ばかりの事もなき壻の中將をの

み、山里の光に思ひあへる心どもには、おどろくしくめで聞え侍るも、道理なる方もありかし。姫君は何となくつゝましき心地して、いとゞ經^{きよ}にのみ紛らはして居給へるに、いつしか御文あり。例のとみにも見給はねば、尼君いと若々しき御様かなとて、引き解きて見せ聞え給ふ。標^{はらだ}の唐紙すくよかなるに、

「たち返りなほこそ惑へながき夜の

夢をうつゝに醒ましかねつ、

今朝はいとゞ心もほれまさり侍る。只聞えさせむ方なくなむ。今は物のあはれも殊に思し知るべき御様に、猶盡きせぬ御氣色こそ、なか／＼心清からず」と。うちつけに御返り聞えむは、猶いとつゝまじうて、思しもかけぬを、尼君、「いと思ひ限^{かぎ}なき御事になむ。かばかりまめやかなる様に聞え給ふめるに、却りてすき／＼しきやうにも思しなむ」など、いたく道理^{ことわり}をいひ聞かせられて、うち泣きつゝ、この御文の傍^{かたはら}に、

「そのまゝにまた我が魂^{たま}の身に添はで

夢かうつゝ、か分かれだにせず」

いと事なしびに書きて奉りつ。待ち見給ふ心には、あはれにのみ思しつゝ、様變りにたればとて、うちつけに殊更めきたる紙の色したるも、いかにぞや、事の様^{さま}に違^{たが}ひたらむ、たとひ艶なる薄^{うす}様の何ぞならむも、今は目につかぬ方ありなむを、何となき様に書き紛らはしたる程、かやうのつま／＼の心ばせは、昔もけしうはあら

す見えしをなど思しけり。

この後はありし文を遣はずとて、「喜びに堪へずもて騒がむ程、人も數多聞きなむと思ふこそ苦しけれ」と宣ふ。かの右近といひしは、侍従なども程なく後の宮に参りてければ、猶歎きほれつゝ、怪しき所に隠るへてありけるを聞き給ひて、あはれと思しつゝ、心様なども大人々しくよかりしものと見置き給ひければ、忍びて参るべく宣はせて、衣など遣はしたれば、いみじう喜びて参りけるを、もてなし有様、元より交らひ馴れたる人々にもこよなからねば、君も目安しと思しけり。かの夕顔の右近は、「煙と雲」と宣ひし御さし答へだにも心もとなけなりしを、これはいと若やかにて、憎からぬ様にして、さやうの方もつきなからずぞあめる。それにもこの夢のやうなる事をば、氣色をも見せ給はざりけるを、人繁からぬ程なれば、今ぞ召し寄せて、まほならねど宣ひ出でたるに、聞く人の心地何にかは譬へむ、思ひあきたる様、いと道理なり。「我も猶いかなりし事とも心得がたく覺ゆる。はじめは只ひたすら荒ましき水の音にのみ呷ちしを、怪しき様にて見つけ聞えたりける人は『只よからぬ木魂やうの物の仕業ならむ、その後もうち絶えて、久しく悩み給ひける』などいふなれば、年経たる所はさもありなむと思ふを、かの母君の許への消息には、我と世を厭ひ給ひけるが、思ひの外にさすらふる様に見ゆれば、いかなりける事にかと心得難き。猶その頃の有様見けむ人こそ、いかにも思ひ合はする方あるべけれ」と宣へば、右近「初より聞えさせしやうに、たゞ朝夕音のみ泣き給ひて、いみじう物を思しつゝ、たま〜

も起き居給ひては、後の世の罪輕みぬべき行をし給ひて、いかさまにして身を失はむと、泣き入り給ふ折々侍りし。迹はかなく見なし聞えてしのは、只疑なく水の底に入り給ひてけりとこそは、今までも思ひ聞え侍りつれ。かの卷數に書きつけ給へりしことなども、今はと世を思しなりにけるとなむ見え侍りしを、いかなりける御事にか」といひて、いみじう泣く。「筑波山はいかに思ひ惑はむ。餘り心治めざらむ程、いと物騒がしからむ。この子はいと奥なからぬ様したれど、猶もろ共にも行きて、事のやう委しくいひ散らすまじう、口固めてぞよかるべき。一人二人と思ふだに、世にある事は隠れなげなるを、數多へ洩りなば、官など聞きつけ給ひて、事ども出で來なば、今いと誰が爲も由なかるべきことを」と宣ふ。

やがて車ひき入れさせつゝ、急ぎ乗りて出づれば、御門少し遣り過ぐる程におしとめて、下りて、「かくなむと聞え給へ」といへば、入りてさなむといふに、「何か事々しき人めいて案内し給ふ。只此方へ」といへば、うち解けたる方へ入りぬ。玉の臺の目移し、いと品々しからぬ心地して。守も此處に居たる程なりけり。「思ひかけぬ程には、いかにしておはしたるにか。見る度に清けになり勝り給ふものかな。大將殿よろづにかくこのゆかりを思し數まへ給へる御志を見奉るにつけても、おはせましかば、さる方に心のどかにてこそ見聞えましをと思ふに、盡きせず悲しき」とてうち泣けば、守も、「この殿の御願みのよろづに辱なき、身の程にも過ぎたる御恵を喜び思ひ給ふる心深けれど、聞えさせむにつけても、恐れに思ひ給へつゝ、まれて、まかり過ぎ侍る。便宜

にはよき様に啓し給へ。これも只故姫君の御ゆかりに、せめての御情かけさせ給ふと見奉れば、かばかりその御光にあたるべしと思ひ聞えしと、辱なく侍る。ましておはせましかばいかにと、口惜しくなむ思ひ給へらる。大將殿に仕うまつり給へる御局までも、ありし人とも覺えず、いとこそやむごとなけれ」などいひ散らして立つめり。母君、守のかくいへば、亡き御影までも面正しく思ふべし。ありつる人々も、とかく行き隠れなどして、少ししめやかになりぬるに、近く寄りて、「忍びて聞えさすべき事侍りて参りぬる」といふに、何事ならむと騒ぎ給へば、「先づかゝる御物騒を諫め聞えさせむとてなむ。細かなる御事の心はこの小君こそ聞え給はめ」といへば、「いでや、あこのいふらむ事は、はかしくしからじ」といはれて、うちほ、笑みて、嗚漣がましと思へる氣色にて、御文取り出でて奉れば、怪しとて急ぎ開けたれども、うつたへに人の思ひ寄るべき事にあらねば、暫し心も得ず目ほりたるに、かはらぬ筆の跡は、見もて行くまゝに流石それと見なしぬる心地、なかなか何に譬へむ。こはいかなる事にかと倒れ伏しぬれば、思ひつる事と悲しくて、「かく思ひ惑はむ程に、人も數多聞きては悪しかりなむ。さりけなく思ひ静め給へ」と聞えさすべく宣はせつれば、かく参り侍りつる」など様々拵へられて、とばかり心惑を静めて起き上りつゝ、さてもこれは夢か何ぞとあきれ感へるさま、いと道理なり。初よりの事ども、幼けれどもいふかひなからず語りなせば、いみじう悲しくて、さし集ひつゝ、せきかねたり。まだ世にこそおはすなれ、今はいかで片時の間をも過ぎず見奉らむと、揉み焦がれ給ふも道理なり。さ

れども、「近き程にも侍らざなり。いづくとなくて俄に這ひ隠れさせ給ひなば、守も定めて尋ね聞え給はむすらむ。今日明日思しのどめて、例の初瀬詣など作りなし給ひて、明日ばかりにおはしまさなむはよかるべき」といへば、心にもあらずうち頷きながら、今はその程の心もとなさをば、いかすべからむとて、涙のみ零り落つる様いとほしけなり。よからぬなま御達は、まほならねど氣色見けれど、いかにしてかこの筋とは思ひ寄らむ。只いつとなきいやめさなれば、大將殿の思したる様の物語などに、いとしく取り返し思ひ惑ひ給ふと、をかしくも思ふべし。右近は「さらば彼處の御伴に必ず慕ひ聞えさせむ。後らかさせ給ひなば、いとなむくち惜しかるべき」と、返すく契り置きて参りぬれば、いひて慰むべき友だになきまゝに、この子をのみ纏はして、「猶思しけむ様委しく語れ。大將殿はいかと思したる」と問へば、「まろはかのあだに物宣ふことだになければ、ましてさばかり物思したるなむ、まだ見奉らざりつる。御袖もひき放たすいみじう泣い給ひしこそ、目もあやにありしか。御前の伏し喜び給ふには遙にまさりて思ひ聞ゆる」など、幼き心に任せていへば、さてくと流石にうち笑まれながら、それにつけてもかひなき様になり給ひにけるを、胸痛く口惜しと覺ゆ。さし過しし乳母も歎に堪へず病づきて、過ぎにし春の頃はかなくなりしを、今暫し永らへましかばと、あはれに思ひ出づ。

右近がいひしまゝに、初瀬詣のよし人々にもいひ聞かせて、宵より右近をば呼ばせて、曉はまだ夜を籠めて急

ぎ出づる。彼處にては、例のしるべの童をまづ入れて、かくと聞ゆれば、心騒ぎもせむ方なくて、まづうち泣かれ給ふ。尼君かひなくしき本性にて、さるべき所とかくひき繕ひなどして、入れ給へり。姫君にもかひなき墨染なれど、鮮やかなる御衣に奉り換へさす。「いとうたて、見まうき御袖の色かな。まして今いかに見つけ聞え給ひてむ。人の御心のうち思ひ遣るこそいみじけれ」とてうち泣き給ふ。けにいかばかりと思ふに、はしたなくて、え出でやり給はぬを、餘り心づきなきやうにや人も思ひ給はむ、と制しければ、中の障子口に几帳添へて、るざり出で給へり。母君のうち見るより心惑して、物も覚えねば、只咽せ返るばかりなり。いく程の年月も隔たらねど、ありしにもあらず衰へて、さしも清けに太り過ぎたりし人の、面變りするまでなりにけるを見給ふに、姫君の心のうち、只我ゆゑならむかしと、罪得がましく思し知られて、いみじう泣き給ふ。右近もよそにて思ひやり聞えつる悲しさは、物の數ならず、見奉るに目もくれて、此處にては今一しほ涙におほれ居たり。いと久しくなりぬれど、互にうち出で給ふ言の葉もなし。母君からうじてためらひつゝ、今までかくあるにもあらぬ様ながらも永らへ侍るは、不思議にてなむ。そのまゝに命絶えなましかば、今日はいかで見奉らむ。さればいかで風の傳にも、かくこそはとおほめかし給はざりける事のつらう悲しきに、今だに變らぬ御姿見奉らば慰みなむ。かくかひなき御様になり給ひにければ、いと心地も惑ひたる事」といひ續けて伏しまろび給へる、道理におき所なく、只涙にのみ咽びて、答へもし給はず。「初よりの事有様委しく聞かまほしき」と聞え

たれば、一けに今は疎ならぬはじめにこそとて、主の尼君對面し給へり。まれ人まづうち泣きつゝ、さてもいかにして御覽じつけさせ給へるにか。はかなき様に落ちあふるべかりけるを、かく取りとめさせ給ふ御情は、この世ひと方ならず、聞えさせむ方なく思ひ給へらるゝ」などいへば、初よりの事まほならぬ語り出でて、「四五月まではうち延へ現し人さまにも見え給はざりしかば、猶かひあるまじきなめるものゆゑ、目の前なる敷をや加へむと思ひ給へ敷きて、様々念じ聞えししるしにや、かく見奉る。佛神の御しるしと悦び給へつゝ、明暮の徒然慰めに見奉り扱ひながら、いつくにいかなりける御行方なりといふ事は、ほのかにも心得侍らす。折折『思し隔てたるにこそ』など聞ゆるにも、苦しと思しためれば、強ひても問ひ奉ること侍らで、かばかりめでたき御様なれば、たゞ人にては物し給はじと、煩はしくも思ひ給へしもしるく、尋ね聞えさせ給ふれば、かひなき御様も盡させず思ひ給へ敷き侍る」など宣ふに、いとうち泣きて、「おなじ儔なる人数多侍れど、これは様異に、をさなくより見譲る人なくて、朝夕はいかで人並々にも見なしてしがなと思ひ侍りしかひなく、うち棄て、骸をだにとめすなり給ひしかば、いかでか、別も目の前なるこそ、世の常の習にて侍れ。おほつかなさを添へて、思ひ敷き侍りし心のうち、たゞおし量らせ給へ。さばかりの志を知らぬ顔に、おなじ世ながら忍び過し給ひけるなむ、けに親の思ふ片端だになき事にこそ侍れと、つらう恨めしく思ひ侍る。かくはかなき身にては、まことに厭ひ棄て給ふも道理なれど、おなじくは變らぬ様ならましかばと、口惜しくなむ。されど

只一筋に亡き人とのみ思ひ侍りしを、かくて思の外に、再び對面しぬる喜びに、よろづは何かばと慰み侍る」
などかき口説き給へば、けにいかばかりかと、尼君も泣き給ひて、「大方の心地さわやぎて後も、明暮物をなむ
思し結ほほれて、晴れまなく悩み渡り給ひつゝ、様々宣ふことゝては、只かの筋をほのめかし給ひしかば、い
みじうあるまじき事に惜しみ聞えて過し侍りしを、然るべき事にや物し給ひけむ、見奉りそめし便もあれば、
御祈にも殊さら初瀬に思ひたち侍りし序に、みづからも忍びて唆かし聞えしかども、物憂げに思したりしかば、
後めたながらとゞめ置き聞えて詣で侍る折しも、兄弟なりし某の阿闍梨山より下りけるに、泣く／＼宣はせけ
れば、法師といふ中にも、あさましう生直なる人にて、聞き入れ奉りけるなむ、返す／＼見奉りしあへなさは、
更に心地も惑ひ、せむ方なく侍りしに、ましてこそはと悲しうおし量り聞ゆる。かの尋ね聞え給ふ人も、い
みじう淺からぬ御思なめりと見奉り侍るにも、猶この御有様は口惜しくこそ」など多くいひかはし給ふ。

右近はこの隙に近くさし寄りつゝ、「さてもいかなりし事にか」など聞ゆれば、「我ながら現とも覺えず、いみじ
く憂かりける」とて、絶えずうち泣き給へる氣色、いとあはれなり。さだすぎたる醜き人だに、かゝる様になり
ぬれば、こよなく若やぐものなめるを、まして只幼き兒の心地して、あえかに心苦しき方さへ添ひて、さばかり
こちたかりし御髪みげの短くそがれたれば、五重も過ぎて幾らともなく重なりたる程、すそのそぎ目のなか／＼い
とめでたきにも、又搔きくらし、右近「さはなどかくはなり給ひにけむ、見奉りし世に、かばかり様々疎ましき御心

づかひ思しかけむとは、夢にだに思ひ聞えやはせし。さも淺ましく忍び過させ給ひし御心かな。右近も幼くより
又なく頼み聞えさせて、いかなる道にも後れ奉らじと思ひ給へしかひなく、氣色だにかすめ聞えさせ給はざり
しつらさ」など聞えて、盡きせず泣き給ふたり。かの宮の御事も語り出でて、右近「いみじう人目見苦しきまで思し歎
くめりしに、程経れば例の御すき事ども聞え給ふさへこそ、あはれに侍れ。かの殿の譬しへなくのどかにぬる
きやうに見え給ひしかども、忘るゝ世なくあはれに思し入りつゝ、右近などまで尋ね數まへ給ふも、その御ゆ
かりと思しためるこそ、辱なく見奉り侍れ。のどやかなる折なく、近く召し寄せて、盡きせぬ御事のみ宣ひ出
でつゝ、右近「おはせし世には、覺束なかるものにこそ思しけめども、人はかく心長くやはある。いつとても心の色
はおなじ事なれど、大方絶ゆまじき身の癖は、こよなく淺き方にのみなむ、人目には見えける。今はいとかひ
なしや、誰か言とはむ。傳へ聞ゆる幻もあらば、さりともあはれとは思しなむかし」など語らはせ給ふ折々侍
るにも、けにこそあはれに見奉り侍りぬれ」など語り聞ゆれば、あはれにも恥かしうも、様々かき亂り思ひ積
け、移し心の色濃さは、さこそと聞き給ふに、なほ怪しや、目の前のあはれにならされ奉りて、少しも靡きけ
む心輕さのみぞ、いはむ方なく憂かりける、よしやそも、この世一つの報ならじ、人をば何か憂しと思ひ聞え
む、身の淡々しくさすらふべき契にてこそ、さる亂れもありけめと思ふには、只遁れ難き身の憂さぞ、世々の
報も口惜しく思ひ知られ給ひける。さてもひたすら世になき者と思ひはてけむ故里の人にあひ向ひて、又立ち

返りその世の有様聞きぬるは、夢語りなどの心地して、珍らかにあはれにも、いかゞ思さゞらむ。承らふる限は、流石かく誰にもやうく相見るを、今はとなりし夕べまで心苦しう思ひおきし乳母も、思ひに堪へずなくなりけむ命の程、あはれに悲しくぞ思しける。

客人も今宵は泊りぬれば、尼君の方より、ゆるある檜割籠やうの物、都には目馴れぬ菓子など、をかきし様に取りなして、此方に奉り給へり。うちもまどろまず、盡きせぬ物語に、長き夜も何ならず。明けぬれば歸りなむと、かたみに飽かず思ひ給ふ。道の程遙けさも、「おなじ世に侍らば、覺束なからぬ所へいかで渡し侍らむ。

昔かの時々隠ろへ給へりし怪しの宿は覺え給ふや。所はいと廣く侍れば、さりぬべき様に繕はせなして渡し聞えむと思ひ侍るを、大將殿のいみじう忍ぶべく宣へば、それもいかゞと憚られ侍るも、などか人の知るべき。忍びてこそはと思ひ給ふる」など泣くく聞ゆ。あるまじの事やとは聞き給ひながら、只うち泣き給ひて、「いぶせきはけになかくなるべけれども、かゝる様したる人は、わざとだに堪へぬべき山の奥を分け出でて、人目繁き住居はうたてあらむ」といひ紛らはして、うち背き給へる傍目、いひ知らずをかしけなるを、いとゞしく悲しと思へり。「都とても何かさのみ人目繁う侍らむ、殊更山里びて造らせ侍るべき」など、御心につくやうに聞えなすもあはれなり。様々なる絹綾など持たせたりける取り出でて、姫君の御料は更にもいはず、尼君にも所狭きまで奉りたれば、又なき身に喜び騒ぎて、物寂しき尼君どもなど、目醒めたる心地なむしける。右近もやが

て立ちとまらまほしく思ひたれども、「かばかり心細き住居に絶え籠りては、いかにして過さむ。いとあるまじきこと」と宣ひて、

「あらぬ世と思ひなしつる山の奥に
なにたづね来て袖ぬらすらむ」
と宣へば、

「たち返る名残だにかく悲しきに
永きわかれと思はましかば」
と聞えて、いみじう思へり。道すがら見るそのあたりの山さへ、幽かに遠うなるまゝに、いとゞ心細くて、彼處には又名残悲しくて詠め給ふ紛らはしに、君は例の後夜の行に心入れ給ふべし。

右近はその暮に殿へ参りたれば、例よりも人少なにしめやかにて、端つ方に御簾まき上げて、笛吹きささびつとおはします程なりける。御達と忍びて物いふけはひを聞きつけ給ひて、取りわき召し出でて、いかになど問ひ給へば、ありつる様淺からず聞えなして、かの「なに尋ね来て」と宣ひつる口すさみも語り聞ゆれば、けにさぞ思ふらむとあはれにて、うち涙ぐまれ給ふ。なかく變らぬ様ならば、かばかりも覺えずやあらむ、今はいとあはれに心苦しき方添ひて、御心にかゝらぬ折なかりけり。宮も内々に折ごとに、さばかりなる人もあり

難かめるをと思し出づる事は絶えねども、その筋ばかりの事はかけてもなし。本性露れ給ひし宮の君にも、程なく語らひ寄り給ひて、例の暫しは花やかに思したりしかども、今はさしもあらぬにや、對の御方をば猶盡きせずあはれなる事に思したれば、世人も心にくく思ふべし。大將君の御心しらひも、なほ絶え間なく、昔に變り給はぬを、あり難く思し知られけり。若宮のおよすけ給ふまゝに、いみじく美しうおはしますを、數多ならむだに、猶なべてには思ひ聞えぬべうもおはしまさぬを、程經れど外にはかゝる類なきを、いみじう思したれば、行末頼もしけなり。帝、後の宮などゆかしがらせ給へど、猶宮の御物恥若々しうて、參らせ奉り給はぬなるべし。まことや、大將君は左になり給ひて内大臣かけ給へれば、いと光添ひたる心地するに、過ぎにし頃より、宮例ならず惱ましうし給ひしを、御乳母達など見奉り知ることありて、男君にかくと聞えければ、さうさうしかりつるに、少しは嬉しと思しけり。母宮などはた更にもいはず、思し喜びて御祈ども何かと、今よりこちたし。

小野には只盡きせぬながめにて、冬にもなりにけり。都だに雪霰がちなれば、ましていとゞしくかき垂れ、消ぬが上にまた降り添ひつゝ、幾重が下に埋もる、峯の通ひ路を詠め出でたる夕暮、富士の嶺ならねど、雪の上より煙いと幽かにたなびくを、これやさば音に聞き來し山人の炭焼くならむと、心細さもいはむ方なし。

一住む人の宿をば埋つむ雪のうち

けぶりぞたえぬ小野の炭がま

例の掻きくらし、常よりも日數ふる頃は、いとゞ爪木樵る山人の跡さへ絶え果てたるに、わりなく分け入る御使の履の音も珍しくて、人々端つ方に出でて見る。「都にだにさへかきくらす頃の氣色に、いかにと思ひやり聞えてなむ。

いかばかり詠め侘ぶらむかきくらし

雪ふるころの小野のやま

けに振りはへ給へる折節も、あはれに思ひ知らるれば、少し心とゞめて、

一訪ふにこそあとをば見つけ白雪の

降りうづみたる峯のかよひ路

うち思ひけるまゝなるを、いとあはれと涙ぐまれて、うち置き難く見居給へり。さてもこれをいかにもてなままし、心づからの事といひながら、思ひ出なくて過ぎにし慰めにも、今だにさる方にてあらせまほしきを、人繁き住居は、彼も思ひ寄らざめり、けにはた人も思ひ許しぬべかりし古へだに、猶世の聞をつゝみてこそ、覚えぬ處に置きたりしか、今更もて出でなむ、人の物言もかたゞ怪しかりなむ、さりとてかの山深き住居に閉ぢ籠めはてなむも心苦しきを、いかにせまし、近きわたりの山里をさるべくしなして、忍びつゝ、渡してむなど、

心一つに思し設けながら、女官の御事を誰もく又なき事と思ひて、こちたき御祈ども、あたりくさるべき家司など、心の違なき頃なれば、折節あしくて、いさゝかの事も、世の音聞事々しくやなど思しやすらふこそ、猶懲りすまなる御心のどけさなれ。

暮れ行く年の名残なさは、いづくにも物騒がしう紛らはしき頃なれど、この御心一つにいとどかにて、山里人にも覺束なからぬ程に音づれ給ひつゝ、春を迎ふべき心設の物ども、様々こちたくて、右近が心しらひのやうにて、細かに思し遣りたれば、例のけざやかならぬ尼君達の心どもには、雪霰を分けたる御使の、あはれなる折節を過し給はぬよりも、これを深き御志のしるしに思ひいふを、正身はかたはら痛く聞きにくしと思ひ給へり。母君の許よりもよろづに思ひ到らぬ事なくて、尼君の方まで訪らひ聞ゆれば、まめやかに幽かなる身の便に、佛の導き給へるなりけりと、思ひ喜び給ふ。ましてはかなき下使などは、この御方の御徳といひ思ひて、まめに出入何やかやとしけるのどやかなる夕つ方、大將君は兵部卿の宮に参り給へれば、宮は只今なむ六條院に渡り給へるとあれば、對の御方へ参り給へれば、例の心にくき程にうちそよめきて、御褥さし出でたれば、「この御簾の内の内外よ、いつより放たれにけるにか。年月の勞にいとこそ辛けれ」とうち歎き給ひつるを、かくなむと聞ゆるなるべし。少將が聲にて、「心知らぬ人の過ちを思し召し咎めすはかひなからまし。されどかりはの小野は習はし聞えまほしうこそ」とて、母屋の御簾おろして入れ奉る。「いとほしたなかりつる御誠ら

道理にはあらず。やがて熾りぬるかな」と、少しうち笑ひ給へる、盡きせずなまめかし。とばかりありて、女官るざり出で給ふ氣色なれば、居直り給ひて、「只今しも出でさせ給ひにける、口惜しう思ひ給へながら、何とかや、なほくしき人のいふなる、年のかぎりの對面も、給はらまほしく侍りつるかな。なか／＼折嬉しく」など聞え給へる、けにとちめ果てぬる残なきも、心細うとばかり、ほのかに紛らはし給へる、聞かまほしうをかしけなり。「身に積る物のはてを知らず顔に、送り迎ふと急ぐならひこそはかなけれ」とて、しめやかに寄り居給ひつゝ、例の昔今の御物語こまやかに聞え給ふにも、かの小野の住居は猶洩らし給はず。さるは共に聞え合はせぬべき人の上なるを、かけてもいひ出でずば、後に聞き給ひて、隔てけりと思さむ苦しけれども、亡くなりし程の有様の怪しさも、自ら隠れなかりけめど、知らず顔にもてなし給へる、我も亦聞えにくき事まじりにたる心地して、まほならで、憂き節にかくこそありけれと聞え出でむも、うつゝ、少なき心地すべし。うち聞き給はむ人の、なのめに思ふべき事の様にもあらねば、片端聞えそめては残なうこそならめ、忍ぶるよしに聞えたる事の、假にも奥なき方はなけれど、宮の御あたりにて、我と定かにいひ出でむことは、もし自ら物の隠れなくて、ほの聞く人もあらばなど、口おもき心地するも、過ぎにし方の憾の猶解けぬなるべし。

源氏物語年譜

○桐壺の卷より幻の卷までは光源氏の君の年立を主とし、匂宮の卷より夢浮橋の卷までは薫君の年立を主として、各巻中の主要なる出来事を按排した。

○この年譜は蘆草（北村久備著）を基礎として、大に増補訂正を加へたるものである。

桐壺帝
御在位

桐壺

源氏君誕生より
十二まで

○桐壺更衣ときめき給ふ

○源氏君生れ給ふ

○源氏君著袴

○桐壺更衣病あり、輦車内裏を退出やがてうせ給ふ。三位を贈らる

○一の宮立坊 (後に朱雀院と申す
(この年立詳ならず、假にこゝに記す))

○源氏君の外祖母桐壺更衣
逝去

○源氏君御書はじめ

人々の齡

源氏君
の齡

歳八 歳七 歳六 歳五 歳四 歳三 歳二 生君源氏

一八歳より十
歳迄の間

つ り き

○年立詳なら
ず

○高麗人
源

○氏君を相
奉る

○世の人光
の

○君と開ゆ
の

○帝此みこ
を源氏に

○おきて給
ふ

○藤壺女御
入内

ぼ

○源氏君元服、その夜左大臣御娘に
に婿とり給ふ
○二條院を造らる

△源氏君十三歳より十六歳までの事もの語なし。

源氏君
中將
年立不詳

今年の春
玉鬘生の
巻夕顔の

歳六十 歳五十 歳四十 歳三十 歳二十 歳一十 歳十 歳九

帯木夏

〔夏〕

○雨夜もの語り品定め
○源氏君方たがへに紀伊守の中川の家によどり、その夜空蟬を見給ふ
○再び同じ家に至り給ふ

空蟬同

空蟬

○帯木の巻の終り中川の家にとまり給ふ夜の事より書きつゞく
○同君中川の家に行き、思ひかけず軒端萩に逢ひ給ふ

夕顔 夏より十月まで

夕

〔秋〕

○源氏君六條わたりの忍びあるきのついでに、大貳の乳母が五條家を尋ねて、夕顔上の家を見いで給ふ
○伊豫介上洛
○源氏君夕顔上の家に通ひそめ給ふ
○八月十五夜同じ家にいたり、その曉夕顔上を某の院にみて宿り、次の夜夕顔上に隠はれて逝去
○源氏君その頃より煩ひ九月廿日の程に全快し給ふ
○藏人少將この頃軒端萩に通ふ
○夕顔上の四十九日の法事、比叡の法華堂にてし給ふ
○十月朔日頃「空蟬君夫の伊豫介に具して任國に下る

夕顔十九

七

顔

〔冬〕

○十月朔日頃「空蟬君夫の伊豫介に具して任國に下る

末摘花

十八の春より十九の正月迄

〔春〕

若紫

三月より冬まで

若

〔春〕

○三月十日あまり源氏君わらはやみ○同晦日加持の爲に北山の聖に詣づ、この時紫上をかいまみ給ふ
○藤壺病によりて三條の宮にまかで給ふ、源氏君密に見奉り給ふ

〔夏〕

六月藤壺御懷妊「三月に成り給ふ云々」

〔秋〕

○七月藤壺内に参り給ふ
○九月廿日の程に紫上の祖母逝去
○十月に朱雀院へ行

す

○臘月夜の頃源氏君忍びて末摘花の琴を開き給ふ
○三月源氏君わらはやみ

〔若紫〕
紫上の祖母の尼四
十ばかり
紫上十ばかり

紫上十ばかり

つ

〔秋〕

○八月廿日あまり源氏君末摘花に逢ひ初め給ふ
○又の日朱雀院行幸の樂人舞人定めあり

む

八

十

源氏君
正三位

紅葉賀

十八の十月より
十九の秋まで

紫

幸あるべしとて舞人
已下才を習ふ
〔冬〕
紫上を二條院に迎へ
給ふ

源氏君
宰相

○桐壺帝の
御讓位朱
雀院の御
受禪冷泉

賀のちみも

〔冬〕
○十月十餘日朱雀院
へ行幸、源氏君頭中
將青海波を舞ふ。そ
の夜源氏君正三位頭
中將正四位下に敍す
○紫上祖母の除服
〔十月晦日か〕

な は

公達舞習ひ給ふ
〔冬〕
○雪の夜末摘花の許
に宿り給ふ
○又「かの紫のゆか
り尋ねとり給ひて云
云」

冷泉院降
誕
源内侍五
十七八

歳

歳九 十

歳十 二

花宴

二十歳の春

〔春〕
○二月廿餘日南殿の櫻の宴あり、その夜源氏君弘徽殿の細殿に忍びて朧月夜に
初め給ふ
○又の日後宴あり

院の立場
この二年
の間にあ
るべし

朱雀院
御在位

葵

廿二より
廿三の正月まで

○三月廿餘日二條右大臣の弓の結に藤の宴あり
△物語なし
△源氏君今年大將に成給へるよし、若菜上に見ゆ

あ ふ ひ

〔夏〕
○「祭のころ云々」
○桐壺帝の後腹の女三の宮齋院に成り給ふ
○齋院第二度の御禊、この日葵上と六條御息所の車争あり
○祭の日紫上髪そぎ
○葵上物のけに煩ひ給ふ

〔秋〕
○葵上御産夕霧誕生
○「秋つかさ召云々」
○八月廿餘日葵上逝去

〔冬〕
○齋宮左衛門府に入りやがて野宮に移り給ふ
○「十月更衣云々」
○源氏君紫上と新枕し給ふ

〔春〕
○正月朔日源氏君参内、大殿にわ
たり給ふ

歳二 十 二

歳一十二

神 廿三の九月より
廿五の夏まで

さ		か	
<p>〔秋〕</p> <p>○九月七日ばかり源氏君野宮に詣で給ふ</p> <p>〔冬〕</p> <p>○同十六日齋宮群行參内、六條御息所そひて伊勢に下り給ふ</p> <p>○十月院帝(桐壺)御なやみ重し</p> <p>○十一月朔日院崩御</p> <p>○十二月廿日藤壺三條の宮に移り給ふ</p>	<p>〔春〕</p> <p>○正月源氏君懶くて籠り給ふ</p> <p>○二月御匣殿(朧月夜)侍になる</p> <p>○齋院御服にており給ひ、權の姫君代りに給ふ</p> <p>〔秋〕</p> <p>○源氏君雲林院に詣で給ふ</p> <p>○菖の紅葉を藤壺に贈り給ふ</p> <p>○「九月廿日云々」</p> <p>〔冬〕</p> <p>○十一月朔日ごろ御國忌(桐壺帝の</p>	<p>六條御息所三十、齋宮十四</p>	<p>二 十 四</p>
二 十 三 歳		二 十 四 歳	

き		花散里			
<p>〔春〕</p> <p>○正月源氏君、藤壺入道宮に参り給ふ</p> <p>○左大臣致仕の表を奉る</p> <p>〔夏〕</p> <p>○雨の夜韻塞の遊し給ふ</p> <p>○朧月夜の侍病によりて里居し給ふ、源氏君忍びて逢ひ給ふ</p> <p>○右大臣源氏の事を太后に訴ふ</p>	<p>花散里 神卷と同じ 五月</p> <p>〔夏〕</p> <p>○五月廿餘日源氏君麗景殿の女御を訪ひ花散里の御方に至り給ふ</p>	<p>一周の御忌に藤壺宮法華八講し給ふ</p> <p>○十二月十餘日藤壺宮結願の日御落飾</p>	<p>須 唐 廿六の三月より 廿七の三月まで</p> <p>〔春〕</p> <p>○源氏君須磨の退居に先立ち所々に詣給ひ、又故院の御墓詣に北山に至り給ふ</p> <p>○三月末つかた源氏君須磨にくだり給ふ</p> <p>〔秋〕</p> <p>○七月朧月夜の侍内裏に歸参</p> <p>○八月十五日夜人々須磨の寓居に京を懐ふ</p> <p>○その頃大貳の一行京へのぼり須磨を過ぐ、娘の五節の君源氏君に歌を贈る</p> <p>〔冬〕</p> <p>○「冬になりて云々」明石入道源氏を埒に望む</p>	<p>須</p>	<p>二 十 五 歳</p>
二 十 六 歳		二 十 五 歳			

磨

〔春〕 ○二月廿餘日云々
 ○大殿の三位中將後致仕大臣宰相に成りて配所の源氏君を訪ひ給ふ
 ○三月朔日源氏君巳の日の被し給ふ
 ○大雷雨

明石

須磨の巻と同じ三月より
 廿八の秋まで

〔春〕 ○なほ雨風やまず神なり静まらず日頃になりぬ

○明石入道いぬる朝日夢の告あるに
 よりて、十三日船を懸うて源氏君
 を明石に迎へ奉る

○卯月になりぬ云々

○大宮朱雀の御母いたく煩ひ給ひ、みか
 ど(朱雀)夢に故院をみて眼を病み
 給ふ

○二條大政大臣薨去

〔秋〕 ○八月十三日源氏君岡邊の宿にいた
 り明石上に會ひ給ふ

〔春〕 ○年かはりぬ云々

〔夏〕 ○主上御惱

(明石)
 明石入道
 六十ばかり

二 十 七 歳 二

蓬生

廿八の秋歸京の頃より
 廿九の四月まで

源氏君
 權大納言

〔蓬生〕

冬に成行
 まにいと
 どかきつ
 ん方なく
 しげに云
 め給ふ云
 立此卷の
 立なり

源氏君
 内大臣

〔蓬生〕
 かの大貳

よ

此卷はもはら常陸宮の姫君の事
 をいひて源氏君須磨に下り給ひ
 し頃よりの事あり、又大貳の北
 方上りてと有は遙に後の事なり

も

〔冬〕 ○十月源氏君八講行ひ給ふ

○霜月ばかり云々

〔春〕 ○年かはりぬ云々

生

石

〔秋〕 ○六月ばかりより明石上懐妊
 ○七月廿餘日源氏君歸洛の宣旨下る
 ○月もたちぬ云々、源氏君明石上
 と惜別
 ○源氏君入洛まづ難波に禊して二條
 院に入給ふ
 ○源氏君御位あらたまりて數より外
 の大納言に成り給ふ
 ○八月十五日源氏君はじめて参内

標

明石巻と同年の十月より
 廿九の冬まで

〔冬〕 ○十月源氏君故院の御爲に八講行ひ
 給ふ

み

〔春〕 ○二月東宮(冷泉院)御元服
 ○同月廿餘日朱雀院御讓位、冷泉院
 即位、承香殿のみこと今上立坊
 ○源氏君は内大臣○左大臣は攝政太
 政大臣○宰相中將葵上は權中納言

(みをつ
 くし)
 冷泉院十
 一
 (同)
 左大臣十
 十三

二 十 八 歳 二

の北の方の
ぼりて驚き
おもへるさ
ま云々より
は遙に後
の事也

〔關屋〕
「かゝる程
に此ひたる
の守老のつ
もりにや云
云」
はこより
うやより
後事

冷泉院
御在位

關屋

みをつくし巻
同年の九月

〔夏〕
○四月源氏君花散里をとひ給ふ道
末摘花に對面し給ふ

關屋

〔秋〕
○九月晦日源氏君石山詣の途に常
陸介入洛
常陸介卒去空蟬君尼に成る云々
是はやうく後の事なるべし

し く つ

〔夏〕
○源氏君二條院の東院を造らる
○三月十六日明石姫君誕生
○五月五日明石姫君五十日に特使
○源氏君東宮を後見
○藤壺宮薄雲准太上天皇
〔秋〕
○八月權中納言の御女入内 四君腹
○源氏君往吉詣
○六條御息所病によりて尼に成りや
がてうせ給ふ 御年三十六
〔冬〕
○「雪みぞれかきくらし云々」
○朱雀院前齋宮を思召す

〔同〕
明石姫君
誕生

十

九

歳

十三

三

繪合

繪合 三十一の三月

〔春〕
○前齋宮入内(秋好中宮と申す又梅壺女御とも)
○三月十餘日梅壺女御と弘徽殿女御と繪合
○院梅壺に繪贈り給ふ
○同月廿餘日御前繪合
○源氏君嵯峨の御堂造らせ給ふ

△物がたりなし

松風

同年の秋

松風

〔秋〕
○二條院の東院造りはて、花散里上を西の對に移し給ふ
○明石上井に母上姫君を具して入洛大堰の家に住む
○源氏君嵯峨の御堂に詣で給ふついでに明石上に對面、又の日桂の院にいたり
遊し給ふ

明石姫君
三歳

十

一

歳

薄雲

薄雲

同年の冬より
三十二の秋まで

〔冬〕
○「冬に成行まゝに云々」
○「しはすにも成りぬ云々」、明石姫君を二條院に移し紫上子養す
○明石姫君著袴
○源氏君大堰に明石上を慰む

雲

〔春〕
○「年かへりぬ云々」
○その頃攝政太政大臣藤原實相の
父君
○三月薄雲女院(藤壺)崩
○次の日桃圓式部卿宮薨の御父
〔秋〕
○秋主上源氏君に讓位を議る
○秋の司召に源氏君太政大臣を固辭すれども聽されず、なほ轎車を聽され給ふ
○權中納言の後致仕
○權中納言の大臣大納言にて右大將を兼ね
○齋院の女御二條院に退出

薄雲女院
三十七

三

十

二

朝顔

薄雲と同年の九月より
冬まで

朝顔

〔秋〕 ○九月權齋院桃園邸にわたり給ふ父君の御服によりて
 その頃源氏君女五の宮に参り又齋院を訪ひ給ふ
 〔冬〕 ○「冬つかた云々」、源氏君又桃園邸にまうで給ふ
 ○源氏君夢に藤壺を見給ふ

少女

三十三の夏の初より
 三十五の十月まで

〔夏〕 ○「更衣の程なども云々」、權齋院除服に源氏君好意
 ○夕霧元服「あさぎにて殿上にかへり給ふ云々」
 ○夕霧字をつく
 ○夕霧察試を突破す

雲居雁十

歳

を

〔冬〕 ○「時雨打して云々」
 ○内大臣后争の故に源氏君を怨む
 ○堰かれたる夕霧雲居雁の歎き
 ○十一月源氏君五節の舞姫に惟光朝臣の娘を奉り給ふ
 ○夕霧五節にことづけ直衣許されて内に参り給ふ
 ○同君の御後見を花散里上に托す
 ○「年の暮には云々」

源氏君
 大政大臣

夕霧君
 元服

歳 三 十 三

玉

三十四より
 三十五の十二月迄

はじめの夕顔上の事より玉鬘の
 君四歳にて筑紫へ下り十歳の時
 少貳死したりし事などははるか
 に前の事なり

○玉鬘二十ばかり

（をとめ）
 式部卿宮
 四十九
 紫上の父
 宮
 玉鬘君二
 十ばかり

歳 四 十 三

〔春〕 ○三月肥後の大夫監玉鬘に心をかけ
 て肥前に来る

〔夏〕 ○玉鬘四月廿日の程に大夫監が迎へ
 んとするをいとひて京に逃れ九條
 に居る

（玉かつ
 ら）
 大夫監三
 十ばかり

三

〔秋〕 ○玉鬘八幡に詣で又初瀬に詣で右近
 に逢ふ

○右近源氏君に玉鬘發見のことを申
 す
 ○「九月云々」

同
 紫の上廿
 七八

五 十

と

〔春〕 ○「朔日にも云々」
 ○三月朱雀院に行幸、この日夕霧進士に成る

〔秋〕 ○秋の司召に夕霧侍従になる
 ○源氏君六條院を造り給ふ

〔春〕 ○「年かへりては云々」、式部卿宮
 紫上の
 五十の御賀の御いそぎ
 父宮

〔秋〕 ○八月源氏君六條院を造りはて
 わたり給ふ、其夜紫上哭の町、
 花散里上良の町に移る
 ○五日六日過ぎて秋好中宮坤の町
 にまかで給ふ

め

源氏物語年譜

夕霧君
 侍従

（玉かつら）
 はたちか
 りに成給ふ
 まゝにおひ
 とまのほり
 てとくあた
 らしいとめ
 たしくめで
 こゝより
 此巻の年
 立也

夕霧君
 中將

五

	○中宮紫上に紅葉を贈り給ふ 〔冬〕 ○十月明石上六條院の乾の町に移る	
	ら	
	○夕霧中將 ○玉鬘を右近が里の五條の家に移す 〔冬〕 ○十一月玉鬘を六條院にむかへ花散里に托し給ふ○年の暮には云々」 女方の衣配り	歳

初音 三十一の正月

〔春〕 ○年立返るあしたの空の云々、六條院の元日の賀儀

○源氏君御方々の参座

○明石姫の童小松曳き遊ぶ

○正月二日六條院臨時客

○源氏君東院を訪ひ給ふ

○男踏歌あくる日後宴あるべし云々」

胡蝶 同三月四月

○三月廿餘日六條院春のお前の御遊

○次の日秋好中宮の季御讀經のはじめ

〔夏〕 ○衣更の今めかしう云々」

○人々鬘書を玉鬘におくる

○雨の夕べ源氏君玉鬘の手を執りて戀を語り給ふ

螢 同五月

十

三

歳

螢

○不可解なる源氏君の態度

○五月五日源氏君馬場殿に出給ひ騎射あり

○内大臣娘達の不遇に玉鬘を懐ふ

常夏 同夏六月と聞ゆ

○いとあつき日云々、六條院釣殿の納涼

○近江君の事

○源氏君と内大臣との疎隔

○源氏君琴に托して玉鬘に近づき給ふ

○内大臣源氏君と玉鬘とを嘲る

篝火 同秋七月と聞ゆ

〔秋〕 ○「秋にも成りぬ云々」

○初秋源氏君琴に托して玉鬘を訪ひ給ふ

○柏木玉鬘に懸想

野分 同八月

○「八月云々、野分例の年よりもおどろしく云々」

○夕霧ゆくりなく紫上を隙見す

○源氏君玉鬘に戯れ給ふ、夕霧疑ふ

行幸 同十二月より三十七の二月まで

〔冬〕 ○源氏君玉鬘の處置に迷ひ給ふ

○十二月大原野の行幸

み

源氏物語年譜

六

歳

ゆき

〔春〕 ○「年かへりぬ云々」
○二月朔日源氏君大宮の病を訪ひ、内府に對面玉鬘の事を語り給ふ
○源氏君内大臣との交情回復
○同月十六日玉鬘哀著

藤袴

〔秋〕 三十七の九月まで

○夕霧宰相中將
○八月十三日玉鬘祖母大宮の服ぬぎ給ふ大宮は三月廿日にうせ給ふ
○玉鬘侍十月には内に參り給ふべきよし定めあり
○鬘黒大將柏木に玉鬘の謀介を頼む

袴

檣柱

〔冬〕 同冬より三十八の冬まで

○玉鬘鬘黒大將に逢ふ
○源氏君婚儀を取計ひ給ひ、帝失望し給ふ
○「霜月に成りぬ云々」
○鬘黒の身兵部卿宮憤りて北方を迎取り給ふ、姫君眞木柱のこと

らしば

〔春〕 ○「年かへりて云々」、男踏歌あり、玉鬘侍その程に入内承香殿の東面を曹司とす、又三位に敘す
○玉鬘内より直に鬘黒大將の家に退出
○「二月にも成りぬ云々」
○「三月に成りて云々」
〔冬〕 ○十一月玉鬘男子を産むと申す後右兵衛督

卅鬘黒大將
北の三方
はつが
四つが
兄三木柱
り三木柱
息十黒のか
藤十黒のか
言中納
左八つ
大辨

三十七 七 十 三 歳

三十八 八 十 三 歳

梅枝

〔春〕 三十九の春三月なかばまで

○正月晦日源氏君の薰物合
○二月十日營兵部卿宮六條院にて御方々の薰物を判じ給ふ
○明石姫君御衰著
○同月廿餘日東宮御元服(後今上と申す)、左大臣の三の君參り麗景殿と聞ゆ
○源氏君草子を蒐め給ふ
○「花ざかり過ぎて云々」、源氏君兵部卿宮と書道を語り給ふ

枝

藤裏葉

同冬より十月まで

○三月廿日大宮の御忌日内大臣(致仕)極樂寺に詣づ
○四月七日藤の花盛りに内大臣夕霧を招きその夜雲居雁君に逢はす
○「同八日灌佛云々」

裏葉

〔秋〕 ○紫上加茂のみあれに詣づ
○同月廿餘日明石姫君入内
○源氏君太上天皇に准ず○内大臣太政大臣、夕霧中納言
○夕霧夫婦三條殿に移る

葉

〔冬〕 ○源氏君、明年四十に成り給ふべければ云々」
○十月廿餘日六條院に行幸

若菜上

同冬より四十一の三月まで

○「年も暮れぬ云々」、女三宮御衰著三日過ぎて朱雀院御落髮
○夕霧、廿にもまだわづかなる程なれど云々」ことし十八
○朱雀院女三宮を源氏君に托し給ふ

三女三宮十
四ばか

三十九 九 十 三 歳

源氏君
准太上天皇
夕霧君
中納言

夕霧君
右大將

わ 上 な か

<p>〔春〕 ○「年もかへりぬ云々」、源氏君四十に成り給ふ ○正月廿三日艶黒の北方玉かつ源氏君の四十賀行ふ ○二月十餘日女三宮六條院に移り給ふ ○此月朱雀院御寺に移ろひ給ふ ○源氏君忍びて二條宮にいたり臘月夜尙侍に逢ひ給ふ 〔夏ごろ云々〕、明石女御懷妊退出 〔秋〕 ○十月紫上源氏君の御賀に嵯峨の御堂にて薬師佛供養行ふ ○同月廿三日二條院にて同君の御賀あり ○十二月廿餘日秋好中宮同じ御賀せさせ給ふ ○その頃夕霧右大將 ○内より源氏君の御賀あり</p>	<p>〔冬〕 ○「正月朔日云々」 ○「二月ばかり云々」 ○三月十餘日明石女御男みこ産み給ふ<small>後東宮に立ち給ふ</small> ○六條院にて鞠の興あり、柏木右衛門督仄かに女三宮を見奉る</p>	<p>若菜下 上の巻と同じ三月晦日より 四十七の十二月まで ○三月晦日六條院にて賭弓射る ○登兵部卿宮眞木柱の姫君に通ひそめ給ふ ○「はかなくて年月もかさなりて云々」 △四十二より四十五まで四年の間は物語なし</p>	<p>東宮降誕</p>
<p>四 十 歳</p>	<p>四 十 一 歳</p>	<p>四 十 二 歳</p>	<p>四 十 二 歳</p>

今上
御在位

夕霧君
大納言左
大將

な か

<p>〔冬〕 ○「冷泉院即位より十八年云々」 ○同帝御讓位春宮受禪<small>今上と一宮立坊</small> ○太政大臣致仕の表を奉る、艶黒右大臣になり關白す、夕霧大納言の左大將 ○十月中の十日源氏君の住吉詣、明石女御紫上を伴ひ給ふ ○女三宮二品になり給ふ ○源氏君女三宮に琴の秘手を教へ給ふ ○明石女御懷妊退出 ○「年の暮つ方は云々」</p>	<p>〔春〕 ○「年かへりぬ云々」 ○正月廿日ばかり源氏君女樂を催し給ふ ○「紫上御胸をなやみ給ふ云々」、朱雀院の御賀の日なり</p>	<p>一女子三宮廿 り二宮か</p>
<p>四 十 六 歳</p>	<p>四 十 五 歳</p>	<p>四 十 四 歳</p>